

ノ金額ヲ超過シタル時ハ負債者其超過シタル額ニ對シ更ニ保證ヲ立テサルヘカラス如  
此キ場合ニハ即其超過額ヲ以テ訴訟物件トナスヘキナリ

〔第七解、抵當權〕 抑抵當權ナル語ハ「ヒポテーク」實「アンナクレセ」債主利子ニ代ヘテ其使用ノ利益ヲ得ル抵當方法及ヒ商人間ニ於テハ多ク「デポジット」預稱呼スル所ノ動産質ヲ概括スルナリ右等ノ抵

當權ニ關シテ起訴スル時其訴訟物件トナスヘキモノハ即其請求價額カ抵當物品ノ價額  
ヲ超過スル場合ニ限リテ請求價額ヲ以テス否ラサル場合ニハ抵當物品ノ價額ニ依ル是

ニ於テ裁判官ハ抵當權ニ係ル訴訟ノ起ル毎ニ必ス其抵當物品ノ價額ヲ調査スルヲ要ス  
〔本法第三條ニ依ル〕且本法第二百三十條第二項ニ照シ抵當物品ノ價額ヲ訴狀ニ明示セ

シメサルヘカラス裁判官ハ其明舉シアル所ニ就テ請求價額ト抵當物品ノ價額トヲ比較  
シ孰レカ寡額ナル乎ヲ調査シ以テ其寡額ナルモノニ從テ裁判所ノ管轄權限ヲ定ムヘキ

ナリ例ヘハ抵當家屋ノ所有者ニ對シ抵當貸金ノ殘額五十「マルク」ヲ請求スルノ訴訟ナ  
ルキハ假令其家屋ハ數千「マルク」ノ價値アルモノナリモ尙ホ區裁判所ノ管轄ニ屬ス又

商人ノ販賣代理人カ自ラ尙ホ預リアル物品二百「マルク」ノ價値ノモノニ對シ五百「マル  
ク」ヲ立替アリトテ請求スル場合ニ於テモ亦右ニ同シ即前ノ例ハ請求價額ノ寡キニ依  
リ後ノ例ハ抵當物品ノ寡額ナル價値ニ據ルノ趣旨ナリ然リ而シテ請求價額及ヒ抵當物

品ノ價額共ニ二百「マルク」ヲ超過シタル時ハ其孰レノ價額モ敢テ訴訟物件ノ管轄上ニ  
影響ヲ及ホス所ナシト雖モ大審院ニ上告スルニ付テハ其價額ニシテ本法第五百八條第  
二項ニ准シ其請求價額若クハ抵當物品ノ千五百「マルク」以上ニ超過スルト否ラサルト  
コ因テ大ニ關係スル所アルヘシ

〔第八解、抵當登記公簿ノ取消及ヒ減額更正〕 土地書入質ヲ爲シタル者己ニ其借用金ノ  
返濟ヲ遂ケタルキハ抵當登記公簿ノ取消ヲ請求シ得例ヘハ一万「マルク」ノ價値アル家

屋ニ對シ二百「マルク」ノ抵當貸借ヲ登記シアルモノニシテ其取消ヲ起訴スルキハ即二  
百「マルク」ノ額ニ依ルヘシ何トナレハ是レ原ト抵當權ニ關スル訴訟ナレハナリ即本條

ノ恰モ適當スル所トス必竟抵當ノ責ハ其物件ノ以テ分ツヘカラサルニ因テ全部ニ涉リ  
アルト雖モ訴訟ハ二百「マルク」ニ付テ起ス所ナリ此場合ニ於テ復々上告額ニ付テ

疑議ヲ生スヘシ而シテ是ニ付キテハ本法第五百八條第二項ニ於テ第三條乃至第九條ニ  
推移スル所アルカ故ニ今茲ニ説明スヘシ

乃例ヘハ抵當ノ保證ヲ立テアルモノニシテ二千「マルク」ノ額ヲ請求スルニ反テ被告ハ  
其額ヲ五百「マルク」マテ償却シタリト抗爭スト云フテ起訴スル時ハ公簿ノ登記額ハ二

千「マルク」ナルカ故ニ此額ヲ以テ訴訟物件ノ價額ト定ムルハ勿論ナリ然レモ又被告カ  
四十五

自ラ未タ償却セスト云フ五百「マルク」ノ金ニ付キ専ラ争訟ヲ爲スルハ則訴訟物件ノ價額ハ五百「マルク」ナルヘシ乃上段ノ場合ナレハ上告額ヲ爲シアリト雖モ後段ノ場合ニ在テハ上告額ニ違セサルナリ而シテ「バデン」國裁判年報第三十九卷及ヒ第四十卷ニ依レハ同國高等法院カ同國訴訟法第十五條第二項ノ文義ヲ彼我背馳セルニ様ノ義理ニ解釋シタル例ヲ擧ク乃公簿登記ノ取消ニ關スル起訴ニ付キテハ其登記シアル價額ニ依ルモノト判決シ又之ニ反シテ抵當債主カ主張スル所ノ返辨ノ殘額ナリト云フ價額ニ依ルヘシト判決シアリ

實ハ訴訟物件上ノ管轄ヲ定ムルカ爲メニスルニハ必ズ其未タ公簿ニ取消シアラサル所ノ原告カ請求スル價額ニ依ラサル可カラサルナリ何トナレハ本法第二百三十五條第二ニ依リ被告カ抗辨スル所ハ預メ之ヲ知り得ヘカラサレハナリ然レモ上告ニ付キテハ必ズ本法ニ依ラサルヘカラス故ニ特リ上告シテ争フニ足ルノ價額ナルト否トヲ調査スルヲ要スルナリ

各聯邦法ニ於テ多クハ許シアル夫ノ抵當公簿ノ登記價額ノ減却ニ因リ登記更正ニ關スル訴訟ニ付キテハ數個ノ物品チ一ノ抵當ト爲シアル中ヨリ一個ノ分ヲ受戻シタリト云フモ又ハ一個ノ物品チ一ノ抵當ニ入レアリタルモノニ就テ抵當金額ノ幾分ヲ減却セシ

ト云フモ更ニ異同アルコトナシ乃請求ノ價額ト抵當物品ノ價額トヲ相比較シテ必ズ其價額ノ寡キニ依ルモノナレハナリ例ヘハ抵當負債者カ債主ノ要求ニ因リ抵當借用金ノ内金ヲ拂込額ノ計算書寫ヲ請求スルニ方テ抵當債主苦情ヲ唱ヒ之ヲ承諾セサルニ關スル訴訟「サククセン」國民法第四百五十九條ノ如キハ必シモ其拂込ミタリト云フノ價額ニ依ラサルヘカラスルコト非ズ之ヲ抵當物品ノ價額ニ比較シテ其低價ナル時ニ限ルヘシ

〔第九解、抵當物品ノ價額〕物品ノ價額ト云ハ即其市場交通相場ノ價值ナリト解スヘキヲ以テ其物品カ負荷シアル抵當義務ノ金額ニハ相關係セス是固トヨリ交通上ノ價值トハ自ラ別異ナレハナリ例ヘハ三萬「マルク」ノ交通價值アル家屋ニシテ二萬五千「マルク」ノ抵當義務ヲ負荷シアリテ而カモ抵當債主中ノ原告六百「マルク」ノ額ニ因テ先取權ヲ有スル場合モ固トヨリ地方裁判所ノ權限ニ歸スルヲ當然トス〔譯者案、六百「マルク」ハ賣買ノ價額ヲ動カサハルノ義乎〕然レハ地役又ハ家税ニシテ抵當物品ニ係累シアルキハ上ニ異ナリ何トナレハ地役家税ハ其賣買價值ヲ減却セシムルモノナレハナリ

〔第十解、先取權ニ付キテノ争〕抵當物品ヲ公賣シテ獲タル金額ヲ領得シテ請求權ヲ甘シセントスル債主二人ノ間ニ起ル金額ノ先取權ニ關シ争フ訴訟ニ付キテ其訴訟物件上ノ管轄及ヒ上告額ヲ定ムルコト只二人ノ孰レノ一方ニテモ領収シテ妨ケナキ金額ノ額ヲ以

テ標準トナス例ハ第二番第三番ノ抵當債主カ互ニ第一番抵當債主ノ受取リ了リタル  
 殘剩額二百マルクノ先取ニ付テ争フ時ハ此二百マルクノ額ニ依ルヘクシテ當初ノ請  
 求價額ヲ以テ訴訟物件ノ價額トハナサス是ノ如キハ即抵當權ハ只ニ起訴ノ理由ニシテ  
 而カモ訴訟ノ物件ニ非サルナリ蓋此請求價額ハ本法第七條ニ於ケルニ同シク訴訟物件  
 上管轄ヲ定ムルノ額トナスヘカフス何トナレハ抵當物品ニ代リテ其價金ヲ生シ此價金  
 中ヨリ之ヲ領得シテ甘セントスルノ價額ニ付テ相争フ所ナレハナリ此趣義ハ帝國分散  
 法第三百三十六條ヲ以テ分散ニ關シ規定シアル所トス

第七條 (地役ニ關スル條)

地役ノ價額ハ主地ノ爲メ地役ノ有スル價額ニ依テ之ヲ定ム若シ地役  
 ノ爲メ役地ノ價額ヲ減少スル額其價額ヨリ大ナル時ハ減少スル額ニ  
 依リ之ヲ定ム

〔第一解、理由ノ説明〕 本條ノ理由タルヤ他ノ法規ニ於テ既ニ著明ナル所ニシテ即地役  
 ナルモノハ幾ント其價値ナキモノ多ク且是ニ關シ紛争ヲ生シ起訴スルニ至ルモ亦甚タ  
 多カラサルナリ○「バイルン」國訴訟法第五條ニ於テ凡ソ有形物件ニ關スル訴訟ハ一切  
 單獨裁判官ノ權限ニ歸セシメサル由縁ニ至テハ頗ル了解シ難シ

〔第二解、地役〕 本條ニ於テハ主地及ヒ役地ヲ概稱スル所ニシテ即地役ナル語ハ「サツク  
 モ」國民法第五百三十五條ニ於ケルカ如ク獨乙普通法ノ義理ト同一ニ土地ニ屬スル  
 地役ノ義ニシテ土地ニ屬セサル〔人ニ屬〕地役ハ之ヲ包含セサルナリ蓋土地ニ屬セサル  
 地役ニ付キテハ己ニ本法第六條ノ第三解ニ述フル如ク若シ物件保有ニ係ル時ハ則第六  
 條ニ據ル可キモノナリ○法朗西民法ニ照セハ乃本條ノ趣義ハ所謂ノ法律上地役ニマテ  
 及ホシテ之ヲ適用セシメ得ル乎否ノ區域ニ付キテ疑團ヲ免カレス何トナレハ法律上地  
 役ナルモノハ本然ノ地役併ニ所有ニ對スル法律上ノ制限ニ非サレハナリ然リト雖モ法  
 朗西民法第六百三十七條乃至第六百三十九條及ヒ其標題ニ地役即地務ト明示スル所ヲ  
 見レハ復タ自ラ法律上地役ヲモ相包含セシメアルコトヲ知ルヘシ是ニ依テ法朗西民法第  
 六百五十條ノ如キハ現ニ主地ノ之レアルニ非サレモ然カモ若シ主地ノ現在スル場合ニ  
 限リテハ本條ヲ法律上地役ニ適用シ得ルモノト爲スニ足ルヘシ且孛漏生内國通法第二  
 十篇第一章第一條以下ニ於テモ土地ノ權利即「土地ニ屬スル地役」ノ外尙ホ「所有ニ對ス  
 ル止ヲ得サルノ制限」ヲモ包含スルノ趣旨ナリト解シテ可ナリ

〔第三解、小作〕 小作ハ素トヨリ地役中ニ算入スヘキモノナラス蓋地役ノ資質タルヤ役  
 地ノ忍容上ヨリ成立ツモノナレハナリ「サツクセン」國民法第五百二十二條ニ而シテ小作

ニ付キテハ多クハ本法第九條ノ規定ニ依ラシムヘク其餘主地及ヒ役地ノ現在スル場合ニ限リテハ本條ニ准據セシメテ固トヨリ妨ケス

〔第四解、世襲貸地、永世貸地（永小作）地上ノ現在物（家屋又ハ）〕是等ハ亦地役ニ屬セスシテ

反テ分カタルタル所有權ノ部類ニ屬ス而シテ主地ノ現在シアラサルヲ以テ復タ本條ニ依ラシムヘキモノナラス蓋裁判官ハ猶ホ物件ノ所有ニ付キ其價額ヲ定ムルカ如ク是等

ニ關シテハ其權利ノ價額ヲ評定セサルヘカラス而シテ此權利ノ價額ハ本法第三條ノ第六解ニ述フル原則ニ從ヒ亦多クハ必ス物件ノ價值ニ基ツクヘキナリ

〔第五解、地所〕本條ノ地所ト云フハ即凡ヘテ現在有形ノ指示シ得ヘキ各不動体ヲ概括スルノ義ナリ南部獨乙ニ於テハ往々土地上ノ現在不動物ヲ包有セシメスト雖モ北部獨乙ニテハ多クハ地盤家屋或ハ庭園ヲ概括セシムルナリ

〔第六解、増額、減額〕本法第六條ノ抵當權ニ關スル訴訟ニ付キテハ其寡少ナル價額ニ從フト雖モ本條ニ於テハ即地役ニ因テ主地ノ價ヲ増ス所ノ増額若クハ役地カ被ムル減額ノ孰レカ大ナル價額ニ依ルヘキナリ抑、此價額算定ハ往々困難ナルコトアルヘシ然レモ若シ主地役地共ニ三百「マルク」ノ價額ナキモノナルハ更ニ困難アルコトナシ此場合ニ於テハ到底地役ノ價額ハ二百「マルク」ニ達スヘカラサレハナリ

必竟地役ノ價額算定ニハ特リ其地所ノミニ從フテ而シテ必ス須ク所有者カ曾テ受クル利益上ニ及ホスヘカラサルコトヲ看過スヘカラス例ヘハ小園庭ノ用ニ供スル爲メ建築セサルノ地所ノ地役三百「マルク」ノ價額ナリ然ルニ其所有者ハ此園後ニ一ノ居宅ヲ有スル場合ノ如キ即其居宅アルノ狀況上ニ涉リテ價額ノ算定ヲナスヘカラサルナリ

第八條 〔土地其他ノ賃貸賃借ニ關スルノ條〕

借地又ハ賃貸賃借ノ關係ノ現存又ハ其繼續ニ關シ争フ訴訟ニ付キテハ其全期ニ收入スル賃料ノ額ニ依テ價額ヲ算定シ若シ一ケ年賃料ノ二十五倍ノ額はレヨリ寡キ時ハ其寡キ額ニ依ル

〔制定ノ沿革〕抑、本法編纂ノ參考ニ供セル四種ノ草案ニ於テハ第一條乃至第十三條ハ皆同一文義ナリ獨リ北部獨乙聯邦訴訟法草案ハ僅ニ行文ノ体裁ニ異同アルノミ而シテ國議院委員ノ筆記録ニハ異論ナク採用ノ旨ヲ登記シアリ〔筆記録ノ參照ニ付キテハ本法第十條第二解參考〕

尙ホ以下ノ各條ニ於テハ制定ノ沿革ヲ要トスル別段ナル事由アルキニ限リ之ヲ引用ス

〔第一解、裁判所編制法トノ關係〕裁判所編制法第二十三條第二ニ於テ訴訟物件ノ價額

ヲ問ハス區裁判所ノ管轄ニ屬セシメアルモノハ即

家宅其他建造物ノ貸主ト借主トノ間ニ於テ其引渡、使用、明渡ニ關シ併ニ借主カ借  
宅内ニ持込ミアル物件ノ引留ニ關シ起ス訴訟

雇主ト雇人トノ間及ヒ工業主ト勞役者トノ間ニ於テ其傭入及ヒ勞動ニ關シ併ニ營業  
規則第百八條ニ掲ケタル事件ニシテ其傭入、勞役又ハ見習ノ期限中ニ生シタル訴訟  
ナリ

其之ヲ區裁判所ノ管轄ニ屬セシメタル理由ハ其説明ニモ示スカ如ク如此キ訴訟ハ輕微  
ナル事件ニテ固トヨリ合議裁判所ニ相當スルコトナキモノ又ハ迅速周到ヲ要シ且局地ノ  
狀況ヲ熟知スル裁判所ノ裁判ニ付スルヲ良トスルモノナルカ故ナリ

而シテ裁判所編制法ニ於テハ只ニ家宅ノ賃借ニ付キテノミ規定シテ地所ノ賃借併ニ動  
産ノ賃借ニ付テハ一モ規定セサルナリ

之ニ反シ勞力ノ賃借ハ裁判所編制法ノ規定中ニ屬セシムルヲ例トス而シテ營業規則第  
百二十六條ニ掲載スル各人ニ關シテハ之ヲ例外トス又營業規則第百八條ニ付キテハ本  
法第十二條ノ第六解ヲ參照スヘシ

〔第二解、賃賃賃借ノ關係〕 勞力ノ賃借（法朗西民法第千七百八條）ハ本條ノ第一解ニ依

ルキハ則裁判所編制法ニ於テ判然區裁判所ノ管轄ニ屬セシメアラサルカ如ク然レモ又  
本條ニ於テ賃料ナル語ヲ用ヘアルヲ見テ本條ニ勞力ノ賃借マテ包含シアルモノト誤解  
スヘカラス蓋賃料トハ只ニ眞ノ物品ノ賃借ニノミ適當スルノ語ニシテ己ニ孛漏生内國  
通法第二十一篇第一章第二百五十八條併ニ「サツクセン」國民法第千八百八十七條ニ載スル  
所ニ依テモ亦然ルナリ殊ニ此賃賃借ノ物品ハ動産不動産ヲ包括スルナリ又ウインドシ  
ヤイド氏ハ其羅馬法釋義第二卷第三百九十九條ニ於テ「ロカチオ、コンジユクチオ、オペ  
リス」ヲモ勞力ノ賃借ニ包含セシメントノ說ヲ爲シアレモ此語ニ對シテハ通例「勞役受  
賃ノ約」ナル語ヲ以テ譯シアリテ殊ニ賃料ニハ毫モ關係ヲ有セサルモノナリ

〔第三解、地所賃賃ノ關係〕 抑、地所ノ賃賃ノ關係ナル語ハ前項ニ掲ケタル孛漏生内國通  
法及ヒ「サツクセン」國民法ニ據レハ則收穫物ヲ産殖スヘキ動産又ハ不動産ヲ賃與シ其収  
穫物ヲ收入スルノ目的ヲ以テ賃賃ヲ契約スルノ義ナリ之ニ反シ「バデン」國法第千七百  
十一條第二ニ依レハ田野ノ賃賃契約ヲ指シテ地所賃賃ノ契約ト云フトアルナリ是故ニ  
牧羊ニ付キ其蓄息ヲ目的トナス賃賃ノ契約ハ「バデン」國ニ於テハ地所賃賃契約中ニ算  
入セズ

如此ク法律用語ノ獨乙國內ニ異同アルモ必竟本條ニ於テハ敢テ大ナル關係ヲ有セサル

ナリ何トナレハ本條ハ素トヨリ「賃貸」ヲ包括シアルノミナラス本法ノ第一草案ハ字漏生國ノ起案ニ係ルヲ以テ即字漏生國ノ用語ノ趣義ニ據レルモノト認メ得ヘキカ故ナリ

〔第四解〕現存又ハ其繼續〕本條ノ趣義ハ特ニ地所ノ賃貸又ハ賃貸賃借ノ現存若クハ繼續ニ付キテノ訴訟ノミニ對スルニ在テ而シテ裁判所編制法第二十三條ト相撞着セシムヘカラス乃其以テ相異ナル所ハ借家又ハ借宅地ノ引渡シ、使用、明渡シノ訴訟ノ原因カ本條ニ明示スル所ノモノト別異スルモノヲ裁判所編制法ニ於テ明定スト見做スヘケレハナリ然レモ又顧テ裁判所編制法第二十三條ノ明文ニ於テハ確然右ノ區界ヲ判別セルトモ見ルヘカラス例ヘハ明渡シノ訴訟ノ如キ多クハ原告告問ニ於テ賃借契約ノ繼續期限ニ付キ其意見ヲ異ニスルヨリ起ルモノナレハナリ然リ而シテ本條ニ於テハ必ス裁判所編制法第二十三條ニ掲グル總テノ場合ヲ避ケテ實際之ニ干カラサルコト固トヨリ爲シ能ハサル所ナルヤ顯然タリ但裁判所編制法全條ノ説明ニ於テ凡ソ本然ノ契約ニ關スル訴訟ハ舉テ之ヲ該條ニ包容セシムルノ義ニ非スト云ヘルハ蓋妥當ト爲スヘシ

必竟契約ノ現存又ハ繼續ニ付キテ如何ノ理由ヨリ爭訟ヲ起シタル乎ハ敢テ問フヲ要セス元トヨリ其別ヲ立テサルナリ是故ニ原告又ハ被告カ解約ノ豫告或ハ契約ノ無効力或ハ賃貸繼續ノ默諾ニ付キテ主張スル場合ニ於テモ亦本條ニ依ルヘキナリ

〔第五解〕賃借ノ賃料及ヒ地所賃貸ノ賃料〕賃料ハ貨幣ニ非サル他ノ物品ヲ以テスルモ固トヨリ妨ケサルナリ〔サツクセン〕國民法第千九百九十九條法朗西民法第千七百八條以下及ヒ第千八百條以下參考〕而シテ字漏生內國通法第二十一篇第一章第二百六十二條ニ依レハ必ス貨幣ヲ以テ受授スヘキノ義ナリ假令本條ノ賃料ハ字漏生內國法ノ義理ナリト爲スモ本條ヲ適用シテ更ニ妨ケナシ乃裁判官ハ先ツ其借主ヨリ納ムル貨幣ニ非サル供給物ノ價額ヲ評定スレハナリ

又契約ノ繼續ニ付キテノ訴訟ニシテ其期限二十五ヶ年ヨリ短キ場合ニハ則契約者間ニ収支スヘキ賃料ノ總額ニ依リ若シ二十五ヶ年ヨリ長キ時ハ一ヶ年賃料ノ二十五倍ノ額ヲ限リテ之カ標準トナスナリ

然レモ若シ其賃料ノ年額時トシテ變換スル場合ニハ之ヲ如何セン乎例ヘハ舊武士族地ノ賃貸料ノ如キハ契約期限年中ニ於テ賃料ノ高低スルコト往々尠ナカラサルナリ而シテ此法律ハ永ク一定不變ナル賃料ヲ指スハ固トヨリ顯然ナリト雖モ又法律ノ原則ニ於テ裁判官ハ〔本法第三條ノ如ク〕法律ノ明文ニ示定シアラサル場合ニ方テ任意算定シテ其價額ヲ定メ得ルモノナレハ即如此キ變動アル賃料ニ就テハ其爭訟ヲ起シタル年ノ一ヶ年分ヲ二十五倍加算シ其積數ヲ以テ訴訟物件ノ價額ト見做スヲ得ルナリ

〔第六解、地所ノ世襲賃貸及ヒ永代賃地〕此兩件ハ物上權ニ係ルモノニシテ必ス賃借及ヒ地所ノ賃貸ト云フモノト區別セサルヘカラサルモノナリ

第九條 〔復歸ノ使用又ハ供給ニ關スル條〕

復歸スル使用又ハ供給ニ關スル權利ノ價額ハ一ケ年間收入ノ價額ニ依ル即

收入權ノ將來消滅スヘキコトハ確然ナルモ其消滅期限確然ナラサル場合ハ一ケ年收入ノ十二半倍ノ額

收入權ノ期限定期ナキ時又ハ確定シアル場合ハ二十五倍ノ收入額ニ依ル但收入權ノ期限確定シアリテ其將來收入ノ總額二十五ケ年分ノ額ヨリ寡額ナル時ハ其寡額ニ依ル

〔第一解、理由ノ説明〕

一三ノ訴訟法又ハ訴訟草案法「バイルン」國訴訟法第四條「ウィルテムベルグ」國全法第二十一條第三字漏生國全法草案第四十九條「ハンノフル」國全上第六

條第三北部獨乙聯邦全上第十二條第六ニ於テハ本條ノ規定ニ補足シテ復歸スル使用權

ニ關スル訴訟ニ付キテハ法律上相當ト定ムル使用權解除ノ補償金額ヲ以テ訴訟物件ノ價額ト算定スヘトノ明文ヲ以テセリ然ルコ我カ本法ヲ編纂スルコ方テ是カ異見ヲ立

テ採用セサル由縁ハ即實際各聯邦ニ於テ此權利解除ノ補償金額ハ區々ニ定メアレハ獨乙帝國内ニテ其實同一ノ價値ヲ有スル權利ニ係ル訴訟ニシテ反テ同等ナラサル裁判所ノ管轄ニ歸スルノ結果ヲ成スノ悞アルコ在リ加之權利解除價額ノ算定ハ頗ル重難ニシテ且紛議ヲ免カレ能ハサル場合往々ナリ例ヘハ千八百五十年三月二日頒布ノ字漏生國法律ニ於ケル如キハ或ル場合ニシテ權利解除ニ付キテ發言スルヲ得ルノ前後ハ權利者ニ在ル乎將タ義務者ニ在ル乎又ハ其解除ノ補償ニハ土地ヲ以テスル乎貨幣ヲ以テスル乎將タ収獲ヲ以テスル乎或ハ其解除ニ得ヘキ權利ハ是カ補償義務ト相連續シテ分離スヘカラサル乎等ノ疑義ヲ免カレサル所アルナリ

〔第二解、權利ノ價額〕

北部獨乙聯邦訴訟法草案第十二條第六ニ復歸スル使用又ハ供給

ニ關スル權利、訴訟物件ナル時ハ云々ト明記シアリテ本條ノ行文ヨリハ寧ロ明瞭ナリ

ト云フヘシ必竟本條ノ趣義ハ必ス其權利ニ付キテノ爭訟ナラサルヘカラス而シテ供給

又ハ使用ノ淹滞殘分ニ付キテノ訴求ハ此場合ニハ本法第四條ニ依リ附帶ノ訴訟トシテ

之ヲ算外ニ措クヘキモノニテ而シテ若シ單ニ使用又ハ供給ノ不足殘分ニ關スル訴訟ナ

レハ其殘分ノ全額ヲ以テ請求ノ價額ト定ムヘキナリ〔本法第四條第一解併ニ第五條第

六條參照〕

〔第三解、使用又ハ供給〕<sup>メウツラゲン</sup> 本條ニ使用トアルハ本條第四條ノ第三解ニ述フル所ニ異ナル義理ヲ包含シアルモノニシテ而シテ其特別ノ義理ヲ含ムニ付キテ「復歸スル」ト云フ語ヲ冠セシメテ之ヲ明別セリ蓋本條ノ使用又ハ供給タルヤ本法第四條ニ於ケルガ如ク他ノ主タル權利ニ附從スル權利ノ義ニハ非スシテ一ノ獨立スル權利ヲ云フナリ例ヘハ原告カ貸付元金ヨリ生スル一ケ年百分三ノ利子ニ付キ請求シ且其訴求貸借ノ關係上ニマテ及ホス時ニ限り其利子ノ二十五倍ノ額ヲ以テ訴訟物件ノ價額ト爲サス反テ元金ノ額ヲ以テ標準トナス

而シテ此獨立ナル權利タルヤ復歸スルモノ即一定ノ時限アル性質ヲ有スルモノナラサルヘカラス且其使用物件ノ保有ニ波及スヘカラス蓋保有ニ付キテハ本法第六條ニ依ラサルヘカラスレハナリ〔第六條第三解參照〕

又此權利ニ關シ起ス請求ノ理由如何ニ原因スルトモ敢テ之ヲ問フヲ要セス乃契約上又ハ遺言上ノ年金其他小作及ヒ利子又ハ町村共同ノ森林ノ材木伐用ニ關スル町村民ノ物上權ノ類ハ本條ニ屬ス

〔第四解、一ケ年ノ收入額〕 裁判所ハ若シ其一年ノ供給一定ノ金額ヲ以テセサルモノナラバ本法第三條ノ規則ニ准シ其一年ノ使用又ハ供給ノ價額ヲ評定スルナリ「バイル

ノ國訴訟法第四條ニ於テハ價額算定ノ爲メ簡便ナル法制ヲ設ケアリ即該年ノ市場平均價額ニ基ツクナリ又例ヘハ其權利ニ對シ天產物ヲ以テスルモ金員ヲ以テスルモ妨ケスシテ雙方ニ涉ルノ契約ナルキ即小作人家鴨二羽ヲ納ムル平若クハ二「マルク」ノ金ヲ納ムル平ノ場合ニ係ルモノハ其金額ヲ以テ訴訟物件ノ價額ヲ定ム必竟本條ノ明文ハ明亮ト云フヘカラス何トナレハ凡ソ使用ト云フモ毎年必ス復歸セサルモノ往々之レアレハナリ例ヘハ町村民カ自己ノ家屋ヲ新築スル場合ニ於テ其共同森林ヨリ樹木伐用ノ私法上ノ權利或ハ荒地ニ於ケル牧畜權ノ類是レトス如此キ場合ニ際シテハ即本條ノ原則及ヒ本法第三條ノ裁判官ノ任意見込ノ規則ヲ參酌シテ以テ一回ノ使用又ハ供給ノ價額ヲ以テ標準ト爲サ、ルヘカラス

〔第五解、十二半倍ノ額〕 例ヘハ或人終身年金ヲ收納スルノ權利ヲ有シ而カモ其權利ハ其人ノ死亡ニ因テ消滅スヘクモ未タ其時期ヲ豫定スヘカラサル場合ニモ適用スルモノナリ蓋其權利者ノ年齢如何ニ從テ單ニ十二半倍ヲ率額トナシテ價額ヲ算定スルハ終ニ過不及ヲ生スルノ不衡平ヲ免カレサルノ嫌ナキニ非スト雖モ事將來ニ亘リ茫々無限ナルモノナレハ是ガ平均額ヲ預定シテ以テ煩累ヲ避クルハ又妥當ト云フヘキノミ然リ而シテ訴訟中偶々年金ヲ受クル權利者死亡シ爲メニ其權利消滅スル場合ト雖モ己



ニ定マリタル訴訟物件ノ價額(本法第四條)併ニ裁判所ノ權限(本法第二百三十五條第二)ハ變更セシメサルナリ  
 上告額ニ付キテハ亦本條ノ計算方法ニ依ルヘシト雖モ自ラ前項ニ相異ナル所アリ(本法第五百八條第二參照)乃本條ノ趣義タルヤ素ト豫定ノ概算ニ出テタルニ過キサレハ將ニ上告セントスルニ方テ權利ノ終局ヲ告ケ以テ訴訟物件ノ價額、算法上既ニ其實額ヲ確定シ得ル以上ハ帝國裁判所ノ裁判官ハ其實額ヲ標準トナシ敢テ本條ニ依ルヘカラスナルナリ乃「バデン」國裁判年報第二十四卷ニ養老年金ノ權利者起訴シ遂ニ上地方裁判所ノ判決言渡シアリタル後死去シタリ然ルニ被告ハ權利者ノ相續人ニ係リ訴訟ヲ繼續シ帝國裁判所ニ上告シタルニ其訴訟價額ハ只ニ訴訟中ニ係ル年金額ニ過キストナシ而シテ其額未タ遠ク上告額ニ達シアラサルヲ以テ上告價額不足ナリトテ却下シタルノ例ヲ掲ケタリ蓋養老年金ノ義務者死去シ而シテ其義務ノ相續人ニマテ及ホサル場合ニ於テモ亦必ス然ルヘキナリ  
 抑權利解除トハ是カ爲メ果シテ權利ノ滅了スルモノト解釋スヘカラス假令法律ニ於テ此類ノ權利ハ一定ノ時限内ニ解除セサルヘカラスト規定シタリトテ未タ滅了スルモノト爲スヘカラス必ス承諾上權利ヲ全ク解除シ了セサル限リハ依然其舊時ノ資質ヲ保有

スルモノトス

〔第六解、二十五倍ノ額〕 例ヘハ地稅又ハ利子ヲ小作ト爲ス如キ無制限ノ權利ニ付キテハ本條ノ規則ハ尤適當簡便ニシテ而カモ彼ノ權利解除法(本條第一解)ヲ採用スルヨリモ大ニ優レルナリ又有期限ノ權利ニ就テハ二箇ノ場合ヲ想像シタリ即其期限ノ二十五年以外ニ亘ルモノ例ヘハ法朗西民法第五百三十條ノ契約上三十ヶ年間解除ヲ許サハル年金ノ如キハ即其一年ノ額ヲ二十五倍シテ之ヲ算定シ之ニ反シ其權利繼續ノ期限短キモノハ其毎年ノ額ヲ通算スルノ意ナリ

〔第七解、本條ノ例外〕 一回ノ使用又ハ供給ノ額ニシテ己ニ三百「マルク」以上ノモノニ付キテハ敢テ本條ニ依テ之ヲ算定スルヲ要セス何トナレハ即其價額ハ元トヨリ地方裁判所ノ管轄ニ屬シアルモノナレハナリ

第十條 (地方裁判所ノ權限ノ言渡ニ對シ上訴ヲ許サ、ルノ條)  
 地方裁判所ノ判決ニ對シ區裁判所ノ管轄ニ屬スヘカリシテ理由トシテ上訴ヲ爲スコトヲ得ス

〔第一解、理由ノ説明〕 本條及ヒ次ノ第十一條ハ同一ナル訴件ニ關シ物件上管轄ノ言渡ニ付キ裁判所ノ異ナルニ從テ其言渡シニ差異ヲ生スルコトヲ豫防セントスルニ在ルナリ

蓋本條ハアル訴件ハ元ト區裁判所ノ權限ニ屬スヘカリシト云フテ理由トシテ地方裁判所ノ爲シタル判決ニ對シ一切ノ上訴ヲ許サ、ルノ義コシテ而カモ元來合議裁判ハ單獨區裁判ヨリハ完全ナルヘキモノト云フテ可ナル所ナレハ此完全ナル裁判ニ對シ更ニ上訴スルヲ許スノ理由ナキナリ

又アル訴訟ニ關シ之ヲ受理シタル裁判所カ訴訟物件上管轄ニ付キテ管轄違ナリト言渡シ且其判決確定シタル場合ニハ則該裁判所又ハ他ノ裁判所ノ別ニ拘ハラス後ニ其訴件ノ屬スル裁判所ハ本法第十一條ニ依リ必ス先キノ管轄違ノ言渡ニ從ハサルヘカラサルナリ而シテ此規則ハ同一ノ訴訟ニ付キ其訴件カ當然管轄ニ屬スヘキ裁判所並ニ其他ノ數裁判所ニ於テ管轄違ナリトノ確定判決ヲ言渡ス如キ場合ニハ及ホサス故ニ右ノ場合ノ爲メ本法第三十六條第六ヲ適用セサルヘカラサルコトモ亦從テ之レアラサルヘシ地方裁判所商事局ニ於テアル訴訟ニ付キ其原被告間ノ爭點ハ商事上ニアラストノ理由ヲ以テ管轄違ナリト言渡シ其言渡確定シタル時ハ則殊ニ地方裁判所ト區裁判所トノ管轄ニ付キ大ナル關係ヲ有スル訴訟物件上價額ニ因テ定マルヘキ權限ノ問題ハ仍ホ現在ニアリ故ニ如此キ場合ニ於テハ第二ニ受訴シタル裁判所ハ右ノ理由ニ因リ其管轄違ト否トニ付キ再ヒ判決ヲ言渡シ得ヘシ復タ他ノ場合即裁判所編制法ニ據リテ裁判所ノ訴

訟物件上管轄ハ當ニ訴訟物件ノ價額ニノミ關シ難ク又ハ訴訟ノ資質ノ商事ニ屬スルト否トニノミ關シ難キモノニ付キテモ上段ト同一ナル結果ヲ呈スヘシ(但本法第十一條第四解第五解參看)

李滯生國訴訟法草按第六十條及ヒ第六十一條併ニ北部獨乙聯邦全草按第十九條及ヒ第十八條ハ共ニ本法第十條第十一條ニ適合セリ又本法第十一條ハ即「バデン」國第十六條第三項及ヒ千八百六十九年三月十五日頒布ノ李滯生國法律第四條ノ趣義ト全一ナリ〔著者曰「バデン」國第十六條第三項ヲ參照ニ引ケルハ蓋誤ナリ〕

本條ニ對スル理由ノ說明ハ一渾ニ約述シテ足レリト雖モ特リ茲ニ一言スヘキ所ハ即原稿ニ於テハ凡ソ商事裁判所ハ訴訟價額ノ制限ニ依ラスシテ權限ヲ定ムルノ趣義ナリシモ國議院ニ於テ決議セル裁判所編制法第百條及ヒ第百一條ニハ單ニ地方裁判所中ニ商事局ヲ置クノ制トナシ且其權限ハ地方裁判所民事局ノ權限ト均シク概シテ財產權ニ關スル訴件ニシテ三百マルクノ價額ヲ超過スルモノ以上ニ限ルコト、定メタルニ在リ〔裁判所編制法第二十三條及ヒ第七十條參看〕

右ノ如ク原按ノ改マリタルニ從テ其理由ノ文章ニシテ已ニ商事々件ノ爲メ商事局ヲ地方裁判所中ニ置クニ至リタルヨリ今ヤ必要トセサル條項ハ之ヲ刪除シタリ

〔第二解、委員會議ノ筆記錄〕筆記錄參照ノ方法ニ付キテ爰ニ千八百七十五年十月九日ノ第八十九回會議ノ筆記錄ニ掲載シタル所ヲ抄出スヘシ即曰

〔追記筆記錄第八十一乃至第八十三ハ訴訟法ノ第一讀會ニ對スル筆記錄ニ屬ス是故ニ丁數七百三十三乃至七百八十三ハ四百七十一以下五百二十一ニ改正セサルヘカラヌ云々

右ノ如クアルニ因テ著者ハ本法第十條々下ニ於テ筆記錄ノ印刷本ニハ七百五十七以下七百五十九及ヒ七百六十八丁ト印刷シアルモ拘ハラス四百九十五以下四百九十七及ヒ五百六丁參照ト示指シタリ以下ニ於テモ亦第八十四回會議ノ筆記錄ハ五百二十三丁ヨリ始マルヲ以テ即此順次ニ據リテ算スルヲ要ス

必竟本條ニ對シテ筆記錄ヨリ抄出スルヲ要セサルヘシ何トナレハ筆記錄第四百九十五丁以下ハ本條ノ説明ノ追加ニ過キスシテ即萬一國議院カ物件價額ニ制限セラレサル商事裁判所ノ特置ヲ議決採用スル場合ニ向テ豫定シタルモノナルニ遂ニ國議院ハ之ヲ採用セザリシヲ以テ無用ニ歸シタレハナリ而シテ國議院ニ於テ廢案シテヨリ第八十三回會議筆記錄第五百六丁ニアル如ク本條ノ行文ノ如ク修正シタルナリ

〔第三解、地方裁判所ノ權限ニ付キテノ言渡シニ對シテ許サス〕本法第二條ノ第二

解ニ述フル所即同一ナル地方裁判所ノ民事局ト商事局トノ間ノ權限ニ付キテノ言渡シニ對シテ許サ、ル趣義ト本條トハ相齊シキヲ以テ宜ク同解ヲ參照スヘシ

抑、本條ニ於テハ概シテ地方裁判所ニ付キテ規定スル所ナレハ乃其地方裁判所中ノ商事局ヲモ包含スルノ義タルハ固トヨリ論ナシ而シテ商事局ノ權限ノ言渡ニ付キテハ二様ノ要件アリ即〔甲〕商事ニ關スル訴訟ハ裁判所編制法第一百條ノ趣義ニ基ツキ適當ノ訴訟物件ナル可ク〔乙〕其訴訟物件ノ價額三百マルクヲ超過スヘシトノコト是レナリ前項ノ〔乙〕ノ如ク訴訟物件ノ價額ニ付キテ管轄ノ言渡シヲ爲ス時ハ本條ニ依ルヘキハ固トヨリ論ナシ乃區裁判所ノ管轄ニ屬スヘキモノハ必ス之ヲ採ラサルナリ

又〔甲〕ニ依リ商事事件ヲ受理スルニハ即復タ地方裁判所民事局ノ管轄ニ屬スヘキモノヲモ排斥スル義ニシテ而シテ此管轄ニ付キテノ言渡ニ對シテ許サ、ルコトニ付キテハ裁判所編制法第七條ニ於テ特ニ之ヲ明示シアリ

〔第四解、區裁判所ノ管轄ニ付キテノ言渡〕區裁判所ニ於テ爲ス管轄ニ付キテノ言渡ハ即權限ニ付キテノ通常ノ判決ニシテ而カモ控訴スルヲ得ルナリ若シ其言渡確定スルニ至リタル場合ニハ假令適越權ニ屬スルモ爲メニ判決ノ無効ニ歸スルノ規令ナキヲ以テ之ヲ相當ノ判決ト定ムルナリ〔本法第二條第三解參看〕是レ或ハ區裁判所ニ於テ言渡シ

タル離婚ニ關スル事件ノ判決ニ比照スルルハ大ニ疑訝ヲ免カレ難シト雖モ必竟法律ハ練熟ノ裁判官ヲ俟ツモノナレハ如此キ特例ノ爲メ特ニ明定スルノ煩ヲ以テセサルナリ  
〔第五解、上等地方裁判所〕 若シ地方裁判所カ爲シタル管轄違ノ言渡ニ對シ控訴シタル場合ニ方テト等地方裁判所之ヲ變更シタル時ハ其言渡ニ對シ更ニ上告シ得ル乎將タ此場合モ尙ホ本條ニ依ラサルヘカラサル乎ハ二問題ナルヘシ是ニ付キテハ本法第五百九條第一及ヒ其解釋ヲ參看スヘシ

第十一條 〔確定シタル管轄違ノ言渡シニ關スル條〕

裁判所ノ物件上管轄ニ付キテノ規則ニ依リ管轄違ノ言渡確定シタル時後日其訴訟事件ノ屬スヘキ裁判所ハ此言渡ニ遵フ可シ

〔第一解、理由ノ説明〕 本條ノ理由ニ付キテハ既ニ第十條ノ第一解ニ於テ縷述シアルナリ只會議筆記録第七丁ニ掲クル所ヲ左ニ抄出スヘシ即當初

後日其訴訟事件ノ屬スヘキ裁判所ハ

ヲ修正シテ

後日之ヲ管轄スヘシト裁判セラル、裁判所ハ

ト作ラントノ動議アリシモ遂ニ棄却セラレタリ而シテ其動議併ニ棄却ノ理由ニ付キテ

ハ更ニ明示シアラス  
是必竟只ニ文字上ノ修正ニ過キサルモノ、如シ

又此條ニ關シ「ベール」氏ノ動議中ニハ終ニ本法ノ第二百四十九條即國議院委員起稿草案第二百三十九條甲ノ因據ヲ爲ス所アルナリ

〔第二解、管轄違〕 本條ノ管轄ト云フハ特リ訴訟物件上管轄ノミヲ指ス義ニシテ場所ノ管轄ハ之ヲ包含セス抑、場所ノ管轄ニ關シ管轄違ノ爭訟アルニ方テハ甲裁判所ノ言渡ハ他ノ裁判所ヲ拘束セシメ能ハス必ス本法第三十六條第六ニ依リ上級ナル裁判所之ヲ裁判シテ終局ス可キナリ

蓋物件上管轄ニ付キテハ管ニ本法第二條乃至第九條ニ列載スル訴訟物件ノ價額ニ付キテノ規定ノミヲ解ス可カラズ尙ホ本法第一條ニ依リ裁判所編制法ニ掲クル區裁判所ト地方裁判所トノ權限ノ區域〔第一條ノ第五解〕ヲモ包含セシメテ解セサルヘカラサルナリ而シテ地方裁判所中ニ於ケル民事局ト商事局トノ區域ニ付キテハ專ラ一裁判所ノ内部ノ制度ニ過キサル資質ノモノト云フテ可ナリ〔本條第五解參照〕

〔第三解、區裁判所ノ判決〕 區裁判所ニ於テハ訴訟物件ノ價額ニ依リ又ハ財産權ニ非サル請求ノ受理ニ因リ又ハ元來地方裁判所ニ特屬スル訴件ナルニ因リ〔第一條ノ第二解

第三解參照)區裁判所ノ管轄ニ非スト言渡シテ而シテ其言渡確定シタル場合ニハ即其財產權ニ非サル訴訟ト及ヒ地方裁判所特屬ノ訴件ニ付キテハ地方裁判所ノ管轄ナリト確定シテ復タ動カスヘカラス之ニ反シテ只ニ訴訟物件ノ價額三百「マルク」ヲ超過スルノ事由ノミコ據テ言渡シタルキコハ地方裁判所ハ其物件價額超過ノ點ニ付キテハ固トヨリ承認スルモ訴訟物件上管轄ニ付キテハ未タ速ニ承認セサルヘシ何トナレハ地方裁判所ハ裁判所編制法第二十三條第二ニ依リ區裁判所ニ特屬スル訴件ナキコ之レアラスト云フヲ以テ速ニ區裁判所ノ管轄違ノ言渡ニ從ハサルヲ得ヘタレハナリ而シテ本法第十條第一解ニ示ス原案ノ理由説明書ニ照セハ前段ノ如キ場合ハ之レアリ易キノ弊害ナリト認メ之ヲ防遏センカ爲メ更ニ國議院委員起稿草案ノ第四百四十六條(甲)即本法第四百六十六條ヲ制定シテ以テ原告ノ請求ニ因リ訴件ヲ地方裁判所ニ移送シ且其移送ノ言渡確定スルキハ地方裁判所ハ此言渡ニ遵ハサル可カラサルノ規則ヲ設ケタリ而シテ此結果ハ即本法第四百六十七條第二項是レナリ

(第四解、地方裁判所民事局ノ判決) 民事局ニ於テ管轄違ノ言渡シテ爲シ得ヘキ場合ハ即(甲)訴訟物件ノ價額三百「マルク」ニ達セサルノ理由ヲ以テ(乙)其訴件ハ區裁判所ノ特屬ニ係ルモノナリトノ理由ヲ以テ(丙)其訴件ハ價額三百「マルク」以上ノ商事ニ係ルモノ

ナリトノ理由ヲ以テスルニ在リ

前項(丙)ノ理由ニ因ルモノハ只商事局トノ關係(本條第五解參看)ニ止マルモノニシテ固トヨリ區裁判所ノ權限ニモ屬スヘキニ非サルナリ又(乙)ノ言渡ハ即其確定スルト否トニ從テ區裁判所ノ管轄ニ定マルノ効力アリ獨リ(甲)ノ言渡ニ付キテハ區裁判所其訴件ハ本來地方裁判所ニ特屬スルモノ又ハ財產權ニ非サル訴訟ニ係ルモノト云フヲ以テ之ヲ拒ミ得ヘシ此場合ニハ己ニ本條第三解ニ於ケルト同一ニ本條第一解ニ舉クル本法第二百四十九條ノ明文ノ如ク原告ノ請求ニ因リ本件ハ區裁判所ニ於テ遵ハサルヘカラサルノ能力ヲ付シテ之ヲ移送スヘキナリ

(第五解、地方裁判所商事局ノ判決) 商事局ニ於テハ(甲)訴件ノ商事ニ係ルト否トニ拘ハラズ其訴件ノ價額三百「マルク」ニ達セサルキ(乙)訴訟物件ノ價額三百「マルク」以上以下ヲ調査シテ而シテ其訴件ハ商事ニ係リアラスト認ムル時(丙)其訴件區裁判所ニ特屬スルモノト認ムル時ハ管轄違ノ言渡シテ爲スコトヲ得

商事局ニ於テ正ニ訴訟物件ノ價額三百「マルク」ニ達セサルモノト確認シタル以上ハ其訴件ノ商事ニ係ルト否トヲ論スルヲ要セス然レモ區裁判所ハ此場合ニ於テ猶ホ本條ノ第三解ニ論スルカ如ク其判決ニ對シ排斥ヲ試ルヲ得ルナリ而シテ此場合ニハ本法第二

百四十九條ニ依ルヘシ必竟裁判所編制法ノ第七章ハ只ニ區裁判所中ノ民事商事二局間ノ關係ヲ規定シタルモテコシテ而カモ其商事局ト區裁判所トノ關係ニ付キテハ更ニ規定シアラサルナリ是ニ於テ區裁判所ハ自ラ地方裁判所ニ對スル權限區域ノ通則ニ從フテ可ナリ

又商事局(丙)ノ理由ヲ以テ管轄違ナリト言渡シタルキハ本條ニ依リテ區裁判所ノ管轄ニ歸ス

又(乙)ノ場合ニシテ商事局三百「マルク」以上ノ價額ノ訴件ヲ商事ニ係ラサルモノト認定スル時コ付キテ注意スヘキ所アリ乃民事局ニ於テ本條第三解ノ(丙)ノ如キ場合トシテ商事ニ係ルモノトナシ互ニ相推移スル時ハ則一家内ノ紛争ノ實質ノ如キモノヲ顯出スルニ至ルヘシ是故ニ裁判所編制法ニ於テ之ヲ豫防セリ即民事商事二局共ニ各其管轄違ナリトシテ言渡シテ爲スノミコト止ムヲ許サス必ス其言渡シト共ニ他局ニ移送スル旨ヲ言渡サ、ル可ラス而シテ此言渡ハ原被告之ニ對シテ上訴ヲ爲スヲ得ス但他局ヲ拘束シテ其移送ノ言渡ニ從ハシムルナリ(裁判所編制法第百三條第百四條第百七條參照)

本法第十條第一解ノ理由説明ニ云フ如ク若シ果シテ訴訟物件ノ價額如何ヲ明言スルコトナク單ニ民事局ハ本件ハ商事ニ係ルモノト言渡シ又ハ單ニ商事局ハ商事ニ係ル訴件

ナラスト言渡シタル時ハ區裁判所ハ本件ノ其價額三百「マルク」以上ノモノナリトシテ自ラ推移シテ之ヲ受理セサルノ權アルヘシ然レモ如此キ場合ハ裁判所編制法第百三條第百四條本法第百四十九條ニ因テ實際之レアラサルヘシ孰レニモ民事商事二局共ニ必ス訴訟物件ノ價額ニ付キ言渡シテ爲サ、ルヘカラス何トナレハ裁判所ハ先ツ其價額ヲ調査シテ而後初テ之ヲ區裁判所又ハ他局ニ移送スヘキ乎ヲ定メ得ヘキヲ以テナリ實ハ前項ニ記載スル各條ノ行文ハ其意義ヲ明瞭ナラシムルト云ヒ難シ乃本法第百四十九條ハ訴訟物件ノ價額三百「マルク」ヲ超過セサルモノヲ例外ト爲スコトヲ明示シラス又裁判所編制法第百三條第百四條ニ於テハ亦明言スルコトナクシテ右ニ反對スル意即訴訟物件三百「マルク」以上ノ價額ノモノナルヘキ義ヲ暗々裏ニ含蓄セシメアルナリ「サククセン」國ニ於テハ商事裁判所カ爲ス管轄違ノ裁判ハ普通ノ權限争ノ裁判ト均シキモノトシテ而シテ普通ノ上訴ヲ許ス且其裁判確定ノ場合ニ在テモ他ノ裁判所ハ新タニ自由ヲ發見シテ本案ハ商事ニ係ルモノナリト裁判スルモ妨ケサルナリ蓋如此キハ訴訟ノ遲滯ヲ來ス豈ニ尠少ナランヤ

〔第八解、判決ノ確定〕凡ソ判決ノ確定スルトハ即最終ノ裁判權ヲ經歷シ又ハ上訴ヲ爲スヘキ期限若クハ故障ヲ提出スヘキ期限ヲ空過シタル時又ハ原被告共ニ判決言渡シ後

上訴若クハ故障ヲ爲スノ權利ヲ自ラ拋棄シタル時其判決ハ確定スルナリ本法第二百九十三條第六百四十五條訴訟法實施法第十八條ヲ参照スヘシ

第二章 裁判所ノ管轄場所ニ關スル管轄

第十二條 (普通管轄ニ關スルノ條)

或人ニ對シ普通裁判管轄ヲ有スル裁判所ハ其人ニ係リテ起スヘキ總テノ訴訟ヲ管轄ス但特別管轄ヲ定メアル場合ハ此限ニ在ラス

[第一解、第二章ニ對スル理由ノ説明] 本章中第十二條乃至第二十條ハ普通裁判管轄ニ付キテ之ヲ規定シ第二十一條乃至第三十四條ハ特別裁判管轄ニ付キテ規定スル所トス又第三十五條ハ數多ノ裁判管轄相合同スル場合ニ對シテ之ヲ規定シ第三十六條第三十七條ハ一定ノ場合ニ於テ上級ノ裁判所カ訴權ノ管轄ニ付キ示定スルノ規則ヲ示スナリ

各種ノ裁判管轄ト此訴訟法ニ於テ逐次ニ規定スル條項トノ係累ヲ明カニ爲サンカクメ悉皆ノ裁判管轄ヲ舉テ本章中ニ網羅臚列セシムルコトヲ爲サ、ルナリ是ニ於テ乎即裁判管轄ニ付キテハ本書中各所ニ散在スルヲ見ルヘシ乃辨償督促手續ニ付キテハ第六百二十九條ヲ以テ其管轄ヲ定メ又第六十一條ニ於テハ主參加訴訟ニ付キテノ管轄ヲ特定

シ第五百四十七條ハ判決取消ノ訴及判決更正ノ訴ニ付キ第五百六十六條ハ爲替ニ關スル訴訟ニ付キ第五百六十八條第五百九十四條第六百十七條ハ婚姻事件及ヒ後見事件ニ付キ第八百二十九條ハ證書ノ無効力ニ關スル訴訟ニ付キ第八百七十一條ハ仲裁ヲ判ニ關スル訴訟ノ管轄ヲ示定シ殊ニ第八卷ニ至テ強制執行ニ付キ許多ノ裁判管轄ヲ定ムル條アリ(第六百六十條第六百六十七條第六百八十四條第六百八十六條第六百八十七條第六百九十條第七百四條第七百二十九條第七百五十五條第七百五十九條第七百七十四條第七百七十五條第七百八十條是レナリ)此他附帶ノ訴ヲ裁判スル裁判管轄ヲ特定シアルノミナラス又アル一定ノ場合(本法第八百二十三條第二項及ヒ本法實施法第八條第十三條參照ニ於テハ帝國又ハ各聯邦ノ特ニ布令スル裁判管轄ニ付キテノ法例ヲ併行セシムルナリ)

[第二解、本條ニ對スル理由ノ説明] 本條ハ即或人ノ普通裁判管轄ヲ有スル裁判所ハ其人ニ對シテ起ル一切ノ訴訟ニ付キ之ヲ管轄スルノ義ニシテ而シテ本法第二十五條ニ於テ原告數多ノ管轄裁判所アルニ方テハ自ラ之ヲ選定シ得ルナリ然リト雖モ本法又ハ本法實施法又ハ他ノ帝國法律ニ於テ特ニ裁判管轄ヲ定ムルモノハ此例外トナシ其例外ノ特定管轄ニ對シテハ他ノ各裁判管轄ハ自ラ相讓ラサルヘカラサルナリ然リ而シテ本法

ハ強制執行(第七百七條)ニ關スルノ外特定管轄ヲ設クルコト甚タ多カラズ即第二十五條ノ物上權ノ訴訟第五百四十七條ノ判決取消ノ訴及ヒ判決更正ノ訴第五百六十八條第五百九十四條ノ婚姻事件及ヒ後見事件等ニ付キ定ムルノミ

此管轄ニ付キテノ規則ハ特ニ例外ヲ明示シアラサル限リハ審ニ内國人即帝國所屬ノ臣民(千八百七十一年四月十六日ノ帝國憲法第三條及ヒ全日ノ法律第二條第二項及ヒ千八百七十年六月一日ノ獨乙國民籍ノ得失ニ關スル法律第一條乃至第十二條)ノミニ限ルニ非ス亦外國人ニモ及ホスヘキモノニシテ殊ニ李滯生國昔日ノ慣行例(千八百五十五年四月二十四日ノ上等裁判院ノ判決)ニ反シテ其人ノ原告タリ被告タルニ論ナク又普通管轄ト特別管轄トノ別ヲ問ハサルナリ

且本草案ニ於テハ裁判管轄上ニ特典ヲ許サス獨リ本法實施法第五條ヲ規定シテ以テ國君及ヒ其親族ニ對スル特別裁判管轄ヲ認可シアルノミ(又此特別裁判管轄ニ付キテハ裁判所編制法第十四條ヲ參看スヘシ)

内地ニ寄留シテ治外法權ヲ享有スル外國人ニ對スルノ規則ハ民事刑事ノ二訴ニ亘ルヲ以テ一般ノ總論第十六回(即本書凡例)ニ敘述スル原則ニ從ヒ裁判所編制法ニ屬セシムヘキモノトス又治外法權ヲ享有スル内國人ニ關シテハ本法第十六條ヲ參考ス可シ(裁

判所編制法第十八條乃至第二十一條參看)

(第三解 會議筆 記錄) 筆記錄ニハ本條ハ異論ナク採用セラレタル旨ヲ記載ス尙ホ本法第八條ノ註解ヲ參照スヘシ

(第四解 或人) 本條ノ或人トハ有形人無形人内國人外國人ヲ概稱スル義ナレハ即本條ノ理由説明ニ述ル所ニ賛成ヲ得ヘキハ當然ナリ北部獨乙聯邦訴訟法草案ニ於テハ特ニ其第七十三條ヲ以テ外國人ニ關シ更ニ規定スルヲ必要ト認メ

此裁判管轄ニ付キテノ規則ハ原告若クハ被告又ハ原被告共ニ外國人ナル時ト雖モ之ヲ適用ス

ト明示シタリ

盖右ノ明文ハ本條ニ於テハ敢テ切要ナラサレモ本法第三十八條ニ於ケル裁判管轄ニ關スル訴訟人認諾ノ條ニハ之ヲ明言シテ法律ノ精神ヲ明ニスルヲ良シトスルモノ、如シ何トナレハ即二人ノ外國人カ内地ノ裁判所ニ向テ相共ニ其管轄ヲ認諾スル如キハ期シ難キ所ニシテ而シテ今ヤ僅ニ

國ニシテ法律ヲ遵奉セラレサル時ハ其國ノ何物モ遵奉セラレズ

トノ格言ニ依頼シテ實施スルヲ得ルノミナレハナリ且本法第十三條ノ第五解ニ擧グル



住所ニ關シ外國人内國人ヲ同一ノ地位ニ立タシメントスル場合ニ於テハ殊ニ尤モ其然ルヲ感スヘシ

〔第五解、普通裁判管轄〕 抑、管轄トハ彼ノ物件上管轄ニ相對スル所ノ場所ニ關スル管轄ナルコトヲ記憶セサルヘカラス(第一條第五解參看)而后本條ハ原告タル者ハ被告カ當ニ其管轄ニ屬シアラサルヘカラス義務アル處ニ就テ自己ノ權理ヲ伸暢セント求メサルヘカラスルノ原則ヲ示ス所ニシテ即或人ニ對シ起ス訴訟ニ付キ即被告ニ付キテ定ムル所ナルヲ忘ルヘカラス又是ノ被告カ荷フ義務ニハ自ラ管轄外ノ裁判所ノ審理ニ應セサル權利アル義ヲ包含スルナリ又本法第三十二條ヲ以テ原被告タル權利ハ反訴ノ爲メ變スルニ至ラシメテ即原告ハ反訴ノ被告トナリテ自己ノ管轄外ノ裁判所ニ於テ權利ノ伸暢ヲ求メサルヘカラスルノ責ヲ負フナリ又原被告認諾ノ裁判管轄ハ自他ノ任意ニ出ツル結果トシテ更ニ制限ヲ被ムルヘカラスト雖モ反テ裁判所ハ元ト自己ノ權限内ニ於テノミ裁判シ得ヘキナレハ即本法第三十八條以下ニ因テ初テ權限外ニ於テ裁判スルコトアルノ責任ヲ増加シタリト云フヘシ

普通裁判管轄トハ特別例外ニ屬セシメサル總テノ權利ニ付キ審理スル所ヲ規定スルニ因テ稱スルナリ然リ而シテ本條ニ於テ特別トハ即法律ヲ以テ他應ノ專屬ト特定シアル

モノニ限リテ云フナリ

〔第六解、特別裁判管轄〕 本條ノ說明(第二解)ニテハ特別裁判管轄ト定メアルハ本法第二十五條第五百四十七條第五百六十八條第五百九十四條ノ場合ニ限レリ訴訟人ノ認諾ニ付キテハ之ヲ特別管轄ニ算入セス且本法第三十八條以下ニ於テモ亦特別管轄ニ付キテ明示シアラサルナリ必竟原告ハ本法第三十五條ニ於テ授ケラル、選定權ヲ豫ノ拋棄シ得而シテ只ニ相認諾スル裁判管轄ニ賴テ以テ權利ノ伸暢ヲ求ムルヲ得ルノ義務ヲ契約上負擔スルナリ本法第三十八條併ニ第三十九條ニ對スル第七解ヲ參照スヘシ  
又本條第一解ノ說明中ニ掲ケサル本法第八百七十一條ハ亦一ノ特別裁判管轄ノ趣義ヲ保有シ殊ニハ他ノ特別裁判管轄ノ力ヲモ侵凌スヘキモンナリ乃原被告間ニ限り有効ナル仲裁々判契約ナルモノハ本法第八百六十六條ニ依リ本法第八百六十七條ノ仲裁々判廢棄ノ訴求ヲ除クノ外ハ能ク官立ノ裁判權ヲ排斥ス且本法第八百七十一條ノ書面上爲セル仲裁々判契約ニ効力ヲ與フル趣義ハ亦官立ノ裁判權ヲ排斥セシムルコト全シキ精神ト云ハサルヘカラスルナリ而シテ原被告ノ契約等(本法第八百七十二條)ニ因リ訴件ヲ仲裁々判所ニ移送シタル場合ニハ其裁判所ハ職權ヲ以テ之ヲ謝絶スル能ハサルハ無論ナリ(本法第二百四十七條第二參看)然レモ必ス本法第八百五十一條ニ於テ區劃シテ

ル範圍内ニ於テ抗辨アルハニ限り之ヲ謝絶スルコトヲ得ヘシ殊ニ假令ヒ法律上特別裁判管轄ト定メアルモノナリトモ尙ホ且然ルナリ

又一種假性ノ特別裁判管轄ヲ爲ス場合ニ付キテハ本法第三十六條併ニ第三十七條ニ對スル第七解ヲ參照スヘシ

本條第一解ノ説明中ニ列擧セル特別裁判管轄ハ本法實施法併ニ他ノ帝國法律ニ基キテ定メタルモノニシテ即將來何レノ各聯邦モ新ニ特別裁判管轄ノ制ヲ増設シ能ハス且之ニ明示セサルモノハ當時既ニ廢止セラレタルモノナリ(本法實施法第十四條參照)

又本法實施法第五條ニ於テハ其人ニ從テ特典ヲ享受スル特別裁判管轄ノ(二三ノ場合ヲ掲ケアリ尙ホ裁判所編制法實施法第五條ヲ參考スヘシ)

又帝國法律ノ力ニ因リ特別裁判管轄ヲ制定シアル事例ハ則本法第四十條ノ第五解ニ論スルカ如ク當時尙ホ實施セラレアリタル營業規則第百八條ニ明示シアルモノ是レナリ(即全規則第十四條第四及ヒ是ニ對スル説明ヲ併セ看ルヘシ)

抑特別裁判管轄タルヤ其性質ニ於テ公法ニ因據スルモノナルカ故ニ私人ノ契約ヲ以テ之ヲ變動セシメ得ヘキモノナラス(本法第四十條第二項)且素トヨリ普通裁判管轄ニ先ツヘキモノニシテ而シテ本法第三十五條ニ於ケル原告カ裁判所ヲ選定スル權利ノ如キ

ハ之ヲ許サハル所ナリ

〔第七解、特定裁判管轄〕 此性質及ヒ尙ホ之ヲ存セシメタル理由ニ付キテハ本書ノ凡例ヲ參考スヘシ又其事例ニ付キテハ本條ノ第一解併ニ本法第十四條第十五條ニ對スル第五解ヲ參照スヘシ

第十三條 (普通管轄(第一)住所ニ關スルノ條)

人ノ普通裁判管轄ハ其住所ニ依テ定マルモノトス

〔第一解、住所ニ付テノ理由〕 本條ニ於テ被告ノ住所ヲ以テ普通裁判管轄ノ主因トナシタル所ハ一般ノ法義各國ノ新定訴訟法悉ク同一ナリ是ニ於テ平本草案ハ猶ホ「バイル」〔國訴訟法草案第十二條〕「ウィルテムベルグ」〔國全上第三十二條〕「バデン」〔國全上第十八條〕「ハンノフル」〔國全上第五條〕「オルデンボウグ」〔國全上第十一條〕「ブラウンシュウアイヒ」〔國全上第二十五條〕ニ於ケルカ如ク住所ニ付キテハ別ニ説明ヲ付セサルナリ蓋是レ訴訟法上ノ住所ハ即民法上ノ住所ト同義ニシテ而シテ其理義及ヒ其以テ生滅スル所ノ理由ハ民法ノ規則ニ依テ確定スヘキモノト爲スニ職由ス是故ニ更ニ疑義ヲ生スルコトナク從テ詳細ナル説明ヲ要セサルヘシ若シ或人ニシテ民法ニ准シ各地ニ數箇ノ住所ヲ有スル時其人ニ對スル普通管轄ハ即其各住所ニ在ルヘキハ敢テ論ヲ俟タス

〔第二解住所ノ理義〕住所トハ或人ノ現住所即永久居住スル場所ヲ指スノ義ナルハ固トヨリ疑フヘカラス乃彼ノ居所變換ニ關シテ云フ所ノ住地又ハ法朗西法及ヒ「バデン」國法ノ選定住所トハ自ラ別異ナリ〔訴訟法實施法第十五條第五ヲ參照〕而シテ住所ニ關シ原被告間裁判管轄ノ認諾ヲ爲シ得ル乎否ニ付キテハ本法第三十八條以下ニ就テ見ル

〔第三解住所ニ關スル各聯邦ノ規定〕蓋住所ノ理義ニ付キテハ各聯邦ノ規則ニ依テ之ヲ斷定スルト雖モ必竟此理義ノ一定ハ受訴裁判所ノ通規トシテ之ヲ要スルヨリ寧ロ裁判官カ例ヘハ本法第十八條ノ場合ニ於ケル如キ或人ハ其住所ヲ他ノ聯邦内ニ有シ又ハ外邦ニ住居〔本法第七解〕スル時其住居スル邦國ノ法律ヲ適用セサルヘカラサル乎否ノ問題アルニ方テ必要トスヘシ然リ而シテ如此キ場合ニ對スルノ規定ハ即本法第二百六十五條ニ明示シアルナリ

同時ニ數個ノ住所ヲ認可スルコトニ付キテハ獨乙普通法「サックセン」國千八百六十五年一月九日ノ非訴訟事件ノ處理手續規則第二十三條及ヒ全國民法第十七條併ニ「字漏生内國」通法等ニ之ヲ明示シアリ之ニ反シテ法朗西民法ハ之ヲ允許セサルナリ如此クナレハ即本條ノ第一解ニ述フル數箇ノ各住所地ニ其裁判管轄アルト否トハ必竟各聯邦ノ民法ノ

如何ニ從テ異同アルヘシ北部獨乙聯邦訴訟法草案ニハ之ヲ認可シテ

或人數箇ノ裁判管轄區内ニ住所ヲ有スル時ハ其各裁判所ノ管轄ニ屬ス

ト規定セリ然ルニ本法ニ於テハ未タ聯邦各地ニ適當セサル所アルニ因テ此明文ヲ掲ケサルハ蓋又妥當ト云フヘシ況ヤ特ニ之ヲ示サ、ルモ理ニ於テ固トヨリ當然ナルヘキモノナルオヤ

今ヤ住所ノ理義ニ付キテハ之ヲ民法ニ推移シアルハ甚ク穩當ナリ然レハ將來獨乙民法ヲ編纂スルニ方テハ必ス當時ノ各聯邦法制ノ區々不一ヲ匡正センコト實ニ切望ニ堪ヘサルナリ

而シテ本法第十四條乃至第十七條ニ於テハ既ニ聯邦法ニテ廢止セル住所ニ付キテノ二三ノ規則ヲ採用シアルナリ

〔第四解住所ノ時期〕本法第二百二十五條ノ第二ニ依レハ起訴スルノ際〔本法第二百三十條被告ハ正ニ起訴裁判所管轄區内ニ住居スルヲ要スルノ義ナルハ顯著ナリ然レモ又起訴ノ時ニ際シ住居セルコトアレハ即足レルモノニテ其後ノ轉居ハ更ニ影響ヲ及ボサ、ルナリ而シテ現狀ノ變換ハ之ヲ豫想ス可カラストノ通則ニ依リテ原告ハ單ニ起訴前被告カ曾テ居住セシコトヲ申立ルヲ要ス反テ被告ハ其轉住ニ付キ主張スヘク時機ニヨ

リテハ必ス自ラ之カ證明ヲ爲サ、ルヘカラサルナリ〔本法第十八條ノ第二解參照〕  
 (第五解、内外國人ヲ渾一ニスルノ理由) 本條第一解ニ列載スル訴訟法各條及ヒ新定スル訴訟法草案等ニ依レハ、則本條ノ原則ハ只ニ被告タル者内國ニ住所ヲ有スル場合ニ限レルナリ又北部獨乙國聯邦訴訟法草案ニ於テモ亦其第四十三條第四十四條ニハ内國ニ住所ナキ時ハ寄留地ノ管轄裁判所ニ起訴セシメ若シ寄留不分明ナル乎又ハ外國ニ住スル時ハ其最終ニ居住セル内地ノ裁判所ニ起訴セシムルノ義ナリ而シテ外國ニ住所ヲ有スル者ニ對シテハ即

(甲) 財產權ニ關スル訴求ニ限り外國人ノ寄留地ノ管轄裁判所

(乙) 外國ニ居住スル以前ニ起因スル權利義務ニ關シ訴求スルキニ限り最終ノ内地ノ住所ノ管轄裁判所ニ

起訴セシムルヲ得ルナリ

然レモ右ノ規則ハ頗ル煩雜ヲ免カレザルノミナラス復タ確乎タル主義ヲ有セヌ是ニ於テ平即本案ハ善ク原則ヲ應用シテ以テ内外國人間ニ裁判管轄ノ別ヲ立テス更ニ一步ヲ進メテ本條併ニ第十八條ニ於テ普通裁判管轄ニ依テ其住所ノ内國外邦ニ在ルヲ問ハス渾ヘテ被告カ居住スル場所ニ就テ起訴セシムルヲ妥當ト認メテ制定シタルナリ故ニ獨

乙内國(本法第十八條)ノ寄留地ヲ以テ定ムル如キ補助普通管轄ハ只ニ被告カ更ニ一定ノ住所ヲ有セズ即獨乙國內外共ニ之レナキ場合ニ限り適用ス又被告一定ノ住所ヲ有セズ且内國ノ寄留地不分明ニシテ爲メニ普通裁判管轄ヲ確定シ難キ場合ニ適用スル所ノ最終ノ住所ニ付キテモ亦其最終ノ住所ハ内國ナルト外邦ナルトヲ問フテ要セサルナリ蓋本法ハ如此キ原則ヲ採用シテ以テ現今ノ法律ノ缺欠ヲ補フニ適合スヘキ萬國通法ノ發進ヲ促カスノ精神ニシテ而カモ自國ノ利益ヲ害スヘキノ悞ヲ顧ミサルナリ而シテ本法第二十五條第二十九條第二十四條ノ不動産又ハ契約又ハ財産等ニ關スル特別裁判管轄ハ相當ノ場合ニ於テ外國ニ居住スル負債主ヲ内國ノ裁判所ニ召喚スル爲メ十分ノ規定タルヲ得ヘシ又本法ニ於テハ脅迫ニ陥リ易キ事件ニ關シテハ更ニ注意ヲ爲シ内國人ノ益利ヲ主トシテ別ニ特別ニ設ケタリ即夫ニ棄テラレタル獨乙國婦人ノ離婚ノ訴求(本法第五百六十八條第二項)後見人事件及ヒ後見人廢除訴訟第五百九十四條第六百六條)此他強制執行手續ノ二三ノ場合第七百四條第七百二十九條第七百八十條)是ナリ

(第六解、内國人) 獨乙國臣民ニシテ或ル場合ニ於テハ獨乙國內ニ於テ裁判管轄ヲ被ムルノ義務ナシト定メタルハ蓋新法ナリ即或人獨乙帝國外ニ住所ヲ有シ而シテ本法第十四條乃至第十六條ニ係ラス又特別裁判管轄ニモ係ラサル時ハ内國ノ裁判管轄ヲ被ムラ

サルナリ近來ニ至ルマテハ一般ニ國家臣民タルノ由縁ニ因テ享受スル被保護權ト裁判管轄上ノ義務トハ相分離スヘカラサルモノト認定シアリタリ然レモ此原則ハ往々内國人タル性質ノ解釋ニ誤謬ヲ招キ易クシテ而カモ現今ノ規則ハ即訴訟人ハ物件ヲ管轄スル裁判所ニ服従スヘシトノ原則ニ適合スルモノト知ルヘシ

〔第七解、外國人〕 獨乙國臣民ナラサル者ニシテ裁判所ノ法規ニ照シテ其裁判所管轄區内ニ住所ヲ有スル者ナル時ハ内國裁判所ニ起訴セラルヘシ抑此規則ノ制定アリテ以來初テ舊時ノ紛爭殊ニ法朗西國ニ對シ恒ニ絶アルコトナカリシ葛藤ヲ防遏シ得ルニ至レリ法朗西國ニ於テハ實際法國民カ外國ニ有スル住所ヲ看認ムルコトナク單ニ内國ノ住所權ノミヲ取ルナリ是レ就中數多ノ住所ヲ同時ニ有スル場合本條ノ第三解ニ於テ尤モ切要ナル關係ヲ爲ス所ナリ

本條ノ原則トスル所ニ依レハ即内國ノ地方裁判所管轄區内ニ住所ヲ有スル外邦人ノ婚姻上ノ爭訟ハ其地方裁判所ニ提起スルヲ得ヘシト雖モ法朗西國及ヒ「バヂ」國ニ於テハ大ニ之ヲ駁撃ス而シテ外國人カ婚姻事件ニ關シ起訴シ得ヘキ例證ヲ要ストナラハ則本法第五百六十八條ヲ見ルヘシ蓋全條第一項ハ配偶夫ノ通常住所ニ依テ裁判管轄ヲ定メ還々其第二項ハ特更ニ獨乙國民タル有夫ノ婦ヲ保護スルノ規則ナリ若シ第一項ノ趣

義ハ果シテ内國民ノミニ限ルモノト爲スルハ豈ニ第二項ノ明文ヲ舉示シ得ヘケン乎又本法第五百九十三條モ右ニ同シク内外國人ニ亘ルモノト解セサルヘカラサルナリ即瘋癲者(本法實施法第十條ニハ浪費者ヲ加フ)ニ加フヘキ保護ハ内地ニ居住スル外國人ニモ亦及ホスヘシト爲スハ蓋妥當ナリ

又内國人ノ訴訟手續ハ之ヲ外國人ニ比シテ本法ニ規定スルヨリモ更ニ簡便ナラシムヘカラソ乎トノ考按「委員」カラウセ「氏」ノ動議遂ニ廢棄セラレタリニ對シテハ特別裁判管轄ノ規則ヲ定メタルト及ヒ本條第六解ノ趣義トヲ以テ満足セシメタリ獨リ反訴ノ管轄ニ付キテハ外國人ニ對シテモ亦本法第三十三條ヲ以テ制裁ヲ加ヒ且證書ニ關スル訴訟及ヒ爲換ニ關スル訴訟ニ付キテハ本法第五百五十八條第一項ヲ以テ全ク反訴ヲ許サ、ルハ妥當ト云フヘカラサルナリ蓋ハ權利ヲ求ムル時ハ則權利ヲ獲取セサル可カラサルヘシ(本法第十四條第十五條ニ對スル第六解參照)

第十四條 〔普通管轄(第二軍人ニ關スルノ條)〕

軍人ハ裁判管轄ニ付キ屯營所在地ヲ以テ其住所ト定ム

此規則ハ專ラ徵兵義務履行ノ爲メ服役シ又ハ獨立シテ住所ヲ有シ能ハサル軍人ニハ之ヲ適用セス

第十五條 (全上)

獨乙國內ニ一定ノ屯營地ヲ有セサル軍隊ニ屬スル軍人ノ裁判管轄ニ付キテハ其軍隊ノ獨乙國內ノ最終ノ屯營地ヲ以テ住所ト定ム

(第一解理由ノ説明) 本法第十四條乃至第十六條ハ被告カ自ラ相當ノ裁判管轄ヲ任意ニ選定シ得ヌ却テ職業又ハ官職ニ依テ定ムヘキ場合ノ普通管轄ヲ確定スル所ナリ

本條ノ軍人ナル語ノ趣義ハ千八百七十四年五月二日頒布ノ帝國軍部法第三十八條ニ詳カナリ又本文第十四條ノ第二項ニ付キテハ本法第二十一條第二項ヲ補助トシテ參照スヘシ(本邦第二十一條第六解參看)乃此第十四條及ヒ第二十一條第二項ハ前述ノ軍事法第三十九條第二項ニ適合ス

(第二解制定ノ沿革及ヒ帝國軍事部條例トノ關係) 本法實施法ノ原案第十條即方今ノ第十二條ニ付キテハ數回ノ會議ヲ閱シ遂ニ第二百二十一回ノ會議ニ於テ該第十二條中ニ廢止セシメサル帝國軍部法第三十九條第三項ト本法第十五條トノ關係如何ヲ論議スルヲ得タルナリ

即軍部法第三十九條第三項ニ於テハ即戰備戒嚴ノ爲メ其屯營ヲ引拂ヒ又ハ永ク外國ニ駐成スル軍隊ニ付キテ其非訴訟事件又ハ爭訟事件ノ裁判管轄ヲ一ノ内國裁判所若クハ

軍事裁判官ニ其都度之ヲ委託シ又ハ各場合ニ付キ特ニ規定スヘキ命令ニ依ラシムト云フ各聯邦法ヲ現存セシメタリ

或議員ハ現今永ク外國ニ駐成スルノ軍隊ナキヲ以テ本法第十五條ニ對スル軍部法第三十九條第三項ハ僅ニ開戰中ニ適用スヘキニ過キサルヘシト主張セリ然ルニ内閣代理員ハ之ヲ反駁シテ該條第三項ハ依然保存セシメサルヘカラサル趣旨ヲ述ヘタリ

蓋該法第三十九條ニ對スル理由説明ヲ見レハ即軍人ニ係ル民事訴訟ニ付キテハ新定ノ訴訟法及ヒ裁判所編制法ニ於テ之ヲ規定センコトヲ豫期シアルナリ然レモ遂ニ茲ニ至ルヲ得スシテ止メリ

而シテ内閣代理員ノ答辨ニ對シ更ニ駁議ヲ爲ス者ナク遂ニ該法第三十九條第三項ハ廢停ニ歸セサルヲ以テ本法實施法第十三條併ニ裁判所編制法實施法第七條參照後ノ通則ニシテ先キノ特法ニ相牴觸セシムヘカラサルカ故ニ戰備戒嚴ノ爲メ屯營ヲ引拂ヒタルニ非ス又外國ニ永駐スルニモ非サル軍隊ニ關シテノミ本條ニ依ルヘキモノト推定シテ可ナリ而シテ帝國直屬地タル「エルサス、ロットリンゲン」州ニ當時駐屯セル軍隊ハ同州ニ屯營之レナルヲ以テ即第十四條ニ依ルヘシ復タ「マインツ」「ラースタット」「ウルム」ノ戍兵ハ其邦君自轄ノ軍隊ヲ除クノ外ハ同ク第十四條ニ依ルヘキナリ

帝國軍部法前ニ編修セラレタル草案ニ於テハ一致シテ外國永駐ノ軍隊ノ裁判管轄ニ付キテ特ニ勅定法ヲ以テ規定スルノ意ナリシコトヲ見ルヘシ

〔第三解獨乙軍人〕 帝國軍部法ヲ按スルニ

第三十八條 常備軍ニ屬スヘキモノハ

〔甲〕平時編制隊ノ軍人即

(イ)士官、軍醫、及ヒ軍吏其任官ノ當日ヨリ以テ免官ノ時期ニ至ル

(ロ)降伏軍人即降伏ノ日ヨリ其終期又ハ降參議約ノ取消ニ至ル

(ハ)隨意兵及ヒ新募生兵、軍部ニ於テ給養ヲ爲スノ日ヨリ又一ケ年隨意兵ハ現ニ軍隊ニ編入セラレタル日ヨリ共ニ其常備軍服役ヲ終ルノ日ニ至ル

〔乙〕(イ)非職ノ士官、軍醫、軍吏及卒ノ現役ヲ命セラレタル者ハ其就職ノ日ヨリ以テ解任ノ日ニ至ル

(ロ)凡ソ戰時ニ方テ兵役ニ徵發セラレ、又ハ隨意ニ從軍スル士官、軍醫、軍吏及ヒ卒ニシテ前項ノ部ニ屬セサル者ハ其徵發ノ命ヲ受ケ又ハ隨意ニ軍隊ニ參着シ編入ノ當日ヨリ以テ解隊ノ當日ニ至ル

〔丙〕軍部ノ文官ハ其任官ノ日ヨリ以テ解任ノ日ニ至ル

第三十九條 軍人ニ對スル特別裁判管轄ハ刑事ニ限ル但是ニ付キテハ別ニ帝國法律ヲ以テ之ヲ定ム

軍人ノ普通裁判管轄ハ其屯營所在地ノ裁判所ニ屬スト雖モ特リ徵兵服役中ノ者又ハ獨立シテ住所ヲ有シ能ハサル者ハ財産ニ關スル訴訟ニ限リ屯營所在地ノ裁判所ニ屬ス

トアリ

而シテ該法第二章ニ付キテハ本條第二解ニ於テ約述ス

帝國高等商事裁判院ニ於テ保險契約ニ關シ戰地行商人ハ軍人ニ屬スルト否トノ問題ニ付キテ凡ソ軍隊(加)之戰地ニ於テニ從ヘアルモ一種ノ理義ニ於テ軍隊ニ加算スル所ノ戰地行商人ヲ直ニ軍人ト見做スハ妥當ナラスト説明ヲタリ(同院判決録第八卷第七拾五號參看)

前項説明ヲ爲セル當時ハ未タ帝國軍部法ノ頒布ナラサリシキト雖モ而カモ該法第三拾八條ノ趣旨ハ右ノ説明ト相抵觸スル所ナキナリ

軍吏ノ字義ニ付キテハ千八百七拾二年度ノ帝國布告彙集ノ目錄ニ明示シアリ尙ホ本法第拾六條第六解ニ就テ觀ルヘシ

抑此第拾四條ハ只ニ裁判管轄ヲ規定スルモノニシテ例ヘハ身分ニ關スル事件ノ如キ民法上ノ住所ニ付キテノ結果ニハ毫モ影響ヲ及ボサズルベシ  
 又帝國軍部法第三拾九條第一項ニハ軍人ノ民事訴訟ニ付キ特典ヲ與フノ例ヲ舉示シアラサレハ即全法第三拾八條ニ於テモ他ノ場合ニ在テハ特典ヲ被ムルモノ例ヘハ退隱士官ニシテ正服用ノ特許ヲ被ムル如キ類ノモノヲ特示セサルハ亦宜ヘナリ  
 本條及ヒ軍部法第三拾九條ハ前項ト同一ナル趣義ニ原ツキ單ニ普通裁判管轄ノミヲ示定スル所ニシテ從テ特典ニ係ル裁判管轄ハ之ヲ許サズルノ意ナリ然レモ本法第二十二條以下ノ特別裁判管轄ニ付キテノ規則ハ軍人ニモ適用スルハ論ヲ俟タス  
 本文第十四條第二項ノ例外規則及ヒ帝國軍部法第三十九條第二項ノ末段ニ付キテハ本法第二十一條第六解ヲ參照スヘシ

〔第四解、外國軍人〕 本文第十四條及ヒ第十五條ハ其趣義併ニ文勢ニ於テ只ニ獨乙軍人ニ對スル規則ナルコトハ顯著ナリ而シテ外國人ニシテ治外法權裁判所編制法第十八條乃至第二十一條ニ歸シアラサル限りハ其軍人ナルト否トヲ問ハズ渾ヘテ本法ニ依ラサルヘカラサルナリ

〔第五解、獨乙船艦(甲軍艦)〕 千八百七十二年六月二十日頒布ノ獨乙帝國軍部刑法ハ其第

百六十二條以下ニ依リ軍艦ニモ適用セラレ、モノコト即同法ニ軍人ト稱スル科目中ニ帝國海軍ヲモ包概セシメアリ今同刑法第百六十四條ヲ抄出センニ即曰海軍ニ付キテ戰備トハ即船艦ノ戰裝ヲ爲シタルモノヲ云フ又各船艦ノ内地河海ヲ距テ單航スルモノハ渾ヘテ戰裝ヲ爲セルモノト同一視スヘシ但陸上ニ在ル水兵ノ戰備ハ此法律ニ於テ陸軍人ト同一ナル場合アルヲ要ス

同刑法併ニ帝國憲法第五十三條ニ基キ千八百六十七年十一月九日ニ於テ頒布シ遂ニ帝國法律ニ採用セラレタル兵役義務條例第二條以下及ヒ第十三條以下ニ於テハ本法第十四條第十五條第二十九條及ヒ帝國軍部法第三十九條第三項(上ノ第二解ヲ見ヨ)ヲ帝國海軍部ニモ適用スヘキ義ヲ明カニセリ即内國海岸ヲ距テ開航スルノ役ニ就ク軍艦ハ勅宣ニ因リ爭訟ヲ裁判スルノ權ヲ攝行スルヲ得ルナリ

軍艦ノ停泊處ヲ以テ其屯駐地及ヒ警備屯戍地ト認メ得ルナリ(帝國官吏條例第二百一十條參照)

又海軍歩兵ニハ一定ノ屯營所アリ(又海軍々吏ニ付キテハ本法第十六條第七解參看)必竟本文第十四條第十五條及ヒ帝國軍部法第三十八條第三十九條ヲ制定スルノ當時ハ軍艦商船ニ關シテハ之ヲ度外ニ措キタルハ敢テ掩フヘカラサルノ成蹟ニテ實ニ遺憾ニ



堪サルナリ然レモ本法草案ハ他ノ場合ニテ往々軍艦ニ關シ規定スル所之ゾアリテ特  
リ愛ニ之ヲ明示セサルモ必スヤ内國船艦ニ適用スルニテ論テ俟テス即本法第百五十八  
條第百四十三條第七百十五條第六第七百四十九條第六第八及ヒ其第五項ヲ參觀  
スヘシ

(乙)商船ニ付キテハ商法第四百五十五條ニ於テ規定ス即船主即チ航海ヲ業トシテ賃料  
ヲ收獲スルニ供スル船舶ノ所有主ナリ(第四百五十條)タルモノハ自身ニ關スルト其船  
舶若クハ運賃ニ關スルトノ別ナク定繫港ノ裁判所ニ起訴セラル、ヲ得○定繫港即登記  
港地ハ商法第四百三十五條第二ニ依リ其港ヨリ開航シテ營業ヲ爲ス地ヲ云フモノニ  
シテ各獨乙商船ハ必ス此港地ヲ一定シアラサルヘカラス(商法第四百三十二條第四  
百三十五條參照)

此第四百五十五條ノ規則ハ亦船ノ共有者ニモ適用ス(商法第四百七十五條)然レモ此裁  
判管轄ハ特定ノモノナラサルヲ以テ本法第三十五條ニ照シ原告ハ選定スルノ權アリ  
又商法第七百六十四條ニ依レハ船ノ債主其抵當權ニ付キテ訴求スル時ハ船長ヲ登記港  
地ノ裁判所ニ訴フヲ得ルコト茲ニ示サ、ルヘカラス  
之ニ反シ船長(カビテイ)(海員條例第二條商法第四百七十八條)水夫、軍艦乘組士官及ヒ卒(商

法第五百二十八條海員條例第三條)ノ裁判管轄ニ付キテハ他ニ規則ヲ定メアラズ獨リ  
海員條例第百五條及ヒ商法第五百三十七條ヲ以テ水夫ノ船長ニ對スル訴訟ハ之ヲ他  
ノ裁判所ニ起訴スルヲ許サズ必ス其登記港地ノ裁判所ニ訴ヘサルヘカラスルノ規則ヲ定  
メアリテ而シテ高等商事裁判院ハ之ヲ認可シテ判決シタル實例アリ

此海上法ノ規則ハ本法實施法第十三條ニ於テ其有効ナルコト示シ且會議ニ於テモ之ヲ  
確認シタリ

裁判所編制法第二十三條第二ニ依レハ船客ト船長トノ間ニ起ル一定ノ訴訟ハ其價額ヲ  
問ハズ乘船地ノ區裁判所ノ管轄ニ屬セシム

是等ノ規則ハ不完全ナルヨリ遂ニ運河船ノ所有主及ヒ其船長水夫併ニ商船ノ所有主ニ  
對シテハ此普通管轄特別管轄ニ付キテ、通則ヲ適用セサルヘカラス然レモ是レ甚ク不  
便ヲ感スヘシ乃商船ノ船長水夫ニシテ數年ヲ費ス航海ノ爲メ異郷ニ飄泊スルモ尙ホ必  
ズ其本國住所地ノ裁判所ニ於テ權利ヲ伸揚セサルヘカラスレハナリ

(第六解外國ノ船艦)是ニ關シテハ裁判所編制法第二十三條第二ニ於テ外國ノ船長ニ  
係ル事項ヲ定メアルノ外ハ帝國法律ニ於テ別ニ規定シアラス(上ノ第五解參照)蓋内外  
國人ヲ同一視スルノ原則ニ據リ本法第十三條第五解外國軍艦及ヒ外國商船ノ所有主

乘組士官、水夫(裁判所編制法第二十二條)第二ノ場合ヲ除キニ對シテハ只本法ノ規則ニ  
 准據シ獨乙國ノ裁判所ニ起訴スルヲ得セシメタルナリ(本法第十三條第七解參照然レ  
 此規則ハ既ニ假差押假差留ニ關スル特別裁判管轄ノ條ヲ刪除シ且本法第十八條第二  
 十四條ノ文義ニ於テ甚タ制限シアルカ爲メ獨乙人ハ旅行地即其執行ノ好果ヲ豫期シ難  
 キ地ニ於テ權利ノ請求ヲ爲ササルヘカラサルノ要迫ニ陷ル如キ頗ル不妥當ノ觀アリ  
 第十六條(普通裁判管轄)第三一定ノ獨乙官吏ニ對スルノ條)

治外法權ノ權利ヲ有スル獨乙人又ハ外國ニ任用セラレタル獨乙帝國  
 又ハ各聯邦ノ官吏ノ裁判管轄ニ付キテハ其本國內ニ有セシ住所地ヲ  
 以テ住所ト定ム但其住所ヲ有セサル時ハ本國ノ首府ヲ以テ其住所ト  
 定ム若シ其首府數多ノ裁判所管轄區ニ分ル、時ハ司法行政上ノ令達  
 ヲ以テ之ヲ定ム

選任領事ニハ此規則ヲ適用セス

(制定ノ沿革) 各草案ハ本條新加ノ第二段第三段ヲ除クノ外悉ク同文ナリ而シテ國議院  
 委員會ノ第一讀會ニハ異議ナク採用セラレタリシモ第二讀會ニ於テ赴任ノ時ニ居住セ  
 ル住所ト定メントノ動議アリタレモ遂ニ廢案ニ屬セリ

(第一解、理由ノ説明) 蓋本條ハ其帝國官吏ニ關スル點ハ千八百七十三年三月三十一日  
 頒布ノ帝國官吏條例ト全ク相符合スレモ更ニ治外法權ノ權ヲ享有スル獨乙人ト外國任  
 用ノ帝國又ハ聯邦ノ官吏トノ別ヲ立テタリ夫治外法權ノ權ヲ享有スル獨乙人ハ獨乙國  
 ノ内外ニ論ナク其本國外ニ住所ヲ有シ得ベシ乃治外法權ニ係ル者トハ憲法第十條ニ依  
 リ又ハ獨乙各聯邦間ニ於テ相駐紮セシムル差遣公使ヲ云フ又外國任用ノ官吏トハ例ヘ  
 ハ關稅同盟委員トシテ「ルッキセンボルク」大公國ニ差駐スル吏員ノ如キヲ云フナリ獨  
 リ選任領事ニハ(千八百六十七年十一月八日頒布ノ帝國領事官條例ノ第七條第九條參  
 照)本條ヲ適用セサルナリ

本條ニ列舉スル輩ニ付キテハ其本國ニ有セシ住所ヲ以テ裁判管轄地ト定ムルハ本然ナ  
 レモ「バイロン」國訴訟法第十三條第一項「オルデンボルク」國全法第十三條「ハンノフル  
 國同法第六條「バデン」國全法第十九條ニ於ケルト一般ニ首府ヲ以テ住所ト認定スルハ  
 卽本則ニアラス只ニ止ヲ得サルニ出ルノ變則ナルノミ若シ首府數多ノ裁判所管轄區ニ  
 分ル、モハ「バイルン」國訴訟法第十三條第二項ニ定ムル如ク其管轄地ト定ムヘキ  
 住所ヲ司法省ノ令達ヲ以テ定ムルナリ又帝國官吏條例第二十一條ニハ官吏ニシテ獨乙  
 國內ニ本國ノ定マラサル者ニ付テ示定シアリ即此場合ニハ其普通裁判管轄ハ「ベルリ

〔府市府裁判所ニ屬スルモノトセリ〕

〔第二解、帝國官吏〕 上ニ掲ケタル帝國官吏條例第二十二條ノ明文ニ曰

外國ニ駐在スル獨乙帝國官吏ハ其本國ニ有セシ本來ノ裁判管轄ヲ保有ス若シ其本國ニ本來ノ裁判管轄ナキ場合ハ本國産地ノ屬スル首府ヲ以テ裁判管轄地ト定ム但産地ヲ有セサル時ハ「ベルリン」府市府裁判所ニ屬セシム又首府數多ノ裁判所管轄區ニ別カレアル時ハ其管轄スヘキ裁判所ヲ司法行政上ノ令達ヲ以テ定ム  
選任領事ニハ此規則ヲ適用セス  
此明文ト本條トコ因テ左ノ結果ヲ顯出スヘシ即

〔甲〕帝國官吏ニシテ勤仕上ノ住所ヲ獨乙國內ニ有シ而ガモ治外法權ノ權ヲ享有セサル者ナレハ本法第十二條第十三條ニ依リ其住所ヲ以テ普通裁判管轄地トナス

〔乙〕其勤仕上ノ住所獨乙國外ニ在ル時ハ産地ニ有セシ普通裁判管轄ヲ繼續シテ之ヲ保有ス産地ニ裁判管轄ヲ有セサル者ニハ首府即司法省ノ定ムル所ノ首府ヲ裁判管轄地ト定ム獨乙國內ニ産地ナキ者ハ「ベルリン」府市府裁判所ノ管轄ニ屬ス而シテ向來ハ此市府裁判所ニ換用スルニ「ベルリン」府區裁判所ヲ以テスヘシ若シ數多ノ區裁判所アルハ本法第十六條第二十一條ニ於ケルト一般ニ司法省ヨリ其一ヲ指定スヘキナリ

元來地方裁判所ニ屬スヘキ事件ニ付キテハ首府又ハ「ベルリン」府ノ區裁判所ノ代リニ其區裁判所々在ノ區ノ地方裁判所ニ屬セシムルナリ

〔丙〕然レモ又帝國官吏條例第二十二條ニハ官吏ノ勤仕上ノ住所〔第二十條〕帝國領事裁判廳ヲ設立シアル邦國ニ在ル時ハ上來ノ規則ニ依テ千八百六十七年十一月八日頒布ノ法律ニ准シ官吏ハ領事裁判廳ノ管轄ニ屬スヘキコトヲ取消サル可シ云々

本法第二十四條ニハ後年帝國法律ニ採用セラレ附録トシテ印刷セラレタル千八百六十五年六月二十九日ノ季漏生國領事裁判權ニ關スル法例ヲ參照トシテ指示セリ  
又起訴セントスル時ハ本法第三十五條ニ依リ領事裁判廳ニ起訴スルモ本國ノ管轄裁判所ニ出訴スルモ原告ノ選定ニ任カス

治外法權ノ權ヲ享有スル帝國官吏ハ通例外國即獨乙國外ニ勤仕上ノ住所ヲ有スヘキカ故ニ其外國ニ住所ヲ有スル點ノミニシテ既ニ本條及ヒ第二十一條ニ依ルヘキナリ若シ此他ノ場合アルキニハ本條ニ依リ其裁判管轄ヲ定メサルヘカラス

〔第三解、各聯邦ノ官吏〕 聯邦官吏ニシテ「ベルリン」府ニ開場スル集議院ノ議員ハ其季漏生國ヨリ出場スル者ヲ除キテ〔裁判所編制法〕原案第六條乃至第九條現今ノ第十八條乃至第二十一條ニ對スル説明及ヒ帝國官吏條例第二十一條第二十二條ニ對スル説明

ヲ參考スヘシ。帝國憲法第十條ニ依リ治外法權ノ權ヲ享有ス又當時尙ホ現行セラルル各聯邦中互ニ其朝廷ニ遣接シ又ハ外國ニ駐紮セシメタル公使モ亦同シ聯邦ノ官吏ニシテ獨乙國外ニ滞在奉職スル鐵道局官吏ノ如キ者モ亦同シ獨乙國內外併ニ外國駐紮ノ他ノ官吏ニ付キテハ上ノ第二解ノ(乙)(丙)ニ號ノ理由ニ從フ

〔第四解、外國〕 治外法權ハ各開明國ニ於テ之ヲ認可ス之ニ反シ他ノ種類ノ官吏ニ付キテハ國約又ハ法律ヲ以テ其滞在スル外國住地ノ裁判權ニ服從スヘキコトヲ規定スルコト往々アリ而シテ是ニ對シテハ本條及ヒ第二十一條ノ爲メ更ニ變更セシメサルナリ

〔第五解、治外法權〕 裁判所編制法第十八條乃至第二十一條ハ亦治外法權ニ關スル規定ニシテ即此權ヲ享有スル獨乙人及ヒ外國人ノ住居スル國家ノ裁判權ノ脫免ヲ規定セリ之ニ反シ本條ハ同法ノ規定ニ因テ必要トスルニ至レル所ノ治外法權ノ權ヲ享有スル獨逸國民ノ普通裁判管轄ニ付キ規定スル所ナリ而シテ何人ニシテ治外法權ノ權利ヲ享有スル者ナル乎ハ裁判所編制法原案第六條乃至第九條即現今第十八條乃至第二十一條ニ對スル説明ニ明カナリ即曰凡ソ外交官吏ノ資格アル人ヲシテ治外法權ノ權利ヲ享受セシムルハ國際公法上一定シアル所ナリ而シテ全權大使全權公使辨理公使代理公使公使館書記官又ハ附屬員等無數ノ官名ヲ一々枚舉スルノ煩ヲ省カンカ爲メ法律ノ明文ニハ

〔帝國又ハ聯邦〕ニ駐劄スル使節ノ長官及ヒ其屬僚ト記スヘシ而シテ裁判所編制法第十八條ニ於テハ現ニ外交使臣ニ屬シアル者ナリトモ其駐劄國ノ臣民籍ノ者ハ之ヲ除ケリ但其產地ニシテ裁判管轄ヲ脫シタル場合ニ限り治外法權ノ權利ヲ享有シ得セシム

又裁判所編制法第十九條ニ於テハ治外法權ノ權利ヲ擴メテ其家族、使役人及ヒ獨乙人ニ非サル從僕ニマテ及ホシ又全法第二十條ニ於テハ本法第二十五條ニ示ス特例ニ限リ治外法權ノ權利ヲ有スル者ニ對スル不動産ニ關スル裁判權ニ付キテ規定スル所ナリ

〔第六解、領事官〕 後年帝國法律ニ採用セラレタル千八百六十七年十一月八日頒布ノ北部獨乙聯邦法律ニ依レハ領事ヲ分ツテ二類トナス即其第七條ニ於ケル任命領事及ヒ第九條ニ於ケル選任領事ノ二是ナリ而シテ特リ任命領事ハ外交官ノ資質ヲ有ス故ニ選任領事ハ本條及ヒ帝國官吏條例ニ依リ裁判管轄ノ通則ニ從ハサルヘカラス是ニ於テ特例ヲ示シタル規則ニハ之ヲ除キアルナリ

裁判所編制法第二十一條ハ更ニ一步ヲ進メテ獨乙國內ニ駐紮スル領事ハ帝國ト外國トノ間ニ於テ別ニ反對ナル約條ヲ締結シアラサル限リハ內國ノ裁判權ニ服從スルモノト規定シタリ

又任命領事ノ獨乙國ニ駐紮スル數ハ甚ク少數ナリトセス己ニ「ライプチヒ」一市ノミニテ四人アリ而シテ其裁判權脫免ノ國約ヲ明舉告示スルハ即行政官司ノ處務ニ屬スヘキナリ

〔第七解、獨乙國陸海軍ノ軍吏〕 陸海軍ノ軍吏ハ即帝國軍部刑法ノ附錄ニ記載アリテ而シテ帝國官吏條例第一條ノ精神ニ依リ帝國官吏ニ屬セム但聯邦軍備同盟上陸軍ニ關シテニ定約シアルモノハ此限外トス〔帝國憲法第十一章參照〕獨リ卒タルノ位置ノ者即兵卒ハ帝國官吏條例第百五十七條ニ依リ只ニ第百二十四條乃至第百四十八條ニ適合スル者ニ限リテ官吏トハ爲サ、ルナリ

是等ノ帝國官吏ニ對シテハ即帝國官吏條例第二十一條乃至第二十二條併ニ本條ヲ適用スヘキナリ而シテ官吏ニシテ且軍人ナルカ故ニ復ク本法第十四條第十五條〔其第二解第三解參看〕及ヒ帝國軍部法第三十八條第三十九條ヲモ併セテ適用セサルヘカラス然ルニ爰ニ此本法第十五條及ヒ帝國軍部法第三十九條第三項ノ關係ニ付キ甚ク煩雜ヲ免ガレサル所アリ乃本條及ヒ帝國官吏條例第二十一條ニ依レハ最終ノ内地屯營所在地ヲ住所ト看做シ其住所地ノ裁判所ノ管轄ニ屬スルモノト解セサルヘカラス且戰備戒嚴ノ場合ニ在テハ〔帝國軍部刑法第百六十四條參照〕本法第十四條及ヒ第十五條ノ第二解ニ

於テ叙述セル理由ニ因シテ本條及ヒ帝國官吏條例第二十一條ノ通則ニ依ラスシテ却テ帝國軍部法第三十九條第三項ノ特別法ニ依ラサルヘカラスナリ即戰備戒嚴中ノ陸軍々隊又ハ戰備艤裝ノ帝國海軍ノ軍吏ハ各聯邦法又其都度特ニ告示セラル、裁判管轄ニ付キテノ法律ニ從テ軍部裁判官若クハアル内國ノ裁判所ノ管轄ニ屬セサルヘカラスナリ

蓋軍吏ニ對スル如此ク複雜ナル規定ニ付キテハ寧ロ此新定訴訟法ニ於テ明瞭ニ之ヲ示定スルハ希望ニ堪ヘサル所ナリ

〔第八解、帝國官吏ニ對スル特別裁判管轄〕 帝國官吏條例第百五十四條ヲ按スルニ即曰

帝國官吏ニ對シ職務上ノ越權又ハ不法ナル職務上ノ怠慢ニ原因スル財產權ニ關スル訴訟ニ付キテハ官吏此所爲ヲ行フノ當時有セシ住所ノ管轄裁判所又ハ起訴ノ時有スル住所ノ管轄裁判所之ヲ管轄ス

トアルニ依レハ官吏ノ爲ス可カラサル行爲〔本法第三十二條參照〕ニ原因スル訴訟ノ提起ニ付キテハ特別ノ規則ヲ定メ其行爲ヲナス時ノ住所又ハ起訴ノ時ノ住所ヲ以テ裁判管轄ト爲シ其一ヲ選定セシムルナリ〔本法第三十二條參照〕然レモ是レ還ク本法第三十二條ト相抵觸スル場合アリ例ヘハ上等驛遞局官吏ノ如キ帝國官吏ニシテ其勤仕上ノ劃

地區數多ノ裁判所管轄區ニ跨リアルモノニシテ而シテ法律上許ルス可カラサル行為ハ其住所地外ニ於テ之ヲ爲シ得ヘキノ類トス此場合ニ方テハ即本法第三十二條ニ依リ其行為ノ地ノ管轄裁判所ニ起訴セシメテ其住所地ノ管轄裁判所ニハ屬セシメサルナリ而シテ如此キ訴訟ハ亦起訴ノ時有スル住所ノ管轄裁判所ニ提起シテ妨ケサル所ハ即本法第十三條併ニ第三十五條ノ趣義ニ適合セリ

又帝國官吏條例第五百五十四條ニシテ少ク本法ト相觸ル所アルモノ尙ホ之ヲ特別法トシテ實行セラルナリ

裁判所編制法第七十條第二ニ依レハ是官吏ニ係ルノ訴訟ハ其訴訟物件ノ價額ニ拘ハラズシテ特ニ地方裁判所ノ權限ニ專屬セシメアルナリ

第十七條 [普通裁判管轄]第四[有夫ノ婦及ヒ子女ニ關スルノ條]

有夫ノ婦ハ裁判管轄ニ付キ本夫ノ住所ニ從フ但平常寢食ヲ別異スルノ言渡ヲ受ケタル時ハ此限ニ在ラス  
正婚上所生ノ子女又ハ是ニ同視セラレタル子女ハ裁判管轄ニ付キ其父ノ住所ニ從ヒ私生ノ子女ハ其母ノ住所ニ從フ但私生ノ子女ハ法律上有効ノ方法ニ於テ其住所ヲ廢スルマテハ之ニ從フモノトス

〔制定ノ沿革〕本條ニ關スル北部獨乙聯邦訴訟法草案ニ付キテハ次ノ第一解ヲ參照スヘシ此他ノ各草案ハ悉ク本條ニ同シ而シテ本條ハ國議院委員會ニ於テ異議ナク採用セラレケリ

〔第一解理由ノ説明〕本條ハ即他人ノ裁判管轄ニ從屬セサルヘカラスル輩ノ裁判管轄ヲ規定セル所ナリ然リ而シテ次ノ第十八條ヲ本條ノ下ニ置キタル所ニ因レハ則如此キ從屬ノ裁判管轄ハ必ズ其本夫、父母ノ住所ニ依テ定メラレ而シテ若シ本夫、父母コシテ現ニ住所ヲ有セサル場合ニハ從テ從屬ノ裁判管轄モ之レアリ得ヘカラスルモノト解釋スヘキナリ亦本法第十四條乃至第十六條ノ規定ハ從屬ノ裁判管轄ニ付キテモ尙ホ適用スヘシ努メテ彼此ノ疑團ヲ抱カシメサランカ爲メ右ノ三條ヲ本條ノ上ニ置キタリ抑從屬ノ裁判管轄ヲ有スルモノニ付キテ詳述スレハ即

〔甲〕有夫ノ婦ハ配偶中民法上獨立ノ住所ヲ有シ得ヘキ時ト雖モ尙ホ本夫ノ住所ヲ以テ其裁判管轄ト定ム故ニ本夫ノ住所ノ現在スル限リハ其婦ハ普通裁判管轄ノ規則ニ從ヒ自己ノ住所ニ依ル能ハス必ズ偏ニ本夫ノ住所ニ從屬セサルヘカラス  
本夫ノ死亡又ハ離婚ニ因テ全ク結婚ノ關係ヲ絶ツニ至テハ從屬ノ裁判管轄即茲ニ滅絶ス而シテ本條ニ於テハ離婚ト平常寢食ノ別異トヲ同等ニ見做シアルナリ本夫其住所ヲ

有セサル時又ハ之ヲ有セサル間ハ其婦ノ裁判管轄上ノ關係ニ付キテハ之ヲ獨立ノ一個  
人ト見做シテ以テ其裁判管轄ハ自立ノ者トシテ本法第十三條及ヒ第十八條ノ普通裁判  
管轄ニ付キテノ規則ニ從ハシム而シテ本夫新ニ住所ヲ定メ得ルニ至リタル時ハ即其婦  
ハ再ヒ從屬ノ裁判管轄ニ復スルナリ又北部獨乙聯邦訴訟法草案第五十條第二項ニハ左  
ノ規則ヲ掲ケタリ即白

有夫ノ婦本夫ニ委棄セラレ且本夫内地ニ住所ヲ有セサル者ナル時ハ其婦ノ從屬ノ裁  
判管轄ハ消滅ス

「ウイルトンベルグ」國訴訟法第三十三條(第一)字漏生國訴訟法草案第七條第二項第三項  
ニモ亦之ヲ規定ス然リト雖モ如此キ特例ノ法律ハ本草案特別裁判管轄ニ付キテノ規則  
中ニ設クルハ敢テ實際上必須ナルモノト看認メサルノミナラス尙ホ且有夫ノ婦カ別異  
自立ノ住所ヲ有スヘキ權利ニ關シ要スル事實上ノ條件ヲ確定セントスルニハ頗ル困難  
ニシテ而シテ果シテ之ヲ確定セントスレハ却テ區々不定ノ方法ヲ以テスルノ悞ナキニ  
非サレハ益之ヲ採ラサルチ良トスヘシ況ンヤ己ニ本夫カ其婦ヲ委棄シタルノ理由ハ實  
際上不適當ナル論斷ニシテ而カモ又夫ノ北部獨乙聯邦草案第二段ノ「本夫内地ニ住所  
ヲ有セサル者」トノ趣旨ニ至テハ即本法第十三條ニ付キテ示シタル一般ノ原則ニ相悞

觸スル所之アルニ於テオヤ

〔乙〕住所ニ依テ定メラル父ノ普通裁判管轄ヲ以テ正婚上所生ノ子女又ハ是ニ同視セラレ  
タル子女ノ普通裁判管轄ト看做シ私生ノ子女ニ付キテハ母ノ住所ヲ以テ其管轄ヲ定メ  
又本條第二項ニ於テ私生ノ子女法律上有効ノ方法ヲ以テ母ノ住所ヲ廢スルマテハ母ノ  
裁判管轄ニ從フノ義ヲ示セリ即私生ノ子女丁年ニ達スルノ后又ハ後見人ノ定マリタル  
后又ハ父ノ承認ヲ受ケタル以上有効ノ方法ヲ以テ母ノ住所ヲ脫スル場合ナリ但父若ク  
ハ母カ自ラ其住所ヲ廢停シタルニ因テ子女ノ裁判管轄ニ害ヲ及ボサ、ルヘシ

而シテ後見人又ハ管財人ノ監督ヲ被ル輩ノ普通裁判管轄ハ其後見ヲ爲ス官廳ノ所在地  
ヲ以テ定ムルノ一事ハ(北部獨乙聯邦訴訟法草案第五十二條字漏生國同上草案第十條)  
遂ニ之ヲ規定セズシテ止メリ必竟如此キ訴訟上幾シト其要ヲ見ルコトナキ裁判管轄ニ  
付キテ特ニ之ヲ規定セサルヘカラサルノ必要ハ實際之レアラサルノミナラス尙ホ且後  
見權ノ本義ヨリ見ルモ被後見人ノ代表權ヲ專ラ後見官廳ノ職權内ニノミ歸セシムルハ  
果シテ妥當ト云ヒ難カルヘキ乎

〔第二解、有夫ノ婦〕有夫ノ婦トハ即其國ノ法律ニ適シタル結婚ヲ爲シタル婦人ニシテ  
而シテ其本夫ノ死去スルマテ本夫ノ住所ニ從フナリ但其關係離別ニ因リ若クハ終生間

寢食ヲ別異スルニ因テ消滅スル以上ハ此限ニ在ラス實ハ向來獨乙國ニ於テハ終生間寢食ヲ別異スル如キ特異ノ事例ハ遂ニ其迹ヲ歛ムルニ至ルヘシト雖モ(民籍ノ證明及ヒ結婚ニ關スル帝國法律第七十七條參照)而カモ當時ハ尙ホ現在スルニ因リ且獨乙國ニ居住スル外國ノ有夫ノ婦ニ關シ要スヘキ場合アルニ因テ本條ニ於テ之ヲ明示シタルナリ

本夫獨乙國ノ内外ヲ問ハス一定ノ住所ヲ有スル時又ハ之ヲ有スル間ハ其婦ハ裁判管轄ノ爲メ別ニ他人ノ住所ヲ有スルヲ得サルナリ例ヘバ一婦人アリ獨乙國「ベルリン」府ニ於テ自ラ時好品ノ販賣ヲ營業トスト雖モ其裁判管轄ヲ定ムヘキ住所ニ付キテハ法朗西國「パリ」府ニ在住スル本夫ニ從屬セサルヘカラス且本夫ノ承諾ヲ得ズシテ更ニ「ベルリン」府ニ裁判管轄ノ住所ヲ定ム能ハサルナリ然リ而シテ如斯ク法朗西民法第千八條ノ規則ニ相同シキ趣義ニ反對シテ法律ヲ制定セントノ動議アリシモ遂ニ行ハレサリシ然レ本法第二十一條以下ニ於テ特別ノ裁判管轄ヲ規定シタルニ因テ前ノ動議ヲ大ニ緩和セシメタリキ

若シ本夫更ニ住所ヲ有セサル時其婦ノ住所ニ關シテハ通則ニ從フヘキナリ然ルニ本案ノ說明ニハ更ニ一步ヲ進メ如此キ有夫ノ婦ヲ獨立ノ一個人ト見做シ獨立ノ住所ヲ定有

ズルモノト解釋セリ必竟本法第十三條ニハ住所ヲ有スルニ至リタル資質如何ニ付キテハ之ヲ確示シアラサルヲ以テ本法ニハ別ニ此趣旨ヲ明言セスト雖モ本法第五十一條第二項ニ參酌シテ推定ヲ得ヘシ何トナレハ婦ニシテ訴訟能力アルハ又其裁判管轄ノ爲メ住所ヲ定メ得ヘケレハナリ

〔第三解(子女)〕如何ナル所生ノ子女ヲ指シテ正婚上所生ノ子女ニ等シキ乎ハ宜ク邦法民ニ從ハサルヘカラス通例ハ承認上ノ子女及ヒ養子ノ二是レナリ(「サツクセン」國民法第千七百八十條第千七百九十七條參照)「ソノ」國ノ法律第七條ハ復タ別ニ「父タルノ全權ヲ有セスシテ養育スル子女」ヲモ加ヘアルナリ又「ライン」部地ニ現行スル法朗西法ニ所謂ノ養育子女(法朗西民法第三百六十一條以下)ハ正婚上ノ本夫ノ權力内ニ屬ス而シテ法朗西民法第三百六十五條ハ裁判管轄ニ付キテ本條第二項ノ爲メ制裁セラレハナリ私生ノ子女ハ生母ノ住所ニ從フモノナルカ故ニ單ニ其實父カ己レノ子女ナリト承認スルノミコトニ更ニ其効力ヲ生セス又棄兒ノ如キ其生母ノ不分明ナル者ニ對シテハ即本法ニ於テハ幼年者ノ爲メ後見人ヲ立テ始メテ其住所ヲ定メ得ルノ外ハ更ニ一定ノ規則ヲ制定シアラス蓋獨乙普通法ノ現ニ其子女カ養育ヲ被ムル養育院ヲ以テ子女ノ住所ト定ムル規則ヲ應用スルモ固トヨリ妨ケサルヘシ(本法第二十一條參照)



正婚上ノ本夫又ハ私生ノ子女ノ母一定ノ住所ヲ有セザル場合ニ其子女ハ父又ハ母ノ帮助ヲ頼テ一定ノ住所ヲ有スルヲ得ヘシ若シ然ル能ハサル時ハ還テ邦法ニ從ハサルヘカラス尙ホ本法第二十一條ヲ參照スヘシ  
子女法律上有効ノ手續ヲ以テ其從屬ノ住所ヲ廢セサル限りハ即正婚ノ父又ハ私生ノ母ノ住所ニ屬セサルヘカラス而シテ其父又ハ生母ノ死去後ト雖モ必ス繼續シアルモノナリ

是趣義ハ第二讀會ニ於テ大ナル賛成ヲ得テ認可セラレタリシ

〔第四解、被後見人〕本條ノ說明(上ノ第一解)ニ於テハ獨乙國內ノ法朗西民法現行地ニテハ其第百八條ヲ以テ子女ハ假令モ其父母存命中ナリモ後見人ノ住所ニ屬スヘシト規定セラルコトヲ脱遺シタリ

而シテ幼年者ニ關シテハ右ノ法朗西法律ハ本條ヲ爲メ排棄セラル、ナリ蓋本條ハ法朗西民法ト全ク相反シタル李滬生國裁判所規定第二十條ノ主義ニ本キタルモノナリ

既ニ丁年ニ達シタル後見解免者ニ關シテハ即本按說明中ニ邦法ノ主義ヲ取消スヘキコトヲ述ヘス又毫モ之ヲ企期スルノ意ヲ見ルヘキモノナリ殊ニ法文上ニ於テモ亦之ヲ付キ明言シアラサルナリ然リ而シテ本法第十三條第一解ニ依レハ即邦法ハ住所ノ得失ニ付

キ斷定スルモノナレハ乃丁年以上ニ達シ後見ヲ免脱シタル者ノ住所ニ關シテハ亦仍ホ邦法ニ依ルヘキナリ  
他行シ又ハ失踪セル者ノ後見ニ關シテモ亦前項ノ趣義ニ同シ(ニサツクセシ)國第千九百九十條第千九百九十五條參照)

〔第五解、裁判管轄ノ認定〕本條各項ニ於テハ只裁判管轄ニ付キテ其人ノ住所ヲ看做スノミノ意ニシテ更ニ民法上ニ關係ヲ及ホサルナリ必竟民法ニ於ケル住所ハ裁判管轄ニ關スル住所ノ理義ト全ク相異ナル結果ヲ成スヘキ場合之レアルナリ

第十八條 (普通裁判管轄第五)寄留地ニ關スルノ條

一定ノ住所ヲ有セサル者ノ普通裁判管轄ハ獨乙國內ニ於テ現ニ寄留スル地ニ依テ之ヲ定ム若シ寄留地不分明ナル時ハ其最終ノ住所ニ依テ之ヲ定ム

〔第一解、理由ノ說明〕本條ニ付キテノ說明ハ己ニ本法第十三條ニ對スル理由說明ニ於テ盡シアルナリ抑、被告ノ寄留地ヲ以テ裁判管轄地ト定ムルハ即外國内地共ニ一定ノ住所ヲ有セス從テ普通裁判管轄ヲ定メ難キ者ニシテ初テ之ニ依ルベキナリ蓋法權保護ヲ得易カラシメンカ爲メニハ概シテ管ニ永ク寄留スル地ノミニ局限セス亦一時ノ寄留

地ヲモ包含セシムルハ實際上便利妥當ナルカ如シ殊ニ況ヤ居留時限ノ長短ノ區域ハ判然劃定スルニ難キ所ナルヲヤ乃本條ノ普通裁判管轄ハ被告カ將ニ起訴セラレシトスルノ時該當裁判所管轄區内ニ居留シアリテ而シテ訴狀ノ送達ヲ爲シ得ルノ時限間尙ホ居留スレハ即可ナリトスルノ意義ナリ〔尙ホ下ノ第五解參考〕然リ而シテ被告ノ獨乙國內ノ寄留地不分明ナル時ハ被告ノ最終ノ住所ヲ管轄スル裁判所ニ起訴シ得ルナリ此場合ニ於テハ復々其最終ノ住所外國ニ在ルト内地ニ在ルトヲ問フヲ要セサルヘシ〔本法第十三條第五解第七解參照〕

〔第二解本法第廿一條トノ區別〕本條ハ被告ノ内外國人タルコ論ナク凡ソ内地外國ニ一定ノ住所ヲ有セサル時假令其一時ノ居留タリモ其居留スル地ヲ以テ普通裁判管轄ト定メタルナリ之ニ反シテ本法第二十一條ハ即被告實ハ別ニ普通裁判管轄ヲ有シアリト雖モ而カモアル地方ニ永ク寄留スル時ハ其寄留地ヲ以テ特別裁判管轄ト爲シ財產權ニ關スル訴求ニ限り起訴セラレ得ルノ規則ヲ明示シタルナリ

〔第三解制定ノ沿革〕〔外國人〕北部獨乙聯邦訴訟法草案第四十三條ニ於テハ被告獨乙國內ニ一定ノ住所ナキ時其居留地ヲ以テ普通裁判管轄ト爲ストアレハ即凡ソ何レノ地ニモ住所ヲ定メサル者及ビ内外國人ヲ論セス外國ニ住所ヲ定ムル者ヲ包括スルノ義ナリ

然レモ外國人原告トナリ外國ニ住所ヲ定ムル被告ニ係リ起訴スル場合ニハ財產權ニ限リ其寄留地ヲ以テ裁判管轄トナスノ制限アリ然レモ本條ニ於テハ内外國人ヲ同一視スルノ原則〔本法第十三條第五解第七解〕ヲ改正シタリ是故ニ本法ニ依レハ內國又ハ外國ニ住所ヲ定ムル外國人ノ普通裁判管轄ハ內國ノ寄留地ヲ以テ之ヲ定ムルコトヲ爲サス但永ク寄留スル寄留地ヲ以テ特別裁判管轄ト定ムルノミ〔本法第二十一條參照〕他ノ各草案ニ於テハ其主點ハ皆同一ナリ本條ノ如ク意義ヲ擴張セル動義ハ第一讀會ニ於テ國議院委員之ヲ排棄シタリシモ〔會議筆記錄第八丁〕第二讀會ニ於テ遂ニ異議ナク是認採用セラレタリ〔會議筆記錄第五百六丁〕

〔第四解遺產〕本法第二十八條ニ於テハ遺產ニ付テ特別ノ裁判管轄ヲ定メ即遺產者死去ノ時普通裁判管轄ヲ有シタル裁判所ノ管轄ニ屬セシムルナリ即遺產者若シ一定ノ住所ヲ有セサル內國人若クハ外國人ナル時ハ則其寄留地ヲ普通裁判管轄地トナシテ而シテ其死去セシ地ノ裁判所ハ即遺產ノ管轄裁判所ナルナリ〔即第二十八條第一解參照〕即法朗西民法第百十條及ヒ「サククセン」國民法第十七條ノ遺產者ノ最終ノ住所ニ依ル義ヲ遵舍シタルナリ然レモ本法ハ單ニ裁判管轄ニ付キテノミ定メタルナリ〔第二十八條第三解參照〕

〔第五解、寄留地ニ依テ普通裁判管轄ヲ定ムルノ義理〕 上ノ第四解ニ述ル所ニ依レハ上ノ第一解ニ於テ訴狀ノ送達ヲ爲シ得ルト云フノミニテハ未ダ盡サ、ル所アルカ如シ而シテ只一定ノ住所ナキ本人ニ係リ訴訟ヲ起ス場合ノミチ指シタルモノニシテ即本法第二百三十條第二百三十五條ノ第二ニ基キタル適當ノ解釋ト云フヘシ抑、本條ノ普通裁判管轄ヲ定ムル義理中自ラ善良ナル制限ノ趣義ヲ含蓄シテ即住所ヲ有セサル被告ニ必ズ訴狀ノ送達ヲ實行セタル確乎タル事實アルヲ要スル義ヲ含ムナリ

必竟本條ノ義理ハ偏ニ訴狀ヲ受收セシメ得ルヲ要旨ト爲スニ在ルノ點ハ必ズ須ク輕々看過スヘカヲサルナリ而シテ例ヘハ若シ其被告裁判所執行吏ヲ避テ隱匿シ又ハ本法第百六十六條ノ場合ノ如ク實ニ送達ヲ執行シ能ハサル時ニ方テハ輒チ本法第百六十七條ノ規則ニ照シ斷行シ得ルハ當然ナリ是レ復タ原告ニ於テ被告當時ノ寄留ハ確實ニ之レアリコトヲ明示シ得ル限リハ乃自ラ曖昧ナル裁判管轄ヲ防遏スルヲ得ヘキナリ

第十九條 〔普通裁判管轄第六協會及ヒ結社ニ關スルノ條〕

町村公會並ニ其資格ヲ以テ出訴セラル、コトヲ得ヘキ會社、組合其他協會、義捐物公舎及ヒ積財ノ普通裁判管轄ハ其所在地ニ依テ之ヲ定ム若シ別段ノ定メアルニアラサレハ其管理ヲ爲ス地ヲ所在地ト看做ス

ス

鑛業會社ノ普通裁判管轄ハ其鑛坑ノ所在地ニ依テ之ヲ定メ又其資格ヲ以テ出訴セラル、コトヲ得ル官廳ハ其廳所在地ニ依テ普通裁判管轄ヲ定ム

本條ノ規則ノ外會社申合セ條款又ハ他ノ方法ニ依テ特ニ規定シアル時ハ其特別ノ裁判管轄ニ依ルヲ許ルス

〔第一解、制定ノ沿革〕 本條ノ第一項第二項ハ各草案皆相同シト雖モ獨リ第三項ハ政府ノ起稿セル兩草案併ニ北部獨乙聯邦訴訟法草案ニ

會社申合セ條款又ハ他ノ方法ニ依テ特別ニ規定シアル時ハ本條ノ規則ヲ適用セストアルナリ

然ルニ國議院委員會ニ於テ初メ其第一讀會ノ時右ノ字句ヲ改メ本文ノ如ク修正シタリ當時此項ヲ全ク刪除セントノ動議アリテ乃私人專定ノ内規ヲシテ如此キ効力ヲ有セシムルハ宜シカラスト云フノ理由ヲ主張シタリ又之ヲ反駁セル説ハ即外國ノ保險會社ノ爲メ其規約條款ニ基キ内國ニ普通裁判管轄ヲ有セシムルヲ必要トナスカ故ニ此第三項ハ刪除スヘカラスト論シタリ此ニ説ヲ調和シテ以テ其義理ヨリハ單口行文ノ修正ヲ爲

スノ一動議起リ終ニ之ヲ是認採用シタル其原案ハ  
會社申合セ條款又ハ他ノ方法ニ依テ特別ニ規定シタル裁判管轄ハ此規則ノ爲メ無効  
ナリト爲サス

トアリシテ起稿委員本文ノ如ク改訂シタルナリ

〔第二解理由ノ説明〕 抑本條ニ於テ無形人其他民法上裁判所ニ起訴セラレ得ヘキ所  
ノ一個有形人ト見做スモノニ屬セサル人体ノ普通裁判管轄ニ付キ規定シタル原則ハ即  
現行法律殊ニ獨乙商法及ヒ千八百六十八年七月四日頒布ノ殖産計利會社ニ關スル本然  
ノ裁判管轄ヲ定メタル帝國法律ニ適合スル所ナリ又鐵業會社ノ裁判管轄ニ付キテノ規  
則ハ千八百六十五年六月二十四日頒布ノ季漏生國鑛業法第九十六條ニ因據セルナリ必  
竟其會社ノ申合セ條款又ハ他ノ方法例ヘハ會社ノ原約等ニ於テ特別ニ規定シタル裁判  
管轄ハ本條ノ規則ニ先ツツヘキ主タルモノナルカ故ニ實ハ本條ハ一ノ補助規則タルノ  
趣義ニ過キササルナリ(尙ホ前ノ第一解參看)

〔第三解無形人〕 蓋町村公會義捐物、公舍積財ヲ包括シテ無形人ト云フモノナルニ本條  
ニ於テ特更ニ一々之ヲ列舉シタルハ即數種ノ義ヲ包含シテ往々疑義ヲ免カレサル所ノ  
無形人ナル語ヲ用フルヲ避クルカ爲メナリ(ウインドンヤイド)氏註釋第一卷第四十九條

及ヒ「アールシド」氏全上第四十一條第三註ヲ見ヨ(殊ニ「アールシド」氏ハ「ウングル」氏ノ  
說ノ無形人トハ即吾人カ無主ノ財産ノ自存スル以顯況ナリト想定スルコトニ百年ノ昔  
日以來慣レアル所ノ形跡的是レナリトスル所ヲ贊成シアルナリ而シテ「サックセン」國民  
法第五十二條ハ獨乙普通法ノ趣義ニ反シ無形人ハ政府ノ認可ヲ受ケタルモノナラサル  
可カラスト爲シ亦「バテン」國千八百七七年七月十四日ノ第二ノ憲法宣令ノ第九條ニハ即  
無形人ハ政府ノ認可ヲ受ケ始メテ成立ツテ得ト明示シアルナリ然リト雖モ此成立チノ  
如何ニ關スル問題ニ付キテハ敢テ之ヲ論究スルヲ要セヌ到底此法律ノ實例併ニ理由ノ  
説明ニ於テ凡ソ民法上無形人ト爲シ且出訴セラレ得ヘキモノニハ悉ク本條ヲ適用スル  
コトヲ示シアルナリ尙ホ下ノ第九解ヲ參考スヘシ  
又株式會社ハ無形人ト見做シ得ヘキ乎否トノ問題ニ於テハ次ノ第四解ニ從テ敢テ本條  
ノ要トスル所ニ非ス  
〔第四解會社〕 本條ノ會社トハ民法上及ヒ商法上ノ會社ヲ包括シアル義ナリ商法第百  
十一條第百六十四條第百二十三條ハ概シテ商事會社ノ各種類ヲ問ハス  
商事會社ノ裁判管轄ハ其所在地ヲ管轄スル裁判所之ヲ管轄ス  
ト明示シテ平等ニ定メアリ然レモ是カ爲メ必ズシモ他ノ特定ノ裁判管轄ヲ允准セ

サルニハ非ス(帝國高等商事裁判院判決録第十二卷第七參看)普通裁判管轄ト特別裁判管轄ト相撞著スル場合殊ニアル場合ニ付キ普通裁判管轄ト限定シアル時ト雖モ亦尙ホ現今ニ於テハ敢テ特定ノ裁判管轄ヲ允サ、ルコ非サルナリ(本法第十二條第二解併ニ第三十五條參照)

商事會社ニ付キテハ其責任ヲ有スル首長ノ住所ヲ以テ裁判管轄ヲ定メ得ルコハ現今尙ホ未ク廢止セサル所トス(「アウヘルト」氏商法釋義第一卷參看)

然リ而シテ本法實施法第十三條ニ於テ廢止セシメサル商法中海上法ニ關スル條ノ第四百五十五條第四百七十五條ハ一ノ特例ナリ即此二條ニ依レハ回漕會社ノ所在地ニ依ラス必ス其船舶ノ屬スル本港地ヲ以テ裁判管轄ト定メタリ(本法第十四條第十五條第五解參照)

方今ニ至ルマテハ民法上會社ノ普通裁判管轄ナルモノヲ一般ニ認定セサリシナリ(「バデン」國訴訟法第二十六條「バイロン」國全上第十六條參看)而シテ其制限ニ付キテハ下ノ第九解ヲ參酌スヘシ

〔第五解〕會社、組合、又ハ協會ノ解散後ニ於テ其裁判管轄ノ繼續スル時限(是ニ關シテハ各聯邦法ナルモノ現ニ實行セラル、限リハ本法實施法第十五條第二ノ規則ニ依リ必ス

其法ニ從ハサルヘカラサルナリ)即帝國法ニ於テハ商法上ノ會社ニ付キテ商法第四百四十四條第二項第七十二條第二百四十四條第二百四十七條第二ヲ以テ其精算勘定ヲ結了スルマテ繼續スルコトニ定メ又登記上組合ニ付キテハ千八百六十八年七月四日頒布ノ會社條例第四十九條第二項ヲ以テ其繼續期限ヲ定メアルナリ蓋本法實施法第十五條第二ニ依レハ會社等ノ解散ト共ニ其裁判管轄ハ消滅スルモノニ非サルノ義ニシテ而カモ本法第二十三條ノ第三解ニ於テ述フル如ク必ス後日マテ繼續スルモノト定メサルヘカラサルナリ

〔第六解〕組合 是ニ付キテハ前項併ニ次ノ第七解ヲ參照スヘシ前項ニ舉ケタル帝國會社條例第十一條第二項ニ依レハ登記上組合ノ裁判管轄ハ其所在地ノ裁判所ニ屬スヘシト定メタリ又本條第四解ノ第一項ニ述フル所ハ亦爰ニ應用セラルヘシ且本條ハ帝國會社條例ニ揭ケサル組合ニモ應用セラルヘキハ論ヲ俟タス

〔第七解〕協會 是ニ關シテハ上ノ第五解ヲ參照スヘシ本條ニ於テ會社、組合ト共ニ特ニ協會ヲ明舉シアルコト依レハ即素ト會社ト稱シタルハアル財産ニ關スル共同結社ヲ指ス專用語ナリト解スヘシ(「サツクセン」國民法第五十二條以下及ヒ第一千三百五十九條法朗西民法第八百三十二條商法第八十五條第五百十條參照之)反シ協會トハ財産權ニ

關スル目的ニ非サルモノ例ハ遊樂ノ爲メ又ハ修業ノ爲メニ結社スルノ類ヲ指スナリ  
 李滯生内國通法第二卷第六章第一條以下及ヒ獨乙普通法ニ於テハ此協會ナルモノヲ會  
 社中ニ算入セリ其理由ハ即「アイルランド」氏ノ説ノ如ク凡ソ協會ヲ起スノ目的ヲ達スル  
 コハ必ス先ツ財產權上ノ結合ヲ爲シテ初メテ成立スルヲ得ルモノナラサルハ之レナシ  
 ト云フニ在リ又組合トハ即其會員共同ニ營業シテ以テ信用、工商業、又ハ經濟ノ進歩ヲ  
 企期シ其組合員數ヲ制限セサル會社ヲ指スノ術語ナルナリ宜ク本條第六解ニ於テ指シ  
 タル帝國法ノ第一條ヲ參考スヘシ「千八百七十一年五月十九日頒布ノ帝國普通法」又協  
 會ト稱スルモノハ聯邦法ニ於テ無形人ナリト認定スヘキモノナルト否トハ敢テ論スル  
 ヲ要セス只之ヲ一個全体トシテ之ニ係リ出訴シ得ルト否トニ關係ヲ有スルノミ「下第  
 九解參看」又果シテ無形人ナリト定メアル以上ハ之ニ係リ起訴シ得ルハ固トヨリ疑フ  
 ヘカラサルヘシ

〔第八解、公舍積財〕「サックセン」國民法第五十二條ニ於テモ之ト同文字アレモ本條ニ掲グ  
 ル義捐物ノ語ヲ明示セス而シテ「シベンハール」氏「シーギマン」氏ノ全法註釋ニ公舍トハ  
 殊ニ寺院、教會、學校、寺院ノ組合「氏子」及ヒ義捐物ヲ包含スト解釋シタリ  
 抑、公舍及ヒ積財ナル語ハ義捐物ナル語ニ對シ且本條ノ冒頭ニ列載スル町村及ヒ公會

ノ語アル所ニ對シテ必ス是等ニ異ナル義理ノモノト解釋セサルヘカラス例ヘハ慈惠ニ  
 出ル私立病院又ハ規則書ニ所在チ一定セサルヘカラスシテ且其所ニ本然ノ裁判管轄ヲ  
 有スル登記上ノ救恤金庫ノ類ハ即公舍ノ一ナリ「千八百七十六年四月七日頒布ノ帝國  
 法第一條第十二條參看」又獨乙普通法ニ依レハ無主ノ遺産ハ積財ノ一ト見做シアルナ  
 リ  
 此他爰ニモ亦本條第七解ノ末段ヲ參酌シテ可ナリ

〔第九解、其資格ヲ以テ出訴セラル、コトヲ得ヘキ〕本條ニ出訴セラル、コトヲ得ヘキ  
 トアルハ即會社、組合、協會、義捐物、公舍、積財ニ涉リ説明シタルモノト知ルヘシ是即會  
 社其他ノ訴訟能力ニ付キテハ民法ニ於テ規定スル所ニ推移スルノ趣義ナルヲ見ルニ足  
 ルヘキナリ〔本法第五十條第二解參看〕

本條ノ精神ハ即前項ニ述ル如クナルヲ以テ恰モ是ニ適當スル「バイルン」國訴訟法第  
 十六條第二項ノ精神トハ自ラ異ナルニ至レリ乃「バイルン」國ノ全條ニ於テハ本條ノ如  
 ク制限ノ意ヲ含マシテ只會社其他ニシテ公然一ノ組成体トシテ顯存スルモノナル乎  
 否トノ如何ヲ問フノミナリ蓋妥當ト云フヘシ必竟本法第五百七條第二項ニ於テ會社  
 等ノ未タ其權利ヲ全有セサル代理人ト雖モ送達書類ハ之ヲ受収セサルヘカラスルノ責

ヲ負ハシメアル所ナレハ復タ本條ノ裁判管轄ニ付キテモ會社其他ノ敢テ民法上ノ資質ヲ具備スルト否トニ拘ハラヌ出訴セラレ得ヘキモノト一概ニ定ムルヲ可トスルモノノ如シ

本條ノ精神ニ依レハ即無形人ノ當否及ヒ會社其他ノ本性即一全体トシテ出訴セラレ得ヘキ能力ノ可否ニ付キテハ民法(當時ハ尙ホ帝國法及ヒ各聯邦法)ノ定ムル所ナルナリ而シテ如何ノ聯邦法ニシテ是ニ付キ尙ホ有効力ナル乎ハ本法第五十條第六解ヲ參考スヘシ

帝國法ニ於テハ即商事會社(登記上組合)商法第百一十一條第百六十四條第百一十三條及ヒ會社條例第十一條(登記上救恤金庫)千八百七十六年四月七日ノ帝國法第五條ハ之ヲ一全体トシテ出訴セラレ得ヘキ資質ノモノト定メタリ又帝國中央銀行ハ無形人ナリト定メラル(千八百七十五年三月十四日ノ銀行條例第十二條)救恤金庫ニ付キテハ千八百七十六年四月八日ノ帝國法第二條ヲ參考スヘシ

本條ノ規則ニ拘ハラヌ聯邦法ニ於テ無形人タルヲ認メサル協會及ヒ會社ニシテ單ニ共同訴訟人ノ集合ナリト見做スヘキ場合ニハ其普通裁判管轄ニ付キテハ本條ニ依ラヌシテ反テ本法第三十六條第三ノ共同訴訟人ノ特別裁判管轄ニ准據セサルヘカラス

民法上ノ會社其他ノモノヲ無形人ナリト認ムト云ヘハ即自ラ當ニ出訴セラレ得ヘキノ趣義ヲ包含スルナリ然リ而シテ獨乙普通法ニ依レハ即實際概シテ政府力無形人ヲ認否スルノ規定アラサル邦國ニ於ケルアル公會ニ類似スル共同的ヲシテ無形人タルノ資質ヲ保有セシムルモノト定メタリ

(第十解、若シ別段ノ定メアルニ非サレハ其管理ヲ爲ス地ヲ所在地ト看做ス)此別段ノ定メアルニアラサレハノ明文ハ即會社ノ組立規約又ハ申合セ條款ニ依リ其管理ヲ爲ス場所ノ外ニ別ニ所在地ヲ移轉シ得ルノ權利ヲ付與シタル義ナリ

鐵道株式會社ノ如キ其線路ハ數多ノ裁判管轄區ヲ通過シテ營業ヲ爲スキハ其各所ノ主タル停車場ニ事務所ヲ置クモ而カモ其所在地ハ即申合セ條款ニ明示スル所ニ依テ定ムヘキナリ(商法第二百九條第一ヲ參看)又アル合本會社ニシテ隔絶セル場所ニ製造所ヲ設ケ而シテ其所ニ社長住居スル時ト雖モ監督人併ニ株主總會ノ便宜ノ爲メ他ノ裁判管轄ニ屬スル首府ニ其所在地ヲ定メ置クヲ得ヘシ然ルキハ其定メタル所在地ハ即普通裁判管轄ノ以テ定マル所ニシテ而カモ製造所ノ現在スル所ハ却テ本法第二十二條ノ特別裁判管轄地タルニ至ルナリ

又義捐物ノ如キ其實際ノ事務管理ハ財産ノ現在スル場所ニ於テ之ヲ爲スモ而カモ其代

表者ハ他所ニ住居スルモノ即法律上ノ財産管理ハ他所ニ在ルノ類ハ往々之レアリ得ヘキノ事實ナリ○帝國中央銀行ノ主タル所在地ハ「ベルリン」府ト定ム（千八百七十五年三月十四日頒布銀行條例第十二條）

〔第十一解、鑛業會社〕本條第二解ヲ參考スヘシ而シテ其第二解ニ指ス「宇漏生國鑛業條例」例ニハ

第九十四條 二人又ハ二人以上相共同シテ鑛業ヲ營ムチ稱シテ鑛業會社ト云フ

第九十六條 鑛業會社ハ其社名ヲ以テ權利ヲ主張シ義務ヲ負擔シ土地ヲ所有シ又ハ

其他ノ物上權ヲ享有シ裁判所ニ出訴シ若クハ出訴セラレ得ヘシ但其本然ノ裁判管轄

ハ鑛坑所在地ヲ管轄スル裁判所ニ屬ス

トアリ尚ホ「グロステルマン」氏「宇漏生國鑛業條例解釋」ヲ參考スヘシ氏ハ全條例第九十

六條ニ依リテ以テ鑛業會社ハ無形人ナリト論定シタルハ不當ノ甚キモノト云フヘシ是

ニ付キテハ「プツヘルト」氏「商法釋義第一卷」ノ商法第百十一條ニ關シ說述スル所ヲ見ルヘ

〔第十二解、官廳〕是レ單ニ政府ノ官廳ノミニ限ルニ非スシテ又町村併ニ寺院ノ事務廳ヲモ包括スルナリ而シテ是ニ係リ出訴シ得ルト否トハ各聯邦法ニ從テ異同アルヘシ○

當時此出訴セララルハ「コト」ヲ得ルトアルノ點ニ付キテ大ニ議論アリシモ二三聯邦ノ集議院代議員例ヘハ「メックレンボルグ」國代議員ノ如キハ之ヲ贊成シ且人民公衆ノ爲メ甚ク便利ナリト主張シタリ

必竟官廳ナル者ハ公法上無形人ト認定シ得ヘキ乎否ノ點ニ大ナル關係ヲ有スルノミ例ヘハ其財産ヲ自治スル大學校ノ如キハ猶ホ公會、組合、又ハ官廳ノ如キモノニテ即必ス出訴セラレ得ル者ト爲サ、ルヘカラス

〔第十三解、本條第三項〕第三項ニ付キテハ宜ク第一解ヲ參考スヘシ即是ニ依レハ本項ハ實ニ其章句ヲ改正セラレタルノミナラス其義理上モ亦自ラ修正セラレタルヲ見ルヘシ彼ノ政府起案ノ原稿ニ專屬ナリト制限シアリタルヲ改テ町村其他ノ普通裁判管轄ハ其所在地ヲ以テ定ムルノ外尚ホ申合セ條款又ハ他ノ方法ヲ以テ定ムル他ノ場所ニ依ルヲ得ルノ權利ヲ與フルニ至レリ是ニ付キテハ殊ニ外國即獨乙國民ニ非サル保險會社ニ顧慮スル所アリタルナリ然レモ方今ニ至テハ廣大ナル株式銀行ニシテ各地ニ支店ヲ有スルモノ其申合セ條款ヲ以テ各訴訟ハ實ニ其本店ノ所在地ニ止ラス各支店地ニテ訴ヘラレ得ヘキ權利アルモノト定ムルヲ禁停セサルモノ、如クナリ是レ全ク本法第二十二條ノ規則併ニ第四十條ノ認諾訴訟即財産權ニ關スル一定ノ訴訟ニ局限スル裁判管轄ニ付



キテノ規則ニ係ラサルモノトス如此キ場合ハ即該銀行ハ數多ノ普通裁判管轄ヲ有スル所ニシテ而シテ本法第三十五條ニ准シ原告ノ選定ニ任スヘクシテ本條第一項第二項ノ明文ヲ以テ專屬ト定メタル普通裁判管轄ニ依ラシムヘカラサルナリ

第二十條 [普通裁判管轄(第七)國庫ニ關スルノ條]

國庫ノ普通裁判管轄ハ訴訟ニ付キ國庫ヲ代理スルカ爲メ命セラレタル官廳ノ所在地ニ依テ之ヲ定ム

[第一解、理由ノ説明] 本條ハ李滯生國千八百五十一年四月二十六日頒布ノ法律第二條第二併ニ李滯生訴訟法草案第十三條及北部獨乙聯邦今草案第四十九條ト相符合シアリテ國庫ノ普通裁判管轄ハ其訴訟上代理ヲ命セラレタル官廳ノ所在地ニ依テ定メタリ蓋此原則ヲ應用スヘキハ即例ヘハ千八百七十一年六月二十七日頒布ノ帝國陸海軍人退隱給、扶助給ニ付テノ法律第百十六條ニ基キ退隱給、扶助給ヲ請求スル訴訟又ハ千八百七十年十月二十八日ノ帝國郵便法第十三條ニ因リ帝國郵便部官有金庫ニ係リ賠償請求ノ訴訟又ハ千八百七十三年三月三十一日ノ帝國官吏服務條例第百五十一條ニ因リ國庫ニ係リ起ス訴訟ノ類是ナリトス必竟本條ノ規則ハ如此ク大ニ公法ニ係累スル訴訟ノ爲メカメテ其裁判管轄ヲ統一ナラシムヘキ行政上ノ必需ニ適當スルモノニシテ而カモ彼

ノ官有金ノ普通裁判管轄ヲ太タ區々ニ分定シアル各聯邦法ニ比スレハ復カニ優レル良法ナリ(「バイロン」國第十五條、「バデン」國第二十一條、「ウエルテンベルク」國第三十八條等參看)

[第二解、制定ノ沿革] 本條ハ五草案共ニ其行文ヲモ同フスレモ其第一讀會ニ於テ大ニ論駁ヲ被リタリ其理由トセル所ハ即本條ノ明文ニテハ帝國々庫ヲモ包轄スルノ意義判然シ難ク又政府ハ其資格ヲ以テ國庫ニ關シテ單ニ財產權上ノ資質ニ於テノミナラス尙ホ復タ國法上ノ資質ニ於テ出訴セラレ得ル場合之レナキモ保シ難ク又アル邦國ニシテ政府ニ對スル總テノ訴訟ハ其中央局ノ所在地ニ就テ爲スヘントシテ悉ク首都ノ裁判所ニ收集スル如キハ必ス之ヲ避ケサルヘカラスト云フニ在リシ

右ノ駁議ハ大ニ反駁ヲ受ケタリ  
遂ニ内閣代理員ノ承認上國庫トハ即帝國々庫ヲモ包轄スルノ精神ナリト議定シ以テ修正說ヲ廢棄シ原案ヲ採用セラレタリ然レモ筆記録中所謂ノ公正ノ解釋ヲ列載スル部門中ニハ此議定ヲ登載シアラサルナリ尙ホ本法第五條第二解ヲ參考セヨ  
又第二讀會ニ於テ種々ノ動議ヲ提出シテ即何人ニシテ果シテ帝國及ヒ各聯邦ノ國庫ヲ代表スヘキ乎又果シテ何レノ地カ本條ノ普通裁判管轄ノ屬ス可キ所ナル乎ノ質問ヲ起

シタリ然ルニ各聯邦ニ關シテハ其邦ノ法律制度ニ任カスヘシト全會一致ノ決議ヲナシ而シテ帝國々庫ニ付キテハ内閣代理員本條ノ第一解ニ指ス所ノ特定法律ヲ擧テ以テ特定ノ法律アラサルモノニ限リ必ス帝國最高等ノ官廳所在地即「ベルリン」府ニ於テ訴訟ヲ爲サハルヘカラス實ニ其事例アルニ方リテハ「ベルリン」府ノ市府裁判所ニ於テ受理裁判セシムヘシト説明シタリシ而シテ「ベルリン」府ニ於テ訴訟ヲ爲スノ説明ニ付キテハ「議員頻ニ痛駁ヲ試ミタリシモ遂ニ議題トナラスシテ消滅シ本條ハ採用セラレタリ」

〔第三解「國庫」〕本條ノ全体ノ文字ニ依レハ單ニ國庫トアレトモ獨乙帝國ノ國庫ヲモ包含シアルハ固ヨリ疑フヘカラサル所ニシテ且本法説明書中ニ之ヲ明定シアルナリ加之之ヲ各聯邦ニ適用スヘキ趣義ナルコトモ亦敢テ疑テ容レズ即各獨立政府ハ財產權ノ保有者トシテ一個ノ無形人ヲ成ス所ニテ其財產上ノ一人體ナルモノヲ指シテ國庫ト稱スルナリ「アールンド」氏註釋書今ヤ本條ニ據テ政府ノ財產權ノミノ範圍ニ對スル普通裁判管轄ハ成立シタリト雖モ而カモ未タ以テアル政府ハ必ス財產權ニ關スル訴求ニ付テハ民事裁判所ニ屬スルノ結果ヲ爲スモノト概言スヘカラス反テ是ニ付キテハ本法第一條ノ第四解ニ敘述スル民事上訴訟ニ關スル趣義ニ准據セサルヘカラサルナリ乃「サククセン」國民法第五十二條ノ如キハ政府ハ民法上ノ關係ニ屬スル限リ一個人タル權利ヲ握有ス

ヘシト明言シアルナリ又本法實施法第四條ハ明カニ政府ノ財產權外ノ裁判上ノ義務ニ付キ規定シアルナリ然レモ該條ニ於テ直ニ政府ニ對スル國法上ノ訴訟ハ必ス裁判所ニ歸ス可シト云フニ非ス亦是レ各聯邦制度ノ如何ニ從テ異同アルナリ例ヘハ帝國直屬ノ「エールサス、ロットリンゲン」州ニ尙ホ現行スル法朗西國ノ制度ニ從ヘハ即公法上ノ紛爭ニシテ裁判所ノ裁判ニ屬スルモノ徃々之レアルナリ

〔第四解「官廳」〕各官廳ハ概シテ無形人ト見做スヘキニ非ス然レモ又見做スヘキ場合アリ〔本法第十九條第十二解參看〕之ヲ見做ス場合ニハ即本法第十九條ニ據リ其所在地ニ依テ普通裁判管轄ヲ定ムルナリ於是テ平即本條ハ無形人ニ屬セサル官廳ヲ云フノ義ニテ而シテ國庫ヲ代理スル權利ノ大小ニ付キテハ該聯邦ノ公法ニ從テ差異アルヘシ故ニ獨乙帝國ノ爲メニ制定セル法律ニ於テハ本條ニ擧クルヨリ以外ニ踰越シ得ヘカラサルナリ蓋各聯邦ニ於テハ其素ヨリ中央集權的〔上ノ第一解參看〕ノ當然ナル希望ト及ヒ訴訟ノ手續ヲシテ更ニ代報スル所ナク徒ニ難澁ナラシムヘカラサル所ノ責務ト相折中セテ以テ自ラ衡平ヲ得ント計畫スルハ各邦其實施上ニ於テ尤モ注意ヲ要スル所ナラン乎

〔上ノ第二解及ヒ第十九條第十二解參看〕實ハ國庫ニシテ特典ヲ享受スルモノハ皆限外ニ屬スレトモ〔第十二條第一解參看〕稍々小邦ノ政府ニ於テハ還々各區裁判所又ハ各地

方裁判所ヲシテ其各管轄區内ニ在ル國庫ニ係ル訴訟ヲ管轄セシムルノ規則ヲ設定シ得ヘキナリ

〔第五解特別裁判管轄〕本法第二十二條第二十五條乃至第二十七條第二十九條乃至第三十一條第三十三條第三十四條乃至第三十七條ノ特別裁判管轄ハ即國庫ニモ其効力ヲ及ホサシメテ以テ中央集權的ノ弊害ヲ稍々和ラケアル所ヲ看過スヘカラサルナリ殊ニ帝國々庫ニ對シテハ此特別管轄ヲ應用スルノ趣義ナルコトハ判然認可シアルナリ

第二十一條〔特別裁判管轄(第一)永久ノ寄留地ニ關スルノ條〕

其性質ニ依リ永ク滞在ヲ要スヘキ關係ヲ以テ一定ノ地ニ寄留スル者就中雇人、手職工、製造所勞役者、手代、學生、生徒徒弟トナリテ寄留スル者ニ係リ財產權上請求ニ關シ提起スル總テノ訴訟ニ付キテハ其寄留地ノ裁判所之カ管轄ヲ爲ス

此規則ハ專ラ徵兵義務履行ノ爲メ服役シ又ハ自立シテ住所ヲ有スルヲ能ハサル軍人ニ付キテモ亦之ヲ適用ス但寄留地ノ裁判所ニ代ルモノハ屯營所在地ノ裁判所ナリトス

〔制定ノ沿革〕原稿ノ行文ハ本條ニ異ナリシ而シテ國議院委員會ニ於テ議論アリシハ即

專ラ下ノ第四解ニ敘述スル點ニ付キテノミナリキ

〔第一解理由ノ説明〕本條及ヒ次ノ第二十二條ハ即漸ク移テ特別裁判管轄ヲ示定スル所ニシテ而シテ本條ハ亦李滯生國千八百三十二年七月四日ノ勅宣即本條ニ列載スル類ノ輩ニ對スル榮譽毀損又ハ養育料又ハ損害賠償ニ關スル訴訟併ニ凡ソ其就職上収利上契約上ニ因由スル爭訟ハ本人寄留地ノ對人上ノ裁判管轄ニ屬セサルヘカラサル法律ニ因據シタルナリ又李滯生國訴訟法草案第十六條「ニルンベルグ」市府訴訟手續草案第四條「ウエルテムベルグ」國訴訟法第四十一條ニ於テハ本條ニ列載スル輩其寄留地ニ於テ生スル契約、行爲及ヒ不行爲ニ因スル義務ニ關シ訴訟ヲ爲シ得ルノ意ヲ以テ此寄留地裁判管轄ヲ採用シアルナリ蓋此裁判管轄ヲ寄留地ニ於テ生スル義務ニ限定セシムルハ原則ニ背キ且不妥當ナル性質アルカ故ニ本法ニテハ之ヲ採用セス且是等ノ義務ニ關シ權利者ハ別ニ契約、財產權及ヒ許スヘカラサル行爲ニ付キテノ特別裁判管轄ノ規定アルニ因テ已ニ十分ノ保護ヲ享受シアルヲ以テ「ハンノフル」州ノ委員ハ概シテ此裁判管轄ヲ特ニ明定スルハ蛇足ナリト論シタリキ必竟此裁判管轄ハ本條ニ列舉スル輩ノ寄留中既ニ成立タル總テノ財產權ニ關スル請求ハ其成立チタル原地ノ何レヲ問ハス一切其寄留地ヲ以テ准住所ト做シ起訴シ得ルノ能力アリテコソ初テ本然ノ効能ヲ見ルヘケレ即

本條ハ右ノ趣義ニシテ彼ノ「ハンノフル」國訴訟法第七條第三項「バイルン」國全上第十  
八條「テラウン」シウアイヒ「國全上第二十二條」バデン「國全上第二十五條」オルデンボッ  
ク「國全上第十四款第四條」ト相符合スル所ナリ

專ラ徵兵義務履行ノ爲メ服役シ又ハ獨立ノ住所ヲ有シ得サル軍人ニ付テハ寄留地ノ裁  
判所ノ代リニ止テ得ヌ別所ニ在ル即屯營所在地ノ裁判所ニ出訴セラル、ナリ

〔第二解、永ク滞在ヲ要ス〕 爰ニ指ス所ト一般寄留地ノ普通裁判管轄トノ差異ニ付キテ  
ハ第十八條ノ第二解ヲ參照スヘシ本條ヲ以テ特別裁判管轄中ニ屬セシメタル由縁ヲ推  
究スルニ必竟財產權ニ關スル請求ニ局限シアル所ニ職由スルナリ然リ而シテ如何ナル  
場合ニシテ果シテ永ク滞在スル關係ト認定スヘキ乎ハ即各場合ニ就テ生スヘキ事實ノ  
問題ナリ且本條ニ「就中」ノ語ヲ明記シ以テ其類推ヲ示シ必スシモ限定スルニ非サル所  
ヲ看過スヘカラス而シテ滞在ニハ必ス一時ノモノト經久ノモノト自ラ其區域アルヘシ  
經久ノ滞在ニシテ住所ヲ轉シ且新ニ居所ヲ定ムルヲ恒トスル者ノ如キハ即本法第十三  
條ノ普通裁判管轄ヲ構成スルモノト云フヘシ例ヘハ俳優ノ如キハ一齣若クハ二三齣ノ演  
技ヲ爲スニ止マル者ハ一時ノ滞在者ナレモ若シ半年間傭ハレタル時ハ則經久ノ滞在ニ  
テ本條ノ義ニ適ス又傭期ヲ定メヌ且家族ヲ擧ケテ寄寓スル場合ニハ其地ハ即其俳優ノ

住所ナルナリ

〔第三解、雇人云々〕 本條ニ明記スル學生、生徒、徒弟ノ如キハ元來本法第十七條ニ屬スル  
ヲ例トスレモ其止ヲ得サル住所ヲ有スルヲ以テ復タ本條ニ依ルナリ例ヘハ第十七條第  
二解ニ於ケル商業ヲ營ム婦人ハ「ベルリン」府ニテハ啻ニ其營業上ニ付キテ本法第二十  
二條ニ准シ其店舖所在地ノ裁判所ニ屬シ復タ財產權ノ請求ニ付キテハ一切必ス本條ニ  
從フヘキナリ「ウィルンツ」氏其「バイルン」國訴訟法註釋ニ於テ凡ソ補助裁判管轄ニ付テハ  
上項ノ趣義ヲ是認シ且曰民法上獨立訴訟權アルハ必要ノ條件ナリト蓋妥當ト云フヘシ  
又本法ニ於テハ其第五十一條第二項ヲ以テ大ニ訴訟能力ノ範圍ヲ擴張セシメアルナリ  
又本條ニ學生ヲ擧ケタルハ別ニ趣義アル所ニシテ即他ノ特典ヲ以テ許ルサレアル裁判  
權ト共ニ彼ノ大學校ニ於テ保有シ來リタル裁判權ヲモ本法ノ爲メ廢停セシムルノ意ヲ  
示スナリ

製造所勞役者、手代、徒弟ニ付キテハ當時尙ホ帝國法律ノ第百八條ノ特別規則ヲ現存セ  
シメアルナリ〔本法第十二條第六解參照〕

〔第四解、財産權上請求〕 此語句ハ他ノ條項即裁判所編制法第二十三條第一本法第二十  
四條第四十條第五百八條第一項本法實施法第五條等ニ於テ用ヒアリト雖モ其義理ニ付

キテハ未タ詳細ニ解釋シアラス纔ニ本法四十條ニ對スル説明ニ「財産權ニ關スル訴訟ナラサルモノ例ヘハ婚姻事件、身分ニ關スル事件」ト記述シタルノミナリ

本條ノ第一讀會ニ於テ或委員ハ此「財産權上請求」ナル語ニハ備役上ノ關係、妊娠等ニ因テ起ル訴訟ハ含蓄セサルカ如キ觀アリテ而シテ其理義ノ汎キヲ表スルニ足ラサルヘシト論シタリ内閣代理員ハ之ニ答辨シテ素ト本條ノ目的タルヤ一切ノ財産權上ノ請求即備役上ノ關係、妊娠ニ因スル請求ノ類ヲモ自ラ含蓄セシメ之ニ反シ其他ノ請求例ヘハ身分ニ關スル事件ノ如キハ包含セシメサルニ在リト述ヘテ而シテ遂ニ本條ハ是認セラレタリシ

又第二讀會ニ於テ結婚外ノ妊娠ニ因ル養育ニ關スル訴訟ニ付キテ再ヒ議題ヲ起シタリシ著者ハ此「財産權上ノ請求」ナル語ヲ理義判然ナラサルヲ證センカ爲メ茲ニ會議筆記録ノ原文ヲ抄出シテ以テ讀者ニ示スヘシ即曰

第二十一條ニ付キ委員「ガウプ」氏演述シテ曰「シレクトル」職部「フォン、アムスベルグ」君ハ第二讀會ニ於テ此第三十二條ニハ身分ニ關スル事件ニ付キテ訴訟ヲ包含セシメスト説明セラレタリ果シテ此説明ニシテ維持セラル、者トセハ則此第二十一條ニ包含スル結婚外ノ妊娠ニ因スル訴訟ハ只ニ之ヲ准犯罪件トシテ處置スル邦國ニ限り財

産上ノ請求中ニ包含セシメ得ヘキモ之ヲ身分ニ關スル事件ト認ル邦國ニ於テハ之ヲ取除カサルヘカラスシテ而シテ之ニ因スル養育其他ノ事項ニ至テハ單ニ先ツ其父ナリト認定スル裁判ヲ與ヘタル后ノ結果トシテ認メラル、ナラン反テ本員ハ此事件ハ本條ニ包含セシメラル、ヲ當然ト思考ス必竟此場合ニ於テハ財産權上ノ利益ハ血親上ノ關係ヲ定ムルヨリモ寧ロ主要ナルヘク殊ニ又裁判所編制法ノ第十二條（現在ノ第二十三條第一）ノ主義ニ於テ然ルヘケレハナリ

「シレクトル」フォン、アムスベルグ氏曰結婚外ノ私通ニ因スル請求ハ即財産權上ノ資質タルハ敢テ疑フヘカラスト

委員「フォン、プットカムメル」氏曰本員ハ「アムスベルグ」氏ノ説明ヲ理解シテ結婚外ノ妊娠ニ因スル訴訟ハ若シ是ニ併セテ養育料其他ノ請求ヲ提出シタルハ則本條ニ屬スルモノニシテ而シテ其兒ハ某ノ結婚外ノ兒ナリト裁判ス可キナリト

「フォン、アムスベルグ」氏曰或ル者結婚外ノ妊娠ニ因テ養育ニ關スル訴訟ヲ提起スル場合ニハ必ず結婚外タル狀況ヲ證セサルヘカラス然レト此事實ノ狀況ヲ確定スルハ蓋目的トスル所ニアラスシテ單ニ請求ノ一因ナルヘシ而シテ其請求タルヤ設ヒ一因ニ過ギスル其財産權上ノ資質ハ爲メニ敢テ失フモノニ非サルヘシ

委員「ライヘンシュペルゲル」氏曰本案ハ即左ノ趣旨ノ如シ或者若シ養育ニ付キテ請求  
 スル時ニハ則本條ノ精神ニ含蓄シアルモノトナシテ而シテ之ヲ裁判スルニハ其實  
 ノ原由即結婚外タル事實ノ當否ニ付キ辨明シテ以テ裁決セサルヘカラス之ニ反シテ  
 直ニ此兒ノ父ハ某ナリト云フテ訴訟ヲ爲スルハ本條ニ包容スル所ニ非ス  
 「レギールツングスライト」名「ハグンス」氏曰孛漏生國ニ於テハ私生兒ノ結婚外ノ父ニ係  
 リ養育請求ノ訴訟ヲ爲スルハ併セテ父タルノ事實ヲ確定セシメテ訴訟ヲ得ルナリ然  
 レモ必竟此確定ハ單ニ財產權上ノ請求(養育又ハ遺産相續ノ請求)ヲ確カムルノ基礎  
 トナスニ過キス是故ニ本員ハ此訴訟ハ孛漏生國ノ法律ニ從ヒ財產權上ノ請求トシテ  
 必ス本條ニ屬スルモノト爲サンコトヲ希望ス

右ノ如ク議論紛然トシテ遂ニ聯邦法ヲ引證シ即本條ニ付キテハ各聯邦ニ從テ其物件上  
 管轄場所ノ管轄上告ノ許否ニ於テ異同アル趣旨ヲ主張スルニ至リタリ然レモ是等ハ  
 本條ノ目的中ニ在ルモノナラス只訴訟ノ原由ト及ヒ請求ノ目的トノ差別ヲ明カニスル  
 ナ要トス何トナレハ即請求ノ目的如何ニ因テノニ權力ノ消長ヲ爲ス所ナレハナリ(本  
 法第二百九十三條參照)如何ナル原由ニ因スルモ單ニ養育ニ付キテノニ請求スルモ  
 敢テ其血親上ノ事實ニハ及フヘカラス然レモ養育ノ義務アル者ハ之ト同時ニ其子女ノ

結婚外ノ父ナリト辨論スル場合ニハ必ス身分ニ關スル訴訟ヲ包容スト云ハサルヘカラ  
 ス己ニ孛漏生國ニ於テモ結婚外ノ血親上ニ由ルモノハ財產權上ニ係ルモノトハ全ク別  
 異ナル結果ヲ顯出ス例ヘハ結婚停止千八百七十五年二月六日頒布ノ身分及ヒ結婚ニ  
 關スル法律第三十三條(犯姦罪ノ處刑帝國刑法第七拾三條)ニ就テ見ルヘシ

今ヤ若シ是ニ付キテ一般ノ趣義トナス所ヲ推究シ且財產權トハ元來如何ノモノナル乎  
 ナ質サント欲スル者アラハ則財產ナル辭ノ理義ノ解釋如何ニ關シテ異同アリト答フル  
 ノミ而シテ「ツヤハリエ」氏法朗西民法論第三篇第五百七十三條「ウィンンドシヤイド」氏羅馬  
 法解疏第四十二條「アールンド」氏全上第二十二條ヲ相參照スルニ即財產ナル理義ニ付  
 キテ各大ニ其意見ヲ異ニスルヲ見ルヘシ

蓋本法ノ制定ニ關シテハ孛漏生國ノ立法部與リテ最モ力アル所ナレハ全國ニ行ハル、  
 義理ニ從フハ蓋適當ヲ得ヘシ

「コフ」氏孛漏生私法論第三版第九十九條ニ據レハ則權利ヲ區別シテ現存及ヒ所有即身  
 分ニ關スル權ト財產ニ關スル權トノニ別カテリ

又千八百三十三年十二月十四日頒布ノ上告ノ上訴及ヒ裁判取消シノ申立ニ付キテノ孛  
 漏生國法律ニ依レハ其第一條ニ親族ニ關スル件即身分ニ關スル件、結婚權、婚姻ニ關ス

ル宣誓及ヒ婚姻事件ニ付キテ規定シ明ニ之ニ區別シテ其二條ニ財產ニ關スル權ニ付キテ舉述セリ於是テ乎即凡ソ該法律ノ第一條ニ屬スヘカラサルモノハ財產權ニ屬スト明言シ得ヘキナリ

千八百三十九年六月七日ノ前項ノ法律實施法第一ニ於テ身分ニ關係スル事件トハ其本體ニ就テ之ヲ云ヘハ私法上ノ裁判ニ屬スヘキ事項ナリト説明シ又其第二ニハ法律第一條ニ掲ル事件ハ其關係ニ付キ判決文中ニ之ヲ認可シアル時ニ限リ上告ノ事由ト爲スヲ得ヘシト追加シアリ例ヘハ或ル人一定ノ等親タル事實ヲ證シテ以テ遺言ナキ遺産相續ノ訴訟ニ付キ其血親タル關係ノ認否ヲ辨明スルコトナクシテ棄却セラレタル時ハ則單ニ財產權ニ對スル判決ノミヲ與ヘラレタルモノトスルナリ○此趣義タルヤ即本條ノ前解ニ述ル所ノ本法第二百九十三條ニ因據スル解釋ノ理義ト相符合セリ  
而シテ彼ノ孛漏生國法律ハ固有ノ人權ニ付キテハ之ヲ明記シラス現ニ固有ノ人權例ヘハ人間ノ自由不羈ニ關スル訴訟事件ニ於テハ必ズヤ財產權ニ關スルノ訴訟ナリト云フヘカラサルヤ當然ナリ然レモ人間ノ不可侵權ニ對シ不法ノ行為ヲ被ムリタル時例ヘハ不法ナル監禁又ハ負傷ノ類ニ於テ報償ヲ求ムル場合ハ則損害賠償ノ訴求ニ變シタルモノニシテ即財產權ニ屬スヘシ

凡ソ單ニ財產權ノミニ因ラス或ル他ノ權利ヲ混同スル訴訟物件ナレハ之ヲ純平タル財產權上ノ請求ト云フヘカラス乃例ヘハ遺産相續ノ訴訟ノ如キ其訴求及ヒ判決ニ原告ハ遺囑者ノ正婚上ノ子女ナリト認定シ得ヘク是ニ由テ被告ハ其遺産ノ引渡シヲ爲スヘシト判決スト明示スル時ハ身分ニ關スル訴訟ヲ主眼トスルモノニテ即本條ノ裁判管轄ニ屬セス地方裁判所ノ權限ニ歸スルモノニテ上告ノ價額制限ヲ被ムラサルナリ千八百三十三年十二月十四日ノ孛漏生國法律第一條ニハ右ノ趣意ヲ適切ニ明示シテ即上告ノ上訴ハ訴狀中ニ明記スル訴訟物件單一ナル請求ナルカ又ハ是ニ因據スル他ノ請求ヲモ相混同シアル場合ニハ悉ク其上告價額ニ拘ハラス上告スルコトヲ得云々トアリ

〔第五解標準ト爲スヘキ期限及ヒ裁判管轄ノ消滅〕被告ノ滞在ハ必ズ其裁判所管區内ニ在テ訴訟ノ送達ヲ爲シ得ヘキ時間寄寓シアラサルヘカラス乃本法第十八條ノ第一解及ヒ第五解ノ趣義ハ亦本條ニモ適用スヘシ而シテ其滞在ノ原因ハ向後尙ホ永續スヘキモノナルト否トハ敢テ關係ナ有セサルナリ〔ウィルンツ氏ノ「國訴訟法註釋參看」〕  
抑、本條ニ付キテハ亦本法第二百三十五條第二ニ准據シテ其訴狀ニ明舉スル訴求ノ如何ニ關係アルナリ乃被告ガ反訴ヲ以テ財產權ニアラサル請求〔第四解參照〕ヲ提出スルト雖モ然ガモ其既ニ定マリタル裁判管轄ハ再ヒ變更スルコトナシ之ニ反シ原告カ更ニ訴

旨ヲ擴張シ財産權外ノ事項ヲ追訴シテ以テ豫審判決ヲ請フ時ハ則被告ハ本法第四百六十七條ニ照シ此追訴ニ對シテ管轄違ナリトハ抗告ヲ提出シ得ヘシ何トナレハ被告ハ特ニ財産權上ノ訴求ニ因テ本條ノ管轄裁判所ニ出廷シアルヲ以テナリ右ニ同一ナル理由ニ因テ本法第二十四條ノ裁判管轄ニ付キテモ亦之ヲ適用セサルヘカラス

〔第六解軍人〕 上ノ第一解第二項參照スヘシ又此字義ニ付キテハ本法第十四條第十五條ニ對スル第二解ヲ比照スヘシ本法第十四條第二項ニ於テハ本條ノ第二項ニ明示スル軍人ノ普通ノ住所ヲ屯營地ト特定シアリテ而シテ本條ハ右ノ法律上ノ住所ニ付キテ更ニ復タ其軍人ニシテ永ク滞在スル場合ニハ財産權ニ關スル訴訟ハ其屯在地ノ管轄裁判所ニ訴ヘラレ得ルモノト追加シタルナリ又此趣義ヲ明示シアルハ千八百七十四年五月二日頒布ノ帝國軍部法第三十九條第二項是ナリ即曰

軍人ニ付キテハ其屯營所在地ノ裁判所普通裁判管轄ヲ有ス但專ラ徵兵義務履行ノ爲メニ服役シ又ハ自立シテ住所ヲ有シ能ハサル者ニ付キ財産權ニ關スル請求ニ限り屯營所在地ノ裁判所管轄ヲ有ス

帝國軍部法ニ對スル説明中ニハ本法第十四條及ヒ第二十一條ト相通シテ行ハルヘキヲ明言セリ

然リト雖モ本法ト軍部法トニ少ク差異スル所アリ乃全法第三十九條第二項ノ明文ニ依レハ其滞在時間ノ長短ニハ更ニ關係セサルカ故ニ例ヘハ一ヶ年隨意兵ニシテ十四日間演習ノ爲メ召集セラレタル者モ此範圍内ニ在ルヘシ(本法第十四條第十五條ノ第三解(乙)(イ)參照)之ニ反シ本條第三項ハ右ノ隨意兵ニハ適用セサルナリ然レハ前項ニ舉ル説明ノ趣義ニ因リ軍部法第三十九條第二項ノ理義ハ永ク滞在スル者ニ限ルノ意ナリト解釋シテ敢テ妨ケサルヘシ必竟僅々タル滞在ニシテ普通裁判管轄ヲモ移轉セシムヘシトハ想定シ難ケレハナリ

徵兵服役ノ爲メ在營スルニ非サル軍人例ヘハ降虜兵ノ如キハ固ト自立シテ任意ニ住所ヲ有シ能ハサルヲ以テ乃特ニ明示シタルナリ

本法第十七條ニ於ケル止ムヲ得サルノ裁判管轄ニ屬セサルヘカラサル所ノ(第十七條第一參照)軍人ハ即上來ニ敘述スル如キ裁判管轄權ヲ有スヘキ能力ナキモノトス又議事筆記錄ニ依レハ幼年者及ヒ是ニ齊シキ者モ亦同シトナリ

本條第一解ノ理由説明ニ於テ屯營所在地ノ裁判所ハ必スシモ滞在地ノ裁判所ト同一ナリ難シト云ヘルハ蓋當然ナリ例ヘハ或ル聯隊ニ於テ他ノ裁判所管轄區ニ屬スル地方ニ設ケアル監獄ノ警衛ノ爲メ必要ノ兵ヲ差遣スルニ六ヶ月毎ニ一小隊中ヨリ交代スル場



合ノ如キ即其兵ハ監獄所在地ニ滞在シテ而カモ屯營所在地ノ裁判所ノ管轄ニ屬スルナ  
 リ  
 前項ニ擧グル例外ノ外ニ復タ軍人ハ本條ノ特別管轄ニ屬スヘキコトアリ例ヘハ丁年以上  
 ノ士官カ地方ニ屯營スル所ノ所屬聯隊ヨリ一ケ年間「ベルリン」府兵學校ニ差遣セラレ  
 、時ハ本條ノ特別裁判管轄ハ即其滞在在地ナル「ベルリン」府ノ裁判所ニ在リ  
 其資格ノ判然一定セサル疑似ノ輩ニ對スル財産權ニ非サル事件ニ付キテハ民法上定メ  
 アル住所ノ普通裁判管轄ニ屬スヘキモノトス

第二十二條〔特別裁判管轄(第二營業事務所ニ關スルノ條)〕

或人製造商業又ハ其他ノ營業ヲナス爲メ直接ニ取引ヲナス事務所ヲ  
 有スル時其人ニ係リ其事務所ノ取引ニ關係ヲ有スル一切ノ訴訟ハ其  
 事務所々在地ノ裁判所ニ之ヲ提起スルコトヲ得  
 此事務所ノ裁判管轄ハ住家及ヒ農用建造物ノ設ケアル地所ヲ其所有  
 者入額所得者又ハ借地人トシテ耕作スル者ニ對スル訴訟ニ付キテモ  
 亦効アルヘシ但其地所ノ耕作ニ關スル權利義務上關係ノ訴訟ニ限ル  
 〔第一解、理由ノ説明〕 抑、本條ハ「ニュルンベルグ」府草案第五條「バイルン」國訴訟法第二十

四條乃至第二十六條「ウールテムベルグ」國全上第四十條「ハデン」國全上第三十二條「普  
 生國全上第十七條第十八條「ハンノフル」國全上第十六條北部獨乙聯邦全上第五十四條  
 ニ同ク營業事務所ノ特別裁判管轄ヲ定メ即羅馬法ノ住所ノ裁判管轄ニ模擬シタルナ  
 リ乃營業事務所ニ於テ爲ス取引ニ關係ヲ有スル訴訟ヲ受クヘキ事務所ハ住所ト同シモ  
 ノト認メ又地所ノ耕作上ニ關スル權利義務上ノ訴訟ヲ受クル地所ニ於テモ亦同シ「ニ  
 ルンベルグ」府獨乙各邦間ノ訴訟手續編纂委員ノ報告參照)然リ而シテ營業事務所ノ裁  
 判管轄ニシテ實際如此ク範圍ヲ擴張セシムルヲ必要トナス處ハ即新定ノ各獨乙訴訟法  
 併ニ其草案カ一般ニ之ヲ是認スルヲ見テ推知スヘシ

〔第二解、制定ノ沿革〕 抑、特別裁判管轄ニ付キ特ニ規定スルヲ非トシテ之ヲ修正セント  
 ノ動議起リ遂ニ廢棄セラレシハ元ト本條ニ付キテノ議事ニ始マレリ是ニ付キテハ本書  
 凡例中ニ縷述シアルヲ以テ更ニ爰ニ贅セズ

〔第三解、或人〕 本條、或人ト明記スルハ即必スシモ其營業主人ニ關セサルノ義ヲ示シタ  
 ルモノニテ中央銀行ノ如キハ其支店限り取引シタル事項ニ付キテハ支店所在地ニ於テ  
 起訴シ得ルナリ(千八百七十五年銀行條例第十二條參照)又國庫ニ對スルモ其本條ノ趣  
 義ニ適應スルモノニ限り亦其事務所々在地ニ於テス而シテ瀕車鐵道ノ運漕業ハ固トヨ

リ一ノ營業ニシテ且各々主タル停車場ニ於テハ必ス數件ノ取引ヲ專行スルナリ是故ニ其停車場ノ權限内ニ係ルモノハ其官設ナルト私立ナルトチ問ハス主タル停車場所在地ノ裁判所ニ出訴セラレ得ルナリ〔獨乙帝國高等商事裁判院判決録第十五卷參照〕然レモ鐵道ノ資産全部ヲ無形人〔本法第二十二條第三解參照〕ト做ス所ニ因レハ則停車場ニ係リ起訴スヘカラスシテ必ス假令其住所外ノモノニ係ルモ其瀛車鐵道會社資産全体ニ對シ起訴セサルヘカラス

本條第一解ノ趣義ナルカ故ニ商法ノ凡ソ單獨自營ノ商人ハ其事務所ノ管轄裁判所ニ屬セサルヘカラストアル明文ハ効力ヲ保有スルナリ乃其商人數多ノ店舗ヲ設ケ置クモ互ニ本支店ノ關係ヲ爲サシメサル時ハ各店舗ニ付キテ起ル訴訟モ亦其事務所ノ管轄裁判所ニ屬スルナリ

〔第四解 本條効力ノ程度〕素ト本條ハ凡ソ營業事務所ニ於テ直ニ舉行スル事業上ニ關シ起ル訴訟ヲ管轄スルノ義ナレハ其主人ニ對シテハ更ニ該取引契約ノ範圍〔本法第二十九條參照〕ヲ超過シアル事項ニ付キテノ裁判管轄アルハ論ナシ只本條ハ其事務所ノ自立スルヲ示シタルナリ蓋千八百七十一年六月六日頒布ノ帝國責務條例ニ因スル訴訟中ニハ准犯則ニ關スル〔本法第二十二條併ニ其解釋參照〕訴求ヲ包容セシメサルナリ

然レモ若シ工業ヲ營ムニ方テ其場所ニ於テ人ヲ誤殺シ又ハ負傷セシメタルノ事故ヲ發生シタルモハ遂ニ准犯則ニ係ル訴權ヲ實用スルニ至ル從來「サックセン」國ニ於テハ凡ヘテ彼ノ責務條例ニ依リ瀛車鐵道會社資産ニ係リ爲ス訴訟ハ「ドレステン」府ノ裁判所ニ起訴セサルヘカラスリシト雖モ向後例ヘハ主タル停車場ノ廠場ニ於テ又ハ其營業中誤殺傷ノ事變アル場合ニ付キテハ自ラ一變スルニ至ルヘシ

〔第五解 製造場、商業事務所、營業場〕即單ニ商業事務所ノミニ限ラス凡ソ事業ヲ營ム場所ノ本支ノ別ナク一切ノ營業事務所ヲ指スノ義明カナリ又若シ此事務所トハ一商人ノ兼業分店ノ如キモノヲ包括スルト爲セハ則彼ノ有名ナル商法上ノ問題モ今ヤ方ニ氷解セリト云フヘシ〔「プッヘル」氏商法釋義第一卷參照〕

「バイル」國訴訟法第二十五條ニハ商業代理人ナル者ヲ判然明記セリ以テ公衆ノ爲メ保險會社ニ對スル訴訟ヲ容易ナラシメタルナリ而シテ本條ニ依レハ即各商業代理人ナル者ハ事務所長ノ資質ヲ有スル乎又此代理人ナル者ハ更ニ代理權ヲ有セサル所ノ商業媒介人タルニ過キサル類往々之レアルカ故ニ代理人ニ係リ敢テ訴求スヘカラスルモノハ果シテ何事ナル乎ヲ詳ニスルヲ要スルナリ〔帝國高等商事裁判院判決録第四卷及ヒ第九卷參看〕

之ニ反シ商業總代理人ト稱スル者ハ多クハ純粹ノ代理人ニシテ取引ヲ專行スルノ權アルモノナレハ自ラ前項ノ者ニ異ナリ(帝國高等商事裁判院判決錄第十五卷參看)是ニ付キテハ又本法第十三條ノ第一解及ヒ第十三條參照スヘシ

〔第六解、地所ノ耕作〕本條第二項ニ舉ル所ハ其地所耕作ノ爲メ居宅又ハ建造物ヲ設ケ

アル本然ノ經濟上ノ地所ナルコトハ顯然ナリ而シテ或人庭園ヲ具備スル別莊ヲ有スル如キハ即本條ニ適セサルナリ(「ウィルンツ」氏「バイルン」國訴訟法註釋ノ第二十條ニ對スル註解參看)此別莊ニ對シテハ本法第十三條及ヒ第二十一條ノ裁判管轄ニ從フヘキ者ナリ

〔バイルン〕國訴訟法第二十六條ノ明文ニハ「耕作シ」ナル字句ノ下ニ「若クハ耕作セシムル」ノ句アリ今本條ニ適シ此字句之レナキヲ以テ如此キ場合ニマテ及ホサルモノト誤

解スヘカラス必竟他人ヲ備テ耕作セシムル以上ハ法律上本人自ラ耕作スルト同一ニ視做スハ當然ナルノミナラス尙ホ法律ノ精神ニ於テハ特更ニ如此キ場合ヲ主眼トシテ定

メアルナリ何トナレハ若シ本人自ラ其地ニ在テ耕作スル場合ニ對シテハ却テ本法第十三條併ニ第二十一條ノ裁判管轄ニ屬スヘキヲ以テナリ然レモ此代人耕作ヲ本然ノ耕作ト明言スルハ或ハ相當ラサルヘシ(本法第三十一條第四解參照)

〔第七解、裁判管轄ノ消滅〕「ウィルンツ」氏「バイルン」國訴訟法註釋ニ於テハ特リ「バイルン」國立法者ノ認定スル所ニ因テ裁判管轄ノ消滅スルハ即其耕作ヲ廢止スルノ期ニアリト説明シタリ然ルニ本條ニ付キテモ亦是ニ同シト云フモ敢テ不可ナシ乃理由説明ニ

〔本法第十二條第一解及ヒ本條第一解參照〕ニ依レハ其現實ノ住所ト同一般ニ只其地所ノ現在スル限リ裁判管轄ヲ有スル所ノ住所ト同類ノモノヲ指ス義ナルコトハ明瞭ナリ(本法第十二條ノ第四解參照)然リ而シテ其耕作ニ係ル地所ニ對シ別ニ契約上ノ關係

ニ付キ起訴スル場合ニハ則本法第二十九條併ニ第三十一條ニ准據シテ其固有本然ノ特別管轄ニ依ルノミ敢テ之カ爲メ特更ニ明示スルヲ要セス

第二十三條 (特別裁判管轄) (第三) 公會及ヒ結社ノ會員ニ關スルノ

町村、公會、會社、組合又ハ其他協會ノ普通裁判管轄ヲ有スル裁判所ハ

是等ヨリ會員タル者ノ其資格ニ對シ又ハ會員中ニ於テ其資格ヲ以テ

提起スル訴訟ニ付キ之ヲ管轄ス

〔第一解、理由ノ説明〕本條ハ會社上又ハ組合上ノ關係ニ因テ起ル訴訟ニ付キ本法第十

九條ノ規則ト相聯貫シテ以テ特別ノ裁判管轄ヲ定ムル所トス乃其所在地ノ裁判所ノ普

通裁判管轄ニ屬スル町村、公會、會社、組合其他協會カ其會員タル資格ヲ有スル者ニ對シ

テ起訴スルキハ自己ノ管轄裁判所ニ提起シ得ルナリ〔法朗西國訴訟法第五十九條〕  
 ルン〔國全上第十六條〕  
 バデン〔國全上第二十條〕  
 北部獨乙聯邦全草案第五十五條參照〕且一  
 ニハ各邦ノ律意ニ據リ一ニハ現實町村其他カ裁判管轄ニ屬シアル所ニ本ツキ以テ其會  
 員等ノ間ニ於テ會員タルノ權利義務上ニ因由スル訴訟ヲモ亦管轄セシムルコトニ定メタ  
 リ

〔第二解制定ノ沿革〕本條ニ於ケル會員間ニ起ル互ノ訴訟ヲモ管轄セシメテ其範圍ヲ  
 擴張セシムル所ハ李漏生國訴訟法草案ニ載セアラズ而シテ本法第二十二條ノ第二解ニ  
 述フル所ノ外ハ本條ヲ議決スルニ方テ別ニ異論アラサリシ

〔第三解裁判所〕町村、公會、會社、組合其他協會ニ付キ普通裁判管轄ヲ有スル所ノ裁判所  
 併ニ町村、公會、其他列載スル名稱ノ趣義ニ付キテハ本法第十九條併ニ其解釋ニ詳カナ  
 リ

而シテ尙ホ本條ニ付キ必要トスヘキハ即審理ノ爲メ喚出狀送達ノ時期ニ方テ〔本法第  
 二百三十條及ヒ第二百三十五條第二參照〕町村、公會、會社其他ニ對スル普通裁判管轄ノ  
 依然其裁判所ニ屬シアラサルヘカラストスル所ニ在リ尙ホ本法第十二條第四解ヲ參考  
 スヘシ

本法第十九條ノ第五解ニ於テ既ニ商社及ヒ登記上組合ハ其負債返還ニ至ルマテ依然裁  
 判管轄ヲ保有スルコトヲ敘述シタリ而シテ本法實施法第十五條第二ハ還タ各聯邦法ニ於  
 テ會社組合又ハ協會ノ裁判管轄ハ其解散ノ后マテ繼續スヘキモノト規定スル所ヲ害セ  
 サルナリ

蓋聯邦法ニ於テ別ニ規定シアラサル限りハ商社又ハ登記上組合ニシテ其負債返還ノ後  
 漸ク裁判管轄ノ消滅スルコトヲ明示セル如ク一般ニ帝國法律又ハ聯邦法律ノ更ニ干涉セ  
 サル町村其他ニ付キテモ負債返還後ニ於テ消滅スルモノト爲サ、ルヘカラス  
 而シテ須ク商法及ヒ帝國組合條例ノ規定ニ就テ一般ノ原則ヲ示ス用語ヲ理會セサルヘ  
 カラス即負債返還ト云ヘハ舊時ノ顯狀ノ尙ホ繼續スル所ニシテ而カモ實際多ク爭訟ノ  
 主因ヲ爲スモノナリ是故ニ本法第十九條及ヒ本條ノ規定外ニ歸スヘキモノナラサルハ  
 必然ナリ〔ハイルン〕  
 國〔バデン〕  
 國ニ於テモ亦然リ

又本法實施法第十五條第二ニ依テ立法者ハ會社其他ノ解散ト共ニ其裁判管轄ノ消滅ス  
 ル規則ニ從ハサルヘカラスト爲スノ意ナリト速斷スヘカラス殊ニ右ノ條文ノ趣義ハ全  
 ク別段ノ理由ニ基キタルモノナルノミナラス其文勢ニ從フモ尙帝國法律ノ干與シテ規  
 定シアラサル場合ニ限り該聯邦法ニ據ルヘキ趣旨ナルヲ見ルニ足ルヘキナリ

右ノ實施法第十五條第二ニ對スル理由説明ニ付キテハ即宜ク全法説明書全條ニ對スル第一解ヲ參考スヘシ然ルコ「シーモンハール」氏ハ其獨乙訴訟法註釋ニ於テ既ニ報告書第四號ニテ取消シアル舊說ヲ採テ敘述シアルナリ

〔第四解、會員タルノ資格〕本條會員ノ資格ヲ以テトアルハ即其社長其他ノ財産ヲ管理スル役員ニ係ル訴訟ノ場合ニハ通用セス此場合ニハ本法第三十一條ニ從フヘキナリ  
〔第三十一條第三解參照〕凡ソ町村其他ノ會員タル資格ハ即其組織又ハ申合セ規約ニ因テ定マル所ナリ乃交互保險會社ノ如キハ其保險者ハ即被保險人ニシテ又會員ヲ兼スルモノナリ(帝國高等商事裁判院判決錄第八卷參照)故ニ是ノ資格ヲ以テ會社ヨリ起訴スルキハ會社自屬ノ管轄裁判所ニ爲スチ得且會員間互ニ該裁判所ニ起訴スルチ得ヘシ然レモ保險證券上ニ明約シアル一定ノ利益金ノ支拂ニ關スル訴訟ニ付キテハ其交互保險會社ノ權利ハ右ノ如クナルコチ得サルナリ如何トナレハ此場合ニ於テハ保險者ハ其交互保險會社ニ對スル猶ホ他ノ普通保險會社ニ對スルカ如ク只ニ約束ノ對手人タルニ過キサルチ以テナリ之ニ反シ一定利益配當ヲ明約シアラサル場合即年々其損失ヲ分擔スルノミナレハ則是レ會員カ其會社ニ對スルノ供給ナルナリ又只アル會社ノ損失ヲ補充スルカ爲メ分擔スル所謂ノ利益配當金ノ追補ト稱スルモノニ付テモ亦右ノ供給ト同一

ナルヘシ

又株式會社ニ付キテハ其記名股分券ナルト現有股分ナルトニ拘ハラス現ニ之ヲ所持スル者ハ即社員タルナリ而シテ其股分ニ對シテ契約上確定ノ資金ヲ拂込ムヘキ義務ハ其結社規約ニ因テ起レル所ナルヘシ是ニ於テ本條ハ會社ノ爲メ更ニ便宜ナル規定ヲ新定スル所ニシテ即會社ハ商法第二百二十條第二百二十一條ノ場合ニ於テハ輒チ其拂込ニ怠慢ノ社員ニ對シ自己ノ管轄裁判所ニ起訴シ得ルナリ

町村其他カ其會員ニ對スルノ訴訟併ニ會員間相互ニ爲ス訴訟ニ付キテノ權利義務ニ關シハ猶ホ會社ト社員間ニ起ル訴訟ニシテ會社規約ノ訴訟(例ヘハ社員除名ニ關スル件)ニ於ケル如ク同一ニ審判セラレサルヘカラス此趣義タルヤ蓋本條ノ理由説明(上ノ第一解)ニ示ス如ク或ハ直接ニハ町村及ヒ組合ニ相當セサル所ナルモ會社ノ會員タルノ關係ニ因スル訴訟ニ付キテ説明スルキハ則明カナリ

第二十四條 (特別裁判管轄) 第四(財産ニ關スルノ條)

獨乙國內ニ住所ヲ有セサル者ニ對スル財産權ニ關スル訴訟ニ付キテハ其財産又ハ請求物件ノ存在地ノ裁判所之ヲ管轄ス又請求ニ付キテハ義務者ノ住所地ヲ以テ財産所在地ト視做ス若シ請求ニ付キ物件保

證ノ實ヲ負ヒアル時ハ其物件所在ノ地ナリトス

〔第一解理由ノ説明〕抑、本條ノ趣義ハ之ヲ本法草案第十三條及ヒ第十八條ノ因據セル新原理ニ比スレハ自ラ別段ナル意義ヲ保有スルナリ乃本條ニ依レハ財産權上ノ請求ニシテ獨乙國ニ一定ノ住所ヲ有セサル者ニ對スル訴訟ハ其人ノ財産所在地又ハ請求スル物品所在地ノ裁判所ニ於テ管轄スト定メアリテ即此規則タルヤ外國ニ住所ヲ定ムル義務者又ハ內國ニ住所ヲ定ムルヲ漫ニ漂寓スル義務者ニ對シテ權利者ヲ保護スルニ在リ而シテ孛漏生國訴訟法ヨリ採用シタル者ナリ〔裁判通則第一卷第二篇第二十五條及ヒ其第三十四條附錄參照〕又「ブラウンシュウアイヒ國訴訟法第二十六條「オルデンボッルグ國全上第十五條「バイルン國全上第十九條「ウエルテムベルグ國全上第三十四條ニ於テ住所及ヒ寄留地ヲ有セサル義務者ニ對シ規定スル所ハ皆本條ノ趣義ト異ナルナシ然リ而シテ本條ノ趣義タルヤ乃獨逸普通法併ニ多クノ晚今ノ立法中ニハ如此キ規定アルヲ見サルナリ且此立法ノ精神ニ依レハ即數所ニ散在スル財産ハ從テ數多ノ裁判管轄ヲ成シ偶ニ遺忘ニ屬セル些細ナル財産マテモ亦別段ノ裁判管轄ヲ有スルニ至ルナキ乎トノ疑團アルヘシ然レモ他ノ一方ヨリ之ヲ觀ルハ此裁判管轄ヲ特定シタルカ爲メ假○差押假差留ニ關スル裁判管轄ノ必要ヲ省除シタルヲ以テ裁判管轄總體上ニ於テハ其手

續チシテ簡約ナラシメタルナリ元來本條ノ趣義ハ凡ソ內國ニ現在スル財産ヲ強制執行ノ物件ト爲ステ以テ主眼トスルニ在レハ即本條ニ財産權ニ關スル請求ニ制限シタルハ蓋妥當ト云フヘシ而シテ物件ニ對スル訴訟ニ付キテモ亦財産ハ本條ノ裁判管轄ニ屬セシメ得ル所ナレハ本條ノ不動産ニ制限シアル規則ハ復タアル場合ニ於テハ動産ニ付キテモ之ヲ適用シ得ヘシ又本條ノ第二段ハ先キニ孛漏生國ニ於テ實務上起レル疑義ヲ驅除シ得ル所ナルヘシ全國高等裁判院ハ千八百四十八年十二月三日ヲ以テ當時大ニ實際ニ適セサル不便利ノ判決ナリトノ駁議アリシ判決ヲ宣告シ即本條ニ反對スルノ趣義ヲ維持シタリ

〔第二解制定ノ沿革〕元來北部獨乙聯邦訴訟法草案第六十七條ニ於テハ依然假差押假差留ニ關スル裁判管轄ヲ維持シ即假差押假差留ノ被告カ內國ニ住所ヲ有セサル者ノ爲メニシ且財産上ノ裁判管轄ハ只ニ內國ニ住所ヲ有セサル者ニ對スルニ限ルモノトナスナリ又孛漏生國草案第二十三條ニ於テハ假差押假差留ノ裁判管轄ヲ廢止シタリト雖モ而カモ財産上ノ裁判管轄ハ獨乙國ニ住所ヲ有セサル者ニ對スルニ限り存在セシメタリ他ノ草案モ亦此孛漏生國草案ニ從カヒアルナリ  
國議院委員會ノ本條ノ第一讀會ニ於テ一委員孛漏生國裁判通則附錄第三十四條ノ趣

義ヲ取り本條ハ只ニアル裁判所管區内ニ現在シテ方ニ其管轄ニ屬スル財産ニ限り執  
行シ得ルモノトノ意義ニ局限セントノ動議ヲ提出シ又他ノ一委員ハ復タ假差押假差留  
ノ裁判管轄ヲ回復セント主張シタリ然レ此兩動議共ニ棄却セラレ第二讀會ニ於テ本  
條ノ儘異論ナク採用セラレケリ殊ニ右ノ第一ノ動議ニ對シテハ即若シ此動議ニ從フキ  
ハ内國人ハ不利ヲ被ムリ且訴訟ヲ澁滞セシメテ而シテ往々相矛盾スルノ判決ヲ見ルニ  
至ラントノ義ヲ以テ駁論シタリ

〔第三解、獨乙國內ニ住所ナキ被告人ニ付キテハ其内外國人タルノ別ヲ問ハズ〕 本法第  
十三條ノ第五解第七解併ニ第十八條ノ第一解第三解ニ參照スルキハ則被告人ノ獨乙國人  
タルト外國人タルトハ敢テ問ハズ只其被告ハ獨乙國內ニ住所ヲ有セスト云フノ點ヲ主  
眼ト爲スノミ然リ而シテ本條ノ理由説明〔上ノ第一解〕ニ於テ既ニ述ル如ク其被告タル  
獨乙人ハ必スヤ字漏生國裁判通則第一篇第二章第二十二條ニ掲クル法律上一種ノ義理  
ヲ有スル所ノ漂寓人タルヲ得スト爲サズ如何トナレハ如此キ人ト雖モ外國ニ住所ヲ有  
スレハ則當ニ本條ニ屬スベキモノナルヲ以テナリ況ヤ無住所ノ内國人ハ未タ必スシモ  
悉ク漂寓人タラサルヘキニ於テオヤ殊ニハ復タ漂寓人モ亦能ク住所ヲ有シ得ヘキハ當  
然ナリ是理由ニ因テ本條ニ對シテハ漂寓人タルノ關係ヲ視ルヲ要セサルナリ

外國ノ國庫ハ内國ニ住所ナキ被告人ト視做スヲ得ヘシ而シテ被告ノ未丁年等ニ付キテ  
ハ敢テ論ズルヲ要セス  
而シテ被告ノ住所ヲ有セサルコトニ付キテハ必ス原告ニ於テ證セサルヘカラス之ニ反  
シ被告ハ内國ニ住所ヲ有スルノ證ヲ爲スヘキ責アルヲナシ〔帝國高等商事裁判院判決  
錄第十三卷參照〕

〔第四解、財産權ニ關スル訴訟〕 抑、本條ノ裁判管轄ハ單ニ財産權ニ關スル請求ノ爲メニ  
ノミ特定シタルナリ尙ホ本法第二十一條第四解第五解ヲ參考スヘシ

蓋財産權ニ關スル請求ニシテ如何ノ理由ニ基ツケル乎即内國ニ於テ發生セシト外國ニ  
起因セルト自己ノ權利ニ因スルト他人ノ權利ヲ讓受ケタルトノ別ハ敢テ問フヲ要セサ  
ルハ猶ホ原告ノ内外國人タルヲ問ハサルカ如ク一般ナリ且外國人タル原告ハ外國人又  
ハ内國人ニ係リ其財産ノ管轄裁判所ニ出訴シ得ルナリ是等ニ付キテハ字漏生國法律ノ  
適々相同シカラサル所往々之レアリ〔帝國高等商事裁判院判決錄第十五卷參照〕

〔第五解、被告ノ財産〕 被告ノ財産ハ本條ノ裁判管轄ノ第二段ニ於ケル要件ナリ乃被告  
ハ必スシモ現ニ其財産所在地ニ居ルヲ要トセス而シテ被告ハ若シ所謂ノ財産中ニ算入  
スヘカラサル日常必需ノ衣服ノ外他ニ財産ヲ所持セサル時ニハ則以テ財産所在地ナリ

ト云フニ足ラサルナリ尙ホ本法第七百十五條第一第六ヲ參照スヘシ  
 然リト雖モ他ノ某財産ニシテ執行ヲ免カルヘキ物品ト雖モ場合ニ依リ財産ニ關スル裁  
 判管轄ヲ定メシムルコトアリ何トナレハ財産ノ裁判管轄ハ其執行ノ爲メ他ノ裁判管轄區  
 ニ移送シ得ルカ故ナリ即財産ノ資質及ヒ大小ニハ更ニ關係ヲ有セス(上ノ第一解參照)  
 [第六解、請求及ヒ保證] 請求ナル語ニ付キテ之ヲ觀レハ即被告カ請求權ヲ現有スル時  
 復タ財産ノ裁判管轄ニ依リ得ルハ固トヨリ論ヲ俟タス而シテ此請求ナル語ノ理義ハ當  
 時尙ホ未タ一定ニ歸シアラサリシナリ乃「サツクセン」國民法第六百六十二條「ウイソド  
 ヤイト」氏羅馬法註解第二百五十條以下「アルソド」氏全上第二十二條「フェルステル」氏字  
 漏生私法論第三版第一篇ヲ參考スヘシ然レモ之ヲ要スルニ請求ハ即其物件ノ金錢ナル  
 モ若クハ價額ナルモ其收入ニ付キテノ返還ヲ請求スル物件ヲモ包含シアリテ反テ純然タ  
 ル身分ニ關スル訴求又ハ榮譽ニ關スル訴件ノ屬シアラサル者ト斷定シテ敢テ妨ケナキ  
 カ如シ又若シ請求ニシテ偶々住所ノ管轄裁判所管區内ニ現在スル一定ノ物件ニ對ス  
 ルモノナル時ハ則復タ訴訟物件ノ場合ニ該當スト云フマテニシテ必スモ如此ク相恰  
 當スルヲ要ト爲スニアラス是故ニ原告ハ素ト義務者ノ住所地ニ依ルモ又ハ物件ノ所在  
 地ニ依ルモ其自ラ選擇スルニ任カセラレアル所ナリ

(第七解、財産權ニ關スル裁判管轄ノ消滅及ヒ其程度) 本法第十三條第四解、第十八條第  
 五解、第二十一條第五解及ヒ第二十二條第五解ニ於テ縷陳スル所ニ齊シク本條ノ裁判  
 管轄ハ亦喚出狀送達ノ時尙ホ財産若クハ訴訟物件カ其受訴裁判所管轄區内ニ存在スル  
 場合ニ限り成立ツヘキモノニシテ而シテ其后ニ於テ財産等ヲ他ニ移轉セシムルモ更ニ  
 既定ノ管轄上ニ影響ヲ及ホスモノニ非ラス(例ヘハ原告ハ自ラ其訴訟中抵當權ヲ他ニ  
 賣渡ス如キコトアル也敢テ關係セス即帝國高等商事裁判院判決録第十六卷參看)故ニ起  
 訴ト同時ニ假差押假差留ノ處分ヲ爲スヲ要セサルナリ之ニ反シ曾テ財産ヲ保有シタリ  
 ト云フヲ以テ裁判管轄ヲ定ムルニ足ラス何トナレハ若シ喚出狀送達ノ以前已ニ其保有  
 ヲ停止シタル時ハ則其裁判管轄ハ成立タサレハナリ必竟場合ニ依テハ喚出狀送達前從  
 來ノ狀況ヲ一變セルコト例ヘハ被告カ保有セシ請求權ヲ他ニ讓與シ又ハ其權ノ消滅セル  
 等ニ因テ變セシ事實ヲ被告カ陳辨スルコトアルヘキナリ  
 本條第二解ニ於テ舉述スル如ク字漏生國法律ニ因據セル趣義ノ動議遂ニ排斥セラレタ  
 ルト且此法律ニハ更ニ局限ヲ立ツルノ意ナラサルトコト因リテ以テ財産ニ關スル裁判管  
 轄ニ於テ爲シタル判決ハ必ス執行ニ付キテノ通則ニ從屬セサルヘカラスシテ即財産中  
 特質ノモノト局限シアラサルハ論ヲ竣タズ



又義務者トハ其誰タルヲ問ハサルナリ即假令原告カ自ラ義務者トナル場合ナリモ亦妨  
ケス元來請求ノ現ニ存在セサルヘカラスハ當然ナレハ若シ被告ヨリ原告カ理由ナシ  
ト攻駁スル所ノ請求ヲ提出スル時ノ如キハ則其請求ニ因テ財産ニ關スル裁判管轄ヲ成  
定セシメ得ヘカラス(帝國高等商事裁判院判決錄第十六卷參照)

本條ニ明示スルノ物件、保證ノ責ヲ負フト云フ所ニハ保證人ハ包含セス然レ被告ヨリ  
保證人ニ對スル請求アル時ハ保證人ノ住所ヲ以テ財産上ノ裁判管轄ヲ定ムルモノナ  
リ  
物品ヲ以テ保證スルハ即抵當權及ヒ押収權是ナリ而シテ商人ノ押収權ハ負債者ノ物品  
コノミ限ルコトヲ記憶セサルヘカラス獨乙普通法ニ依レハ物品買收ノ委任ヲ受クル者本  
人ノ爲メ物品ヲ買得シ自己ノ名義ヲ以テ之ヲ保有スルト雖モ是カ爲メ財産ニ關スル裁  
判管轄ヲ定ムルヲ得サルヘシ(帝國高等商事裁判院判決錄第十六卷參照)又「サックセン」  
國法律ニ依レハ賣渡人己ニ代金ヲ受領シ未タ其物品ヲ引渡サ、ル時適、他ノ請求アリ  
トテ其物品ヲ押収留置スルノ權ナシトスルニ付キテハ又帝國高等商事裁判院判決錄第  
十九卷ヲ參照ス可シ然リ而シテ是場合又ハ是類ノ場合ニ於テ依託本人又ハ買主ヨリ買  
取物品引渡ヲ請求スル時ハ則賣渡人若クハ其委任ヲ受ケアル者ノ住所地ヲ以テ財産ニ

關スル裁判管轄ト定ムルキナリ

〔第八解、商法上ニ係ル例外〕 商法第二百十條第三百十五條ハ未タ廢止セラレサルヲ以  
テ(本法實施法第十三條參看)商人ニテ抵當權又ハ押収權ヲ有スル債主ハ依然尙ホ能ク  
自己ノ管轄商事裁判所即區裁判所(本法實施法第十三條商法第三條參照)ニ於テ抵當物  
品又ハ押収物品ノ公賣處分ヲ爲シ得殊ニ其債主自ラ反對ノ負債者ナラサル時併ニ其物  
品ノ他方ニ貯藏シアル時即本條ニ准據シ財産ニ關スル裁判管轄ノ只ニ其物品所在地ニ  
限ル時モ尙ホ且前記ノ裁判所ニ於テ公賣シ得ルナリ

〔第九解、假差押假差留ノ處分ヲ要セス〕 本法ニ於テハ別ニ假差押假差留處分ヲ要セサ  
ルコトニ付キテ明言シアルス而シテ本條ノ第一解第二解ニ述フル如ク之ヲ玆ニ明舉セサ  
ルモ敢テ妨ケサルナリ必竟内國ニ住所ヲ有セサル内國人又ハ外國人ニ對シテハ本條ノ  
裁判管轄ノ規則ヲ以テ足ルヘシ又内國ニ住所ヲ有スルモノニ付キテハ即假差押假差留  
ヲ請求スル原告カ本案訴訟ヲ本條ニ明定スルノ外別ニ特別裁判管轄ヲ有セサル限り  
ハ此裁判所ニ提起スルモノト爲ス所ハ蓋敢テ煩雜ト云フヘカラス尙ホ本法第六百八條  
ヲ參照スヘシ

第二十五條 (特別裁判管轄(第五)不動産物件ニ關スルノ條)

所有物件ノ負擔又ハ其負擔ノ解除ニ付キテノ訴訟又ハ地所ノ分界分割又ハ其保有ニ關スル訴訟ハ不動物件ニ關スル場合ニ限り其物件所在地ノ裁判所管轄權ヲ有ス  
地役又ハ小作ニ關スル訴訟ハ役地又ハ負擔地ノ裁判所管轄權ヲ有ス

第二十六條 (同上)

物件上ノ裁判管轄ニ於テハ書入質ニ關スル訴訟ニ負債訴訟ヲ合シ書入質取消シニ關スル訴訟ニ對人上ノ義務解除ニ關スル訴訟ヲ合シ地所負擔ノ認諾ニ關スル訴訟ニ未済供給ニ關スル訴訟ヲ合シテ之ヲ提起スルコトヲ得但是等ノ合併シタル訴訟ヲ同一ナル被告ニ對シ起ス時ニ限ル

第二十七條 (同上)

物件ノ裁判管轄ニ於テハ不動物件ノ所有者若クハ保有者タル資格ニ於テ之ニ對シテ爲ス對人上ノ訴訟並ニ地所ノ損害又ハ地所々有引上ニ因スル損害要償ニ關スル訴訟ヲ提起スルコトヲ得

(第一解理由ノ説明) 本文三條ハ即物件ニ關スル裁判管轄ニ付キテノ規則ニシテ而シ

テ素ト此草案ニハ此裁判管轄ヲ單ニ不動産ニ對シテノミ適用セシメ殊ニ第二十五條ノ如キハ特定專屬ノ管轄ト定メアルナリ即李滬生國裁判通則ノ草案第一篇第二章第七條、第十六條法朗西訴訟法第三條第五十九條「ウエルテムベルグ」國全上第四十五條「バイルン」國全上第二十一條李滬生國全上草案第二十一條「ハンノフル」國全上第十七條「サクセン」國全上第七十五條北部獨乙聯邦全草案第五十六條、第五十八條ノ趣義ト相同シ又「ハンノフル」國訴訟法第八條「オルデンボッルグ」國全上第十九條第一「バデン」國全上第二十六條ニ依レハ不動産ノ裁判管轄ニ付キテハ起訴者ノ選定ニ任カシアルナリ然レモ必竟此第二十五條ノ裁判管轄ヲ專屬ト特定シタルハ元來「カノトン」法典併ニ獨乙國舊來ノ慣行ニ起因スルモノニシテ而シテ其萬國通用ノ法理ノ原則ニ適シ且地所所有權ヲ貴重シテ其權利義務ニ付キテ確定スルハ偏ニ該地所ヲ管轄スル裁判官ニ望ムヘキノ趣義ヲ表スル所ナレハ甚タ公明正當ナル法律ト云フヘシ然リ而シテ本文ノ「保有ニ關スル訴訟」トアルハ即一切ノ不動産保有ノ訴訟ヲ指ス義ニシテ「現ニ保有ヲ主張シ又ハ其回復ニ關スル訴訟」ヲモ含蓄スルモノト解釋セサルヘカラス又地役及ヒ小作ニ關スル訴訟ニ對スル規則ハ即此物件ニ關スル裁判管轄ハ其物上權認諾ノ訴訟ト取消ノ訴訟トヲ問ハス役地又ハ負擔地ノ管轄裁判所ニ屬セシム然ルニ李滬生國實際ノ慣行上右ノ原則

ヲシテ取消ノ訴訟ニ及ホサシメスト雖モ反テ獨乙普通法及ヒ近來新定ノ各訴訟法即  
「ハノノフル」國訴訟法第八條「ヴェルテムベルク」國全上第四十五條「バイルン」國全上第二  
十一條「ト本法トハ相符合スルナリ蓋法律ノ統一ヲ期スルニハ其原則ヲ法制上一定セ  
シムルヲ要トスヘキナリ

又本文第二十六條ノ規則ハ即「ハノノフル」國草案第十七條及ヒ「ウィルテムベルク」國訴  
訟法第四十五條ト其趣義ヲ同フシテ原告ヲシテ同一ナル被告ニ對スル場合ニ限り物上  
ノ負擔又ハ其解除ニ付キテ訴フル物件ニ關スル裁判管轄ニ據リ是ニ聯貫スル對人ノ訴  
訟ヲモ併起シ得セシメタル所ナリ而シテ孛漏生國草案第二十二條及ヒ北部獨乙聯邦草  
案第五十九條ニ於テハ必ス同一ナル被告ニ對スル時ト局限シアララス然レモ右ノ如ク更  
ニ制限ヲ立テスシテ別異ナル被告ニ對スルモ尙ホ起訴シ得ルモノト之ヲ擴張セシムル  
トハ實際ニ必要ナラス且其主義ヲ精細ニ討究スルモ必ス然ラサルヘカラスナル理由ヲ  
判別シ難ク殊ニハ徒ニ審理手續上ニ錯雜煩冗ヲ速キ從テ訴訟ノ併起ヲ致スノ悞アルヘ  
キカ爲メ寧ロ是カ制限ヲ規定スルノ優レルニ如カサルヘシ  
而シテ物上權ニ關スル訴求ヲシテ不動産ノ裁判管轄ニ依ラシムルノ理由ハ即本文第廿  
七條ノ保有者又ハ所有者ナリトシテ現ニ物件ヲ有スル者ニ係ル所ニモ適合ス又地所ニ

被リタル損害賠償ニ關スル訴訟ニ付キテノ裁判管轄ヲ爰ニ定メタルハ實際損害ヲ要求  
スルニ甚ダ便宜ナリ又地所々有引上ニ起因スル損害要償ノ請求ニ關スル訴訟ヲ此物件  
ノ裁判管轄ニ依リテ起訴シ得セシメタル所モ復タ實ニ便宜ニ出ルナリ(尙ホ千八百七  
十二年十二月二十一日頒布ノ獨乙帝國城砦近傍ノ民有地ニ對スル制限法律第四十二條  
ヲ參考スヘシ)

〔第二解制定ノ沿革〕 本文三條ハ四種ノ草案共ニ皆ナ同文ナリ獨リ北部獨乙聯邦草案  
ハ其行文意義共ニ別異スル所アリ乃同草案第五十六條第五十八條ニ於テハアル不動物  
件ノ保有者ノ資格ヲ以テ之ニ對シ小作請求ノ訴訟ヲモ不動物件ノ特定專屬ノ裁判管轄  
中ニ屬セシメアリ然レモ其理由トスル所ハ更ニ解シ難キナリ加之其第五十九條ハ本法  
第二十六條ト異ナリテハ同一ナル被告ナラサル時ニモ出訴シ得セシメアレハ爲メニ訴  
訟ノ併起ヲ免カレサルナリ上ノ第一解第二項ヲ參考スヘシ

本文ノ第二十五條第二十六條ノ兩條ハ國議院委員會ニ於テ別ニ議論ナリシテ採用セ  
ラレ而シテ第二十七條ニ付キ動議アリテ遂ニ排斥セラレタル所ハ即其對人ノ訴訟ハ只  
原告カ不動産ニ對スル物上ノ權ヲ主張シ得ヘキモノニ限ラント建議シ且地所ニ被ムラ  
シメタル損害要償ニ關スル訴訟ノ二項ヲ刪除セント爲スコ在リ當時此動議ノ辨論中

内閣代理員ハ此動議ニ從ヘハ則犯罪ト稱シ得サル地所ノ被害例ヘハ田野ニ被ラシメタル損害ニ因スル場合ヲ省ミサルモノナリト駁シタリキ

〔第三解 物件ノ裁判管轄〕 本法ニ於テハ彼ノ羅甸ノ「フォルム、レイ、シート」ナル語ヲ譯シテ物件ノ裁判管轄ト稱スルナリ蓋此語タルヤ第二十五條乃至第二十七條ニ包含スル事項ヲ指シテ概括セシムル爲メ能ク舊來ノ慣用ニ適スルヲ以テ其便チ感スルノミナラス又本文第二十七條ニ依リ純然タル對人ノ訴訟ヲモ此裁判管轄ニ屬サシメアルガ故ニ益便宜ナリ

〔第四解 不動産物件及ヒ地所〕 今本文第二十五條ト第二十七條ヲ參照スレハ一ニハ不動産物件ト明示シ一ニハ地所ト記載シアリ而シテ此二語ノ義理自ラ異ナルハ己ニ世人ノ熟知スル所ニシテ即不動産物件ト稱スレハ無形体ノ物件及ヒ不動的ト認定スヘキ動的ノ附屬物件ヲモ包含スルモノナリ之ニ反シ地所トハ本來ノ有形的ノ財産ニ限ルナリ〔本法第七條ノ第五解參照〕必竟此二語ノ法律上ニ相散在スルニ從テ其趣義ノ解釋ハ自ラ一ノ慣用ヲ爲スナリ即本法第七條、第二百三十七條、第七百四十七條、第七百五十二條第七百五十五條以下及ヒ第八百十一條、第八百十七條ニ就テ視ル可シ殊ニ爰ニ要トスヘキハ第七百五十五條乃至第七百五十七條ニテ即其題號ニハ不動産物件ニ關スト明示シア

且第七百五十七條第三項ニハ強制執行ニ付キテ如何ノ物件及ヒ權利ヲ不動産物件ト視做スヘキ乎ハ聯邦法ヲ以テ之ヲ定ムニ云々ト明示ス

而シテ此末段ニ舉ル規則ハ本法中不動産物件ト明記スル所ニ悉ク之ヲ適用スルモノニテ未タ明ニ之ヲ一定セス故ニ各聯邦法ニ從テ大ナル異同アルヲ見ルヘシ

〔第五解 不動産物件ノ裁判管轄ト他ノ裁判管轄トノ關係〕 不動産物件ノ裁判管轄ハ能ク財產ニ關スル裁判管轄ヲモ成定シ得ルハ固トヨリ當然ナリト雖モ而カモ必ス純然タル財產ニ關スル請求ニシテ且其被告カ内國ニ住所ヲ有セサル場合ナラサルヘカラス又遺產ニ關シテハ其普通裁判管轄ヲ有スル裁判所ニ起訴シ得ヘキ所ハ固トヨリ本文第二十五條ノ裁判管轄ノ爲メ妨ケラル、コ之アラズ且此遺產ニ關スル裁判管轄ノ規則ニハ又一全体物件ノ分配ニ關スル起訴ノ通則ヲモ定メアルナリ〔本法第二十八條第一解第三解參照〕

本法第四十條第二項ニ據リ裁判管轄ノ認諾ハ本文第二十五條ノ場合ニモ亦許サ、ルナリ是ニ因テ原告ハ假令互ニ認諾ヲ爲シアルモ必ス其不動産物件所在地ノ管轄裁判所ニ起訴シ若シ管轄違ノ言渡ヲ受クルモ之ニ對シ控訴シ得ルノ權利義務ヲ有ス又被告ハ本文第二十五條ニ係ル訴訟ヲ認諾ノ管轄裁判所ニ提起セラル、時ハ管轄違ノ抗辨ヲ爲シ

且之ヲ主張維持スルヲ得ルナリ然レモ原告被告兩造共ニ認諾ノ管轄裁判所ニ於テ更ニ右ノ權利ヲ利用セズシテ相當ノ管轄裁判所ナリト自認シ遂ニ其判決確定スル時ハ之ニ對シ無効ノ判決ナリトシテ更ニ不服ヲ唱ルヲ許サズ(本法第二條第二條第二條併ニ「ウィルンツ」氏「バイロン」國訴訟法釋義中第三十八條ニ對スル解釋第一參看)但原告被告兩造共ニ其判決ニ對シ控訴スルノ權ハ之アリ如何トナレハ則其默諾ナルト明諾ナルトニ拘ハラズ共ニ必ス認諾裁判所ニ從屬セサルヘカラスト原告被告兩造ヲ束縛シ能ハサルヲ以テナリ「ウィルンツ」氏(全上參照)又其認諾ノ管轄裁判所ハ本文第二十五條ニ係ル訴件ヲ職權ヲ以テ却下スルノ權アリ(本法第二條第三條參照)然リ而シテ本法第三十八條乃至第四十條ニ對スル理由説明ニ認諾ノ管轄裁判所ハ原告被告兩造ノ意思ニ拘束セラル、モノナリトアルハ原告被告兩造ノ意思如何ニ因ラスシテ法律ノ別ニ特定シアル場合ニハ適當セス必竟裁判所モ亦敢テ法律ニ違反スルノ所爲ヲナサ、ルヘカラサルコト之アラサルナリ「ウィルンツ」氏著「バイロン」國訴訟法註釋ニ依レハ其場處ノ管轄ニ付キテハ物件所在地ノ裁判所ニ於テ裁判スルモ又ハ認諾ノ管轄裁判所ニ於テ裁判スルモ敢テ關係スルヲ要セスト説述シ且職權ヲ以テ管轄違ノ言渡ヲ爲スコト之ヲキ説ノ如クナリ然ルモハ則氏ノ説ハ本法ニ於テ概シテ不動物件ニ關シテハ之ヲ各聯邦法制ニ誘付シアルカ如クシテ而シテ

本文第二十五條ノ場合ニ付キ己ニ其理由説明(上ノ第一條第一項)ニ舉述セシ所ノ不動物件ノ裁判管轄ヲ特定專屬ト定メタル規則ハ元ト公法上ノ資質ナリトスルモ主義ニ背馳スルナリ實ニ一邦若クハ各局地ノ地所ニ付キテノ一種特格ナル關係ニ至テハ異邦ノ裁判官タル者之ヲ熟知シ能ハサルコト往々コシテ然ルモノニテ即此第二十五條ノ規則ニ依ラサレハ蓋裁判所併ニ該事件ノ爲メ不利ヲ來スヤ淺少ナラサルヘシ

〔第六解、地役〕 此語ノ理義ニ付キテハ宜ク本法第七條第二條參照スヘシ又土地ニ屬セサル地役ニ付キテハ本文第二十五條第二項ニ明記スル所ノ其役地ノ所在地ニ依ルヘキ規則ニ從フヲ要セス是レ即第二十五條第一項ニ於テ明瞭ナル所ナリ

〔第七解、不動物件ノ數多ノ裁判管轄〕 此場合ニ付キテハ本法第三十六條第四及ヒ是ニ對スル第八解ヲ參考スヘシ

〔第八解、治外法權〕 是ニ關シテハ又本法第十六條第二條參照ヨ

〔第九解、書入質ニ關スル訴訟及ヒ其取消ニ關スル訴訟及ヒ小作ニ關スル訴訟及ヒ訴訟併起及ヒ附隨訴件〕 本文第二十五條ハ即不動物件ニ關シ物件ノ負擔又ハ其解除ニ係ル訴訟ニ限リ其裁判管轄ヲ定メ又第二十六條ハ其明舉シアル場合ニ限リ訴訟ノ併起ヲ允ル所ニシテ而シテ明記セサル他ノ場合ノ者ハ固トヨリ併起スチ允ルサルナリ然

リト雖モ爰ニ須ラク誤解スヘカラサル點アリ蓋第二十六條ハ相聯屬スル訴訟ヲ明舉スル所ニテ而シテ第二十五條下ニ屬スヘキ訴訟ニ附隨スル本來ノ附帶請求ノ如キハ固下ヨリ特立ノ訴件ナラサルヲ以テ此不動産物件ニ關スル裁判管轄外ニ取除ケサルナリ例ヘハ所有者ナル原告ハ不良意ノ保有者タル被告ニ對シ其收穫物ノ辨償ヲ請求シ得又物上權ノ取消ヲ請求スル原告ハ被告ニ係リ被告カ不法ナル地役ヲ施行シタルニ因リ生シタル損害ノ賠償ヲ請求シ得可キナリ○「ウィルンツ」氏「バイルン」國訴訟法註釋中ニ舉述スル所ノ抵當取消ノ訴訟ニシテ其債主ノ人權上ノ責務ニ起因スルモノハ能ク不動産物件ノ管轄裁判所ニ提起シ得ヘキヤ否ノ問題ニ對シテハ我カ本法ニ依レハ之ヲ非認セサルヘカラス必竟本文第二十五條乃至第二十七條ヲ相通シテ對照シ且其理由説明ノ趣旨ニ依テ案スルニ第二十五條ノ特定專屬ノ裁判管轄ハ單ニ物件ニ關スル訴訟ニ限り管轄スルノ規則ニシテ之ニ反シ彼ノ抵當取消ノ訴訟ノ如キハ第二十六條第二十七條ニ屬スヘキナリ

書入質條例第二千五百五十九條第二千六百六十一條ニ掲ル書入質減額ノ訴訟ニ對スル特別裁判管轄ハ「バイルン」國訴訟法實施法第百十條ニ於テハ尙ホ採用シアレハ本法ノ實施法第十四條ニテハ之ヲ廢停セシメタリ必竟此減額ノ訴訟ハ其幾分ヲ取消ス物上ノ訴訟ニ如クナレハ實ハ對人ノ權利ナルヲ以テ爰ニ屬セシメサルナリ

本解ノ標題ニ掲クル書入質ニ關スル訴訟及ヒ其取消ノ訴訟小作ニ關スル訴訟ノ三件ニ關シテハ即負債ニ關スル訴訟對人上ノ義務解除ノ請求淹滯額辨償ノ請求ハ却テ第二十五條ニ掲クル主訴ノ附隨訴訟ノ如ク視做シ得ヘキ乎ノ疑團アリ是ニ於テ第二十六條ニハ特ニ之ヲ明舉シテ以テ規定シタリ然レハ本文ニ明記スル場合ニシテ其聯屬スル訴訟ヲ同一ナル被告ニ對シ提起スル時ニ局限スルナリ

蓋法朗西國法學ニ於テ一般ニ採用スル如ク書入質取消ノ訴訟ハ又之ヲ一ノ附帶ノ訴訟トナシテ他ノ裁判所ニ提起スルヲ得ヘシ例ヘハ保證ノ契約即此契約ニ因テ書入質ノ成立タルモノナルニ詐偽ノ處爲アリトシテ契約無効ノ訴訟ヲ爲スルハ債主ノ住所地ノ管轄裁判所ニ提起スルコトアリ此場合ニ於テハ書入質取消ノ請願モ自ラ聯屬シアルナリ

又地所賣買ニ關シ契約無効ノ訴ヲ爲スル啻ニ契約ノ無効ヲ訴フノミナラス又地籍登記簿ノ變更ヲ請求スル如キ類例ニ於テモ亦前項ニ齊シ

必竟本法第二百三十二條及ヒ第二十五條ニ依テ以テ凡ソ對人上ノ訴訟ニシテ物權上ノ結果ヲ有スヘキモノハ必ス其物權ノ事件ヲ訴願中ニ包含セシメ能ハサルモノト速斷スヘカラサルナリ蓋第二十五條ノ特定專屬ノ管轄ノ規定ハ偏ニ物權上ノ訴訟ニノミ局限

スル所ニシテ而カモ所有者又ハ保有者タル資格ニ於テ其現有者ニ對シ爲スノ訴訟ニス  
ラ波及セシメサルナリ乃彼ノ議論多キ訴訟併起ノ害モ之ナカルヘシ

〔第十解〕「アウチオ子ス、イン、レム、スグリアテ」(不動産ノ現存スル者ヲ所有主) (理由説明〔第一  
解第三項〕ニ掲クル所ニ依レハ本文第二十七條ニ於テ此舊來ノ羅國語ヲ不動物件ノ所

有者又ハ保有者タル資格ニ於テ之ニ對シ爲ス訴訟ト反譯シ試ミタリト云フ「ウイロンツ」  
氏「バイルン」國訴訟法註釋併ニ「レナウ」氏獨乙普通法註釋ニ於テモ亦然リ

而シテ所有者又ハ保有者タル資格ニ於テ之ニ對シ爲ス訴訟トハ如何ナルモノ乎ト云フ

コ付キテハ民法ニ於テ答解スヘキ所ナリ「ウイノドシヤイ」氏羅馬法註解「アルソツ」氏  
全上ニ依レハ對人ノ訴訟ニシテ其一定ノ對手人ヲ有セサル訴訟ナリト説ケリ今本法第

二十七條ニ於テハ只不動産ノ所有者又ハ保有者トノニ制限シアレ而カモ是ニ屬ス  
ヘキ各訴訟ハ各聯邦法ニ於テ區々ノ規定アリテ頗ル異同アリ

蓋本文第二十七條ノ裁判管轄ハ「之ヲ提起スルコトヲ得」ト明記シテ即任意法ノ文法ヲ  
用ヘタリ又本法第三十五條ノ原告裁判所ノ選定權ハ復タ本條ニモ適用シ得ルハ論ヲ俟  
タズ

〔第十一解、地所ノ被害〕 上ノ第二解ニ於テ地所ノ被害ニ付キ引例セル田野ノ損害ハ即

其地所自体ニ害ヲ被ラヌシテ只收穫物ニ害アルキニ在テハ尤モ適當ノ例ナリ然レモ仍  
ホ樹枝ニ垂ル、果實又ハ立樹ハ地所ノ一部ニ屬スルモノナレハ是等ニ生スル普通ノ田  
野ノ損害ニ關シテモ即此第二十七條ニ屬スルナリ然リ而シテ此裁判管轄ハ本法第三十  
二條ト其撥チ一コス

〔第十二解、地所々有引上ニ因スル訴訟〕 本法實施法第十五條第二ニ依レハ則公益ノ爲  
メニ所有權ヲ引上ラレタルニ起因スル特格ノ訴訟ノミヲ指スノ義ナリ然リ而シテ本條  
ノ如ク特格ノ裁判管轄ヲシテ「提起シ得」ト任意法ノ文法ヲ用ヘタルハ殊ニ國庫ニ對ス  
ル場合ニ(本法第二十條第五解參照)大ニ價直ヲ有スル所ナリ

第二十八條 (特別裁判管轄第六) 遺産ニ關スルノ條  
相續權、贈遺又ハ其他ノ臨終處分ヨリ生スル請求又ハ遺産ノ分配ニ關  
スル訴訟ハ遺囑者臨終ノ時普通裁判管轄ヲ有シタル裁判所ニ之ヲ提  
起スルコトヲ得

遺産ノ裁判管轄ニ於テハ遺囑者又ハ相續人タルノ資格ニ於テ之ニ對  
スル請求ヨリ生スル遺産債主ノ訴訟モ亦提起スルコトヲ得但遺産ノ  
全部又ハ一部尙ホ其裁判所管轄内ニ存在スル時又ハ相續人數名アリ

テ未タ遺產ヲ分配セサル時ニ限ル

(第一解理由説明) 蓋本條ノ規則ハ恰モ「コロンベルグ」草案第九條「バチン」國訴訟法第二十九條「バイルン」國全上第二十二條「ウィルテムベルグ」國全上第四十八條「李滯生」國草案第二十五條第二十六條及ヒ「ハンノフル」國草案第十九條ト相符合ス

獨リ本條ノ上項ニ列載スル各法律ト異ナル所ハ即一ハ相續人ト受贈者トノ訴訟ニ付キ一ハ遺產債主カ遺囑者及ヒ相續人ノ資格ニ於テ之ニ對シテ爲ス訴訟ニ付キ遺產ノ裁判管轄ノ繼續時限ニ關シ差異スル所ニ在ルナリ而シテ右ノ第一ノ場合ニ於テハ遺產ノ裁判管轄ニ依ルヘクシテ更ニ期限アルコトナシ必竟如此キ場合ニハ遺囑者カ臨終ノ時普通裁判管轄ヲ有セシ裁判所ヲ以テ遺產ノ管轄裁判所トナスハ當然ト云フヘシ而シテ其裁判所ノ職權ハ全部相續(永世貸地、家門惣領地、家門共營地、農地)ニ屬セサル物件ノ相續ニ關シテハ相續人及ヒ受贈者トノ權義ニ付キテ管轄シ得ヘシ(尙ホ下ノ第二解參照)然ルニ遺產債主ニ對シテハ遺產ノ管轄裁判所ハ一概ニ當然ノ管轄權アルモノト云ヒ難キカ如シ但一定ノ時期ヲ限リ債主カ權利伸張ノ爲メ顯著ナル事由ノ存スル間其利益ノ爲メ管轄スルニ過キサルナリ而シテ是ニ付キ本條ニ於テ採ル所ハ即

〔甲〕遺產ノ尙ホ遺產ヲ管轄スル裁判所ノ管内ニ存在スル時間 是レ内國人ノ遺產ヲ外

國人相續シタル時内國ノ債主其相續人ニ係ル場合ヲ保護スルニ在リ

〔乙〕相續人數名アリテ未タ遺產ヲ分配セサル時 債主將ニ出訴セントスルコト方テ素ト

一箇ノ裁判管轄ニテ足ルヘキニ未タ其遺產ヲ分配セサルモ尙ホ相續人數名アルカ爲メ格別ニ起訴セサルヘカラサリセハ債主ノ困澁モ甚シカルヘキカ爲メナリ

己ニ遺產ヲ他ニ移轉セシメ又ハ分配シタル後ニ方テハ遺產債主ハ其請求ニ付キ他ノ原因ヲ以テ遺產ノ管轄裁判所ノ管轄ニ屬スルニ非サル限リハ即猶ホ遺囑者ニシテ住所ヲ移轉シタルカ如ク同一ニ相續人等ノ管轄裁判所ニ出訴セサルヘカラサルナリ

又相續人ノ資格ニ於テ之ニ對シ請求ストハ即遺囑者ノ死後未タ分配セサル遺產ノ全部例ヘハ各相續人ノ契約上分配セサル如キ場合ニ係リ請求スル義ト解釋セサルヘカラス

〔コロンベルグ〕府委員會議筆記録參照

北部獨乙聯邦訴訟法草案第六十條第三項ニ於テハ一聯邦ノ特定規則ヲ認可シ(李滯生國內國通法第一篇第十七章第百三十二條債主ノ利益ヲ期ノ若シ通知ヤスシテ分配シタル時ハ遺產ノ裁判管轄期限ヲ仍ホ繼續セシムレ而カモ法律統一ノ公益ヲ棄テ此特別法ヲ採レルノ理由解シ能ハス

「ハンノフル」國草案第十九條第四項及ヒ「ウィルテムベルグ」國訴訟法第四十八條第三項



ニ於テハ不動産物件ニ關スル特定專屬ノ裁判管轄ヲ遺產ニ對スル裁判管轄ノ補充ト爲ス規則ヲ定メアレモ己ニ北部獨乙聯邦草案ヲ議スルニ際シ故ラニ之ヲ排除シタリ蓋全部相續ニ屬スル不動産物件ニ付キテハ遺產ノ管轄裁判所ニ支配セラル、モ其配當上更ニ危懼スル所之アラサレハナリ

〔第二解、制定ノ沿革〕 己ニ第一解ニ舉述スル如ク本條ノ北部獨乙聯邦草案ト異ナル所ハ措テ論セス又本條ノ第二項ノ字漏生國草案第二十七條ノ文章ト異ナル所ハ即全國草案ニ「遺產ノ全部又ハ一部尙ホ其裁判所管轄内ニ存在スル時又ハ」ノ文字ヲキナリ

本條ノ第一讀會ニ於テ一委員ハ此裁判管轄ヲ以テ「提起シ得」トノ任意法トナサズ必定ノ命令法ニ修正セントノ動議ヲ提出シタリシモ内閣代理員ハ之ヲ必要ナラスト駁シタリ又他ノ委員ハ此裁判管轄ノ期限ヲ著シク制限セントノ動議ヲ起シタリシモ亦全ク排斥セラレ第二讀會ニ於テ異議ナク本條ヲ認可シタリ(會議筆記錄參照)

〔第三解、各私法〕 上ノ第一解理由説明ニ於テハ本條ニ依テ定メタル遺產ノ管轄裁判所ニ付キテノ民法ハ永世貸地(封土)其外ノ地所ニ關セサル限り全体ノ遺產ヲ支配スヘシト一大原則ヲ斷言セリ然レモ素ト本法ハ單ニ裁判管轄ニ付キテ規定スルモノニシテ而シテ實際ニ於テ其管轄裁判官カ外邦法律ヲ資用セサルヘカラサル責ヲ荷フ一往々之アル

ハ世ノ熟知スル所ナリ即裁判管轄ノ規則ニ因テ敢テ民法ヲ動カズヘカラサルハ掩フヘカラサルノ成蹟ナリ況ヤ本法實施法第十四條ハ只ニ訴訟法ニ係ル各聯邦ノ法律ヲ廢止セシムルノミヨシテ反テ其第十五條第二ニハ明ニ遺產ノ精算手續ニ關スル聯邦法律ハ之ヲ保維實行セシムルノ義ヲ示シアルオヤ

然レハ即理由説明ニ述フル所ハ未タ法律トナラサルモノナレハ以テ各聯邦法ヲ變更セシムルノ能力之アラズ而シテ此事タル各國尤モ區々ノ意見ヲ抱キアリテ彼此ノ大差ヲ爲ス所ナリ乃「ライオン」部地ニ行ハル、法朗西法ヲ案スルニ其民法第三條第二項ニ曰不動産物件ハ外國人ノ所有ニ係ルモ法朗西國法律ヲ以テ之ヲ支配スヘシ即此律意ハ不動産ハ必ス其所在地ノ法律ニ依テ裁判セラレサルヘカラサルノ義ナルヤ明瞭ナリ又此律意ニ於テ外國人ノ不動産物件ニ係ル遺產ハ其遺產者ノ自國ノ法律ニ依テ裁判セラルヘキノ義ヲモ推知スヘシ(「ツハ」エ「氏法朗西民法論第一卷參照」又「バデン」國ニ於テハ特定ノ法律ヲ現行スルヲ以テ其裁判モ亦自ラ別異ス

蓋理由説明ノ述フル所ハ即昔日頗ル論議アリテ當時ニ至テ稍一定シタル獨乙普通法ノ律意ヲ採テ以テ表示シタルモノニテ此趣義ニシテ法律ニ採用セラレサルハ頗ル遺憾ナルカ如シ而シテ未タ之ヲ採用セラレサル間ハ則暫ク各聯邦法ノ適用ヲ允可セサルヘ

カラサルナリ然リ而シテ「ストッベ」氏ハ獨乙普通法ノ理義ヲ羅馬法ノ全部相續人ニ關スル律文ニ基キテ解釋シタリ是レ適法期西國ノ遺產法ニ缺クル所ニシテ即羅馬法ニハ「財產ノ一部分ニ付キテ遺言シタル者ハ其餘ノ部分ニ付キテ遺言セスシテ死セス」トアルナリ「ツヤハリエ」氏法朗西民法論第四卷參看

必竟本條ノ裁判管轄ハ決シテ特定專屬ノモノト云フヘカラス(上ノ第二解參照)且正統相續人ノ遺產回復ノ訴訟ニハ適當セサルナリ然レハ即他ノ受訴裁判官ハ果シテ本法ノ何レニ依リ得ヘキ乎蓋遺產ニ關スル私法ヲ應用セサルヘカラサルヘシ

〔第四解本條第一項ニ於ケル此裁判管轄ノ範圍〕之ニ付キ論述スルコ先チテ本法實施法第十五條第二ニ於テハ本條ノ任意上ノ裁判管轄ニハ更ニ干涉セス殊ニ偏ニ訴訟ノ類ニ付キテノミ規定シタルコトヲ遺忘セサランコトヲ要ス

凡ソ法律上遺書上及ヒ契約上ノ相續權ヲ以テ遺產ノ全部又ハ一部若クハ各部分ノ相續ニ關シ爲ス訴訟ハ皆其遺產ノ管轄裁判所ニ提起シ又遺產分配ニ關スル訴訟ハ特ニ其遺產ヲ一全体トシテ之ニ係ル時ニ限り全ク遺產ノ管轄裁判所ニ提起シ得ヘシ之ニ反シ分配ノ時ニ於テ分配セラレスシテ殘留スル各部分ニ係ル場合ニハ右ノ裁判管轄ニ起訴セス本條ノ「遺產ノ分配ニ關スル訴訟」トアル明文ニ照シ普通裁判管轄ニ依ルヘキナリ

〔遺產相續回復ノ訴訟〕抑遺產相續回復訴訟トハ即或人通法ニ依リ正統ナル相續人トシテ又ハ保有者トシテ遺產ノ全部若クハ一部ヲ現有スレトモ此者ハ真正ノ相續人ニ非ストズルカ又ハ原告ノ顯ハル、以上ハ現有者ノミ獨リ相續スヘキ者ニ非スト云フノ理由ヲ以テ出訴スルモノ即是ナリ此場合ニ於テハ必ス原告ハ自ラ相續權ニ就テ證セサルヘカラス故ニ此訴訟ハ相續事件ノ管轄裁判所ニ提起セシムルナリ「レナウド」氏亦其訴訟法註釋ノ本條ノ解釋ニ於テ同一ノ說ヲ爲セリ「シーベンハル」氏ハ異見ヲ立テ即遺產相續回復ノ訴訟ニ關スル裁判管轄ニ付キ從來獨乙普通法ノ趣義ヲ維持シ本條ノ相續權ト明示スル語ニハ自ラ相續人ノ當否ヲ審定スル義ヲモ包含スルハ固トヨリ喋々ヲ要セスト述ヘタリ然リト雖モ獨乙普通法ノ訴訟規則ハ今日己ニ廢止ニ屬シタルノミナテス其「訴訟權ヲ以テ物件ト爲ス訴訟」ト明記スル所ハ本條ニ於ケル辭句及ヒ理由トハ自ラ異ナルヲ見ルヘキナリ

〔遺產ノ分配〕遺產トハ己ニ上來總述セル如ク之ヲ一全体タルモノニ限ラサルヘカラス然レモ又到底當ニ分配スヘクシテ而カモ方ニ分配ニ著手シタルモノナラサルノ義ヲモ包含セシメテ解釋スルヲ要ス必竟強迫等ニ原因スルモノトシテ分配拒絕ニ關スル訴訟或ハ共同相續人ノ間ニ於ケル分配後ノ賠償保證ヲ請求スル訴訟ノ如キハ之ヲ遺產ノ管

轉裁判所ニ提起セシムヘキ事由ナキナリ  
 又遺產中ニ不動物件ノ存在スル時本條第一解ノ説明ニ依テ本條ノ裁判管轄ニ依ラスモ  
 テ本法第二十五條ノ專屬管轄ニ依ルヘキモノト限定スヘカラス此義ニ付キテハ自ラ依  
 ルヘキノ一般ノ原則アル所ニテ即彼ノ第二十五條ニ明示スル不動物件ノ分配訴訟ハ  
 概シテアル財産ノ一全体ニ關スル場合ヲハ包含セサルナリ(「ストルックマン」氏「コフ」氏  
 訴訟法註釋第二十五條ニ對スル第一註解參照)又彼ノ本法第十九條ニ掲クル訴訟人ノ  
 財産ヲ分配スル場合ニ對シテモ亦本條ノ説明ハ恰モ適當ニアルナリ而シテ其裁判管轄  
 ノ繼續期限ハ本法第二十三條ノ第三解及ヒ第十九條ノ第五解ヲ參照スルニ清算終了ノ  
 時マテ保續スル所ニテ即現有財産ノ分配實施ヲモ包括スルナリ到底法律ハ適シ財産中  
 三所若クハ數所ノ裁判所ノ管轄區内ニ散在スル不動産ノ之アルカ爲メ其歸一ナルヘキ  
 分配處分ノ數岐ニ出ルモノトシテハ規定シ得サル所ナルヘシ  
 元來相續ニ關シテハ必ズ有形人アル時ニ限テ之ヲ論スヘキモノナルカ故ニ本條ニ載ス  
 ルモノ、普通裁判管轄ハ孰レニ在ル乎ヲ求ムレハ則只ニ本法第十四條乃至第十八條ニ  
 係ルモノト解スヘキナリ抑第十九條ノ如キハ准住所ニ類スルモノ、管轄ヲ定ムル所ニ  
 ノ而カモ普通裁判管轄ヲ定ムトハ言ヒ難シト雖モ必竟其本人自身ニ係ル所ノアル訴訟

ニ限ル所ナレハ即其本人ノ生存中ニ限レルナリ  
 本條第一項ノ裁判管轄ニ付キテ時限上又ハ物件上其他格段ノ制限アルニ非ズ即相續人  
 ノ住所若クハ寄留地又ハ遺產ノ管轄裁判所區内ニ存在スルト否等ニハ更ニ關係スルヲ  
 要セサルナリ

[第五解、遺產債主ニ付キテノ裁判管轄] 本條第二項ノ明文併ニ本條ノ理由説明ニ述フ  
 ル遺產債主ノ裁判管轄ニ付キテ要トスル趣旨ハ北部獨乙聯邦草案第六十條ノ明文殊ニ  
 明白ナリ即曰

相續件ノ裁判管轄ハ其遺產ノ全部若クハ一部尙ホ遺產裁判所管轄内ニ存在スル時又  
 ハ相續人數名アリテ未タ遺產ヲ分配セサル時ニ限り成立チアルモノトス  
 右ノ律義ハ即二箇ノ場合ヲ判別シアルナリ(一)相續人一人ナル時然ルキハ遺產ノ全部  
 若クハ一部存在スルヲ以テ足レリトナシ(二)相續人二名若クハ數名アル時此場合ニハ  
 必ズ其遺產ノ未タ分配セラレサル間ニ限ルノ意ナリ  
 遺產ノ元來相續ノ管轄裁判所區内ニ存在セス又ハ己ニ他ニ移轉サレタル時ハ其裁判管  
 轄ヲ脱スルハ論ヲ俟タズ而シテ相續人數名アル時其遺產ノ分配ヲ果行シタル場合ハ即  
 直ニ裁判所ノ管轄ヲ脱スルナリ此第二ノ場合ニ付キテハ民法ニ於テ之ヲ規定スヘキ所

ニシテ而シテ遺産ノ尙ホ存在スル場合ニ對シテハ本法第二十四條ヲ適用シテ可ナリ  
右ノ制限ハ即將ニ右ノ如キ場合ニ臨マントスルニ方テ己コ起シタル訴訟又ハ遺囑者ニ  
對スル訴訟ノ進行中ニシテ未確定ノモノニハ及ホサルモノトス(本法第二百三十五  
條第二ヲ參照)

債主トハ何人ニテモ其請求ノ原由ヲ問ハス他人ニ向テ供給又ハ引渡シテ請求スル權利  
アル者ヲ指ス例ヘハ動物件ノ遺産ノ一部ニ對スル使用權ニ付キテ請求スル原告ノ如キ  
即然リ「アルンド」氏及ヒ「ウエンシヤイド」氏ハ反テ債主ナルモノハ到底對人上ノ請求權  
ヲ保有スル者ナラサルヘカラスト論ス又是レ普通ノ理義ナリ而シテ不動物件ノ遺産ニ  
對スル第三者ノ物上ノ訴訟ハ不動物件ノ管轄裁判所ニ專屬スヘシ(本法第二十五條參  
看)之ニ反シ遺囑者ニ對スル請求ニ關スル他ノ訴訟ニ付キテハ法律ノ趣義ニ從ヒ債主  
ナル語ヲ一般普通ノ理義ニ於テ解スヘキナリ

相續者タル本人ニ係リ請求スル遺産債主上ノ第一解第四項參照)トハ即遺産相續所分  
ヲ開キタル後ニ起因シテ其遺産ニ對スル請求權ヲ得有シタル債主ヲ云フ即分散ニ於ケ  
ル分散資額ノ債主ニ相比スヘキモノナリ(獨乙分散法第五十條第五十二條第五十三條  
參照)

第二十九條 (特別裁判管轄第七) 契約ニ關スルノ條

契約ノ成立又ハ不成立ノ確定契約ノ履行又ハ解除ニ關スル訴訟並ニ  
契約不履行又ハ不當ナル履行ニ付キテノ損害要償ニ關スル訴訟ハ訴  
訟トナリタル義務ヲ履行スヘキ地ノ裁判所管轄權ヲ有ス

(第一解理由ノ説明) 本條ハ契約ニ關スル裁判管轄ヲ定ムルノ條ニシテ即被告カ契約  
ヲ履行スヘキ地ノ裁判所之ヲ管轄スルコトヲ示シタルナリ(尙ホ次ノ第二解參照)抑本條  
ニ於テハ獨乙普通法ノ實際ノ慣行併ニ孛漏生國法律ニ反シテ必スシモ被告カ其裁判所  
管區内ニ現住スルヲ要セス且又其管區内ニ財產ヲ所有スルヲモ要トナサス必竟是等  
ノ制限ヲ排棄シテ以テ交通上ノ利益ヲ期シ契約ニ關スル裁判管轄ヲシテカメテ自由  
ナラシメンカ爲メ「ユルンベルグ」草案第六條孛漏生國草案第十九條「ハンノフル」國草  
案第二十條北部獨乙聯邦草案第六十一條「ウエルテムベルグ」國訴訟法第四十二條等ヲ參  
酌シテ契約履行地ヲ以テ適當ト定メタルナリ(然シ次ノ第二解參照)然リ而シテ「ハンノ  
フル」國訴訟法第十條ニ於テハ任意法ノ文法ニ又「オルデンボルグ」國訴訟法第十六條  
ハ補助規則トシテ契約締結地ノ裁判所モ亦管轄權ヲ有シ得ルコトニ定メアリ然レモ近  
來ノ理論ニ依レハ則契約履行地ニ比スルニ契約締結地ニ於テ法權ノ保護ヲ請フノ必要

ハ幾ノト絶無ニシテ單口契約履行地ニ定ムルノ便益ニ如カサルヘシト云ニ在リ又ハ  
 ノノフル國草案「ウエルテムベルグ」國訴訟法及ヒ「バデン」國全上第三十一條ニ於テハ此  
 契約履行地ニ付キテ更ニ詳細ナル明文ヲ掲ケ被告ハ對手人ト明諾又ハ默諾ニ依リ其契  
 約ノ性質又ハ法律ノ規則ニ從ヒ契約ノ履行ヲ爲スヘキ場所云々ト示シアレモ如此ク特  
 別ノ關係ヲ細示スルハ到底不用ナルヘシ元ト本條ノ原稿ハ履行地ト爲シ得ル限りハ渾  
 ヘテノ場合ニ於テ起訴シ得ヘキ頗ル汎然ナル趣義ナリ又此契約ニ關スル裁判管轄ニ付  
 キテ「バルイン」國訴訟法第二十三條ノアル契約ヲ履行シ能フヘキ一定ノ場所ニ限り又  
 ハ其場所ノ契約書ニ明示シアル時ト制限スル規則ハ遂ニ摸倣セラレザリシ是レ必竟商  
 法第三百二十四條第三百二十五條第三百四十二條ノ趣義ト相牴觸スル所ナルヲ以テニ  
 由レリ

蓋本條ニ屬スル訴訟ハ契約ノ履行若シハ解除又ハ契約ヲ全ク履行セス若シハ不當ナル  
 履行ニ原因スル損害賠償ニ關スル訴訟ニテ即前項ニ列載引援セル法律モ亦同趣義ナリ  
 然リ而シテ本法ニ於テ又契約ノ成立又ハ不成立ヲ確定スル訴訟ニ付キテノ豫審ヲモ本  
 條ノ管轄ニ屬セシメタルハ必竟法律進捗ノ結果ト云フヘシ〔本法第二百三十一條參看〕  
 又契約解除ノ訴訟ニ付キテハ特ニ法朗西民法第千八百八十四條及ヒ「バデン」國法ニ照准

シテ實際損害要償ノ訴訟ハ必ス同時ニ契約解除ノ請求ト共ニ起スニ非サレハ起訴シ能  
 ハサル趣義ヲ應用セサルヘカラサルナリ蓋契約解除ノ原由ハ往々契約ニ因テ生スル義  
 務ト頗ル密著シアルヘシ今此裁判管轄ヲ如此ク擴張スル所ハ即外國ニ居住スル者ニ對  
 スル彼ノ本法第十三條第十八條ノ原則ト相衡平ナラシムルニ適當スルモノ、如ク然  
 リ

法朗西法ニ於テ契約履行地ヲ以テ裁判管轄ト定ムルハ只ニ商事ニ限ルナリ〔法朗西訴  
 訟法第四百二十條參照〕而シテ商事ニ非サル事件ニ對シ僅ニ之ヲ補充スルハ選定住所  
 ノ裁判管轄〔法朗西民法第百一十一條全訴訟法第五十九條參看〕即原被告認諾上ノ裁判管  
 轄アルノミ蓋同國法ニシテ實際完備セサル所以ハ全國法ニ基キテ編成セシ伊太利王國  
 訴訟法ニ於テ已ニ契約ニ關スル裁判管轄ヲ添補シ又白耳義國訴訟法草按ニ於テモ同一  
 ノ明條ヲ起案シアルニ依テ徵スルヲ得ヘシ

而シテ爲替ニ關スル義務ニ關スル訴訟ニハ其裁判管轄ヲ特定シアリ〔本法第五百六十  
 六條參考〕

〔第二解制定ノ沿革〕上ノ第一解第四項ニ述フル如キ規則ハ尙ホ北部獨乙聯邦草案併ニ  
 李滯生國草案ニモ制定シアラサルナリ而シテ本條ニ付キテハ國議院委員僅ニ文字ノ修

正チ加ヘ即被告契約ヲ履行ス可キ地トアルノ原案ヲ(訴訟トナリタル義務ヲ履行スヘキ地)ト更正シ其第一讀會ニ於テハ原案ヲ「被告」ノ二字ヲ刪除シ以テ其理由トナス所ハ即義務ヲ履行スヘキ者ニシテ原告タル場合アルヘク就中契約ノ解除又ハ其不成立ニ關シ起訴スル時ニ於テ然ルヘシト云フニ在リシ後起稿委員ハ現今ノ行文ニ編綴シ第二讀會ニ於テ異論ナク認可セラレタリ

〔第三解、訴訟トナリタル義務〕元來本條現今ノ文章ニ據レハ原案ニモ委員ノ決議ニモ相異スルナリ憾ムラクハ起稿委員ノ如此ク改正シタル事由ヲ詳ニシ能ハサルコトヲ蓋原案及ヒ委員第一讀會ノ議定ニ於テハ契約履行ノ地ヲ主トスルノ趣義ナリシニ反テ現今ノ文章ニ依レハ訴訟トナリタル義務ノ場所ヲ主トスルノ趣義ナリ

本條ニ用ヘタル義務「「ファイルブリ」ナル語ハ本法ニ於テ稀ニ見ル所ニシテ而カモ之ニ「訴訟トナリタル」ノ語ヲ冠セシメアルヲ見テ或ハ各種ノ爭論ニ係ル負擔ノ義ナルヘシト無稽ノ速斷ヲ下スノ悞ナキニ非ラス然レハ決シテ此語ニ付キテ奇異ヲ抱クヘカラサルノミナラス却テ契約ニ關シ此語ヲ用ヘタルハ己ニ上ノ第二解ニ述フル制定沿革上ニ因源シテ自ラ妥當ヲ得クナリ乃「ウエンドシャイド」氏ノ註解ニ云ヘル如ク羅馬法語ノ「オブリガチオ」ナル辭義ニ適スル獨乙語ト知ルヘキナリ是故ニ本條ノ趣義ハ自ラ獨乙普通法ノ

契約ニ關スル裁判管轄ノ律意殊ニ彼ノ契約者ハアル場合ニ於テハ自己ノ管轄裁判所ニ起訴スルヲ得ルノ趣義ニ相適合スル所ト云フヘシ  
又契約ナル語ハ准契約ヲモ合蓄スルナリ是故ニ本條ノ規則ハ本法第三十一條ノ裁判管轄ト相貫聯スヘシ

〔第四解、履行ス可キ地〕其履行ス可キ地トハ何處ナル乎ハ民法ノ定ムル所ニシテ即例ニハ商法第三百二十四條、第三百二十五條、第三百四十二條、第三百四十三條、第三百四十四條ニ於ケル類是ナリ然リ而シテ義務履行ノ場所ハ唯一ナリトスル原則ナルニ因テ契約ノ裁判管轄ハ必ス原被告兩造共ニ全一ナル裁判所ニ屬スルモノトナスヲ得ス例ニハ商法第三百四十二條ノ場合ニ於テ賣主ノ住所ハ即契約履行ノ地ナレハ其代價ハ買主ノ住地ニ於テ受取ルヘキ約束ヲナセル時其代價ニ關スル訴訟ハ買主ノ住所ノ管轄裁判所ニ限り提起スルヲ得ルナリ又商法第三百二十五條ノ金員支拂ニ付キ同條第二項ノ趣義ニ因リ且全第三百四十三條ニ於ケル如ク持參支拂ノ義務ノ成立ヲサル場合ニハ亦前段ニ從ハサルヘカラサルナリ之ニ反シ物品引渡ニ關スル買主ノ訴訟ハ買主自己ノ住所ノ管轄裁判所ニ爲サスシテ賣主ノ住所ニ依ラサルヘカラサルナリ但物品引渡ノ場所適一、代金支拂場所ト同一ナル場合ニ限り其地ハ買主若クハ賣主ノ住所又ハ他ノ場所ナルヲ

問ハス總ヘテ其契約ニ關スル訴訟ハ賣買主雙方ヨリ其地ノ管轄裁判所ニ提起スルヲ得例ヘハ一製造人ハ其物品輸出地ニ於テ引渡ノ約ヲナシ而シテ買主ハ其地ニテ物品引換ニ代金ヲ支拂フヘキ契約ヲ爲シタル場合ニ於ケル如キ是ナリ

交互計算取引ニ付キテハ唯一ナル義務履行地ヲ定メアラサルヲ以テ其差引殘額ニ關シテハ權利者住所ノ裁判所ニ出訴スルヲ得ス(帝國高等商事裁判院判決錄第十七卷參照)然リ而シテ義務履行地ニ付キテハ己ニ民法上確定シタル結果ハ訴訟法ニ於テ之ヲ動カスヘカラサルナリ例ヘハ時効ノ如キ依然義務履行地ノ法律ニ從フヘクシテ必スシモ受訴裁判所ノ法律ニ依ラサルナリ

〔第五解、住所ノ變更〕 契約者ノ住所ヲ以テ義務ノ履行地ト約定シタル以上ハ其對手人タル者契約締結ノ時定メタル住所ニ對シ既得權ヲ獲得セルヲ以テ假令後日ニ於テ住所ヲ變スルニ必ス其既得權ヲ傷ケサルヘシ然レモ當初契約締結ノ時又ハ後日契約者雙方ノ間ニ於テ其場所ハ契約履行ノ際ニ臨ミ定ムヘキコトヲ明諾上若クハ默諾上約定スルヲ得ヘキハ論ヲ俟タス

〔第六解、取消ノ訴訟及ヒ豫審訴訟〕 契約者雙方共ニ同一ナル履行地ヲ有スル時ハ取消ノ訴訟及ヒ豫審訴訟ニ付キテノ裁判管轄ハ己ニ判然ナリト雖モ若シ履行地ヲ相異ニスル時(上第四解參看)ハ其孰レノ裁判所ニ屬スヘキ乎ノ疑團ヲ生スヘシ如此キ疑義ヲ解クニハ反テ適ニ刪除セラレタル「被告」ノ文字アリテ明瞭スヘシ(上ノ第二解參照)而シテ今日ニ在テハ只如此キ場合ニ對シテハ數多ノ裁判管轄アリ故ニ本法第三十五條ニ依リ原告自ラ之ヲ選定セサルヘカラスト云フノ外之ナカルヘシ然レモ舊來ノ原則ナル「原告ハ事件ノ管轄ニ從屬ス」トノ趣義ヲ應用シテ以テ被告カ義務ヲ履行スヘキ地ニ就テ起訴ス可シト云フハ寧ロ當然ナルカ如シ

第三十條 (特別裁判管轄(第八)大市及ヒ小市ニ關スルノ條)

歲市及ヒ週市ヲ除クノ外大市及ヒ小市ニ於テ取結ヒタル商業取引〔大市事件及ヒ小市事件〕ヨリ起ル訴訟ニ付キテハ大市又ハ小市ヲ開ク地ノ裁判所之ヲ管轄ス但被告又ハ其訴訟ヲ爲スノ權アル代理人大市又ハ小市ノ所在地又ハ其管轄裁判所區内ニ滞在スル間ニ起訴スル時ニ限ル

〔第一解、理由ノ説明〕 本條ノ大市及ヒ小市ニ付キ特別裁判管轄ヲ定ムルノ可否ハ北部獨乙聯邦委員會ニ於テ一定セサリシ乃此質問ヲ受ケタル各聯邦中「メックレンブルグ」「シュウイリン」「ブラウンシュウアイヒ」「サククセンウアイマル」ノ各邦ハ此特別裁判管轄ヲ特

定スルノ必要ナシト答ヘリ又字漏生國ニ於テハ其「ベルリン」府併コ「オデル」河邊ノ「フ  
 ランクフルト」府ノ商況ニ因テ頗ル是カ設定ヲ希望セシノミナラス「サックセン」國ハ復  
 タ大市場ノ慣習ヲ維持シ且大市小市事件ニ係ル訴訟ヲ急速ニ結了セシムル爲メニハ此  
 裁判管轄ヲ特定スルノ實ニ必要ナルコトヲ主張シタリ是ニ於テ乎遂ニ北部獨乙聯邦草案  
 ニ於テ第六十二條ヲ第三十條ト改メ以テ之ヲ保存スルニ至レリ抑「商業取引」稱スル語  
 ノ理義ハ商法第二百七十一條以下ニ於テ明瞭ナリトハ雖モ尙ホ本條ニテ一小交通地ニ  
 開ク歳市及ヒ週市ニ於テ取結ヒタル事件ヲ除キタルハ即大市小市ノ義ヲ明カニスル爲  
 メナリ又訴訟ヲ急速ニ結了セシムルニ付キテハ本法第二百三十四條第四百五十九條起  
 訴期限ノ規則併ニ裁判所編成法第二百二條第二休暇ニ關スル規則ニ就テ參看スヘシ  
 【第二解、制定ノ沿革】 北部獨乙聯邦草案字漏生國草案及ヒ本法第一章案ニハ大市小市  
 ノ訴訟ハ大市小市ノ裁判所之ヲ管轄ストアリ又北部獨乙聯邦草案第十五條第四ノ區裁  
 判所ノ管轄ヲ規定シタル項ニ於テ大市小市事件ノ理義ヲ解釋スルコト猶ホ本條ニ於ケル  
 カ如シ尋テ右草案第十五條第四ノ趣義ヲ取テ以テ裁判所編成法ノ舊草案ニ之ヲ規定シ  
 タリ是故ニ字漏生國草案併ニ本法ノ第一章案ニ於テハ即裁判所編成法舊草案ニ參照ナ  
 シテ之ニ推諉シアルナリ而シテ本法第二章案ニ於テ之ヲ改テ歳市週市ヲ除クノ外大

市及ヒ小市ニ於テ取結ヒタル商業取引(大市事件及小市事件)ヨリ起ル訴訟ハ大市又ハ  
 小市ノ地ノ裁判所之ヲ管轄スト修正シタリ後國議院委員會第一讀會ニ於テ被告又ハ  
 其代理人事務取其地ニ滞在スル間云々ノ數語ヲ加ヒ而シテ別ニ之ヲ加フルノ理由ハ説  
 明スルニ至ラザリシ當日内閣代理人ハ輒チ此數語ノ加入ニ同意ヲ表シ且代理人トハ特  
 リ草案第五百二十二條(即本法第五百十九條)ニ掲クルモノ、ミニ限ラサルヘシト解ケリ  
 遂ニ異論ナカリキ  
 更ニ起稿委員ニ於テ本條ノ如ク修正シ第二讀會ニ於テ異議ナク採用セラレタリ  
 【第三解、大市及小市】 裁判所編成法第二十三條ヲ討議スルニ方テ某議員ハ本條ニ掲ク  
 ル大市小市事件ハ從來ノ如ク其訴訟物件ノ價額ヲ問ハス悉ク區裁判所ノ管轄ニ屬セシ  
 ムヘシト主張シタリ然ルニ内閣代理人ハ説明シテ訴訟法第三十條ニ於ケル大市小市ト  
 ハ彼ノ微々タル小市ヲ指スニ非スシテ地方裁判所ノ設置アル交通輻湊ノ地即「ライ  
 プチヒ」「ベルリン」「ブラウンシュヴァイヒ」「オデル」河邊ノ「フランクフルト」ニ開場スル大  
 市ヲ云フノ義ナリト陳ヘタリ爲メニ議員ノ勸議ハ廢滅ニ歸セシナリ而シテ内閣代理人  
 カ「マイン」「河邊ノ「フランクフルト」ヲ舉算セザリシハ蓋遺脱シタルナルヘシ又本條ニ  
 歳市週市ヲ除キタル律意ハ右ノ説明ニ因リ自ラ明瞭ズヘキナリ



〔第四解、商法第二百七十一條以下ニ掲グル商業取引ヲ以テ本條ノ要件トス〕 商法第二百七十一條以下ノ商業取引ノ取結ヲ以テ本條ノ要件ト爲スカ故ニ契約者又ハ其代理人ノ自ラ現在スヘキ小市又ハ大市ニ於テ取結ヒタル〔本條第三解參照〕商法第二百七十七條ノ片務ノ商業取引ニ付キテモ亦本條ヲ適用スヘキナリ必竟被告又ハ其訴訟ヲ爲ス權アル代理人大市又ハ小市ノ地若クハ其所在地ノ管轄裁判所區内ニ滞在シアル間ハ何時モ是ニ喚出狀ヲ送達シ得ヘシ此點ニ關シテハ本法第十八條第一解及ヒ第五解ニ述フル所ヲ參考スヘシ而シテ本條ニ於テハ被告ノ正當ナル代理人ハ其商業取引ニ付キ訴訟ヲ爲ス權利アレハ即足レリ是レ恰モ本法第五十九條ノ規定ニ適合スル所ニシテ假令總代理人ヲラサルトモ單ニ訴訟ヲ爲スノ委任ヲ受ケアル商業上ノ代理人ニ呼出狀ヲ送達シテ其効チ有スルナリ〔商法第四十七條第二項及ヒ第四十九條參照〕○訴訟能力ナキ者ノ法律上代人ハ被告本人ト同一ノ權義アルヘキハ論ナシ〔本法第五十條以下第五百十七條參照〕

第三十一條 (特別裁判管轄第九) 財産管理ニ關スルノ條

財産管理ニ付キ營業主ヨリ管理人ニ對シ又ハ管理人ヨリ營業主ニ對シ爲ス訴訟ニ付キテハ其管理ヲ爲シタル地ノ裁判所之ヲ管轄ス

〔第一解、理由ノ説明〕 本條ハ北部獨乙聯邦草案第六十二條ト同一ナル趣義ニシテ不當ノ費用ヲ省カシメシカ爲メ營業主ヨリ直ニ管理人ニ係ル管理ニ關スル事件及ヒ管理人ヨリ營業主ニ對スル管理ヨリ生スル事件ニ限リテ裁判管轄ト定メタルナリ而シテ「ニュルンベルグ」草案第七條「ハンノフル」草案第二十一條「ウイルトムベルグ」草案第二十條「ハンノフル」國訴訟法第十一條「バデン」國全上第三十二條「ウイルトムベルグ」國全上第四十三條「バイルン」國全第二十七條ノ如キハ爲シタル管理ヨリ生スル訴訟云々」トアリテ汎然ナル文章ナレトモ皆本條ト其主義ヲ異ニスルニ非サルナリ蓋シ爲シタル管理上ニ付キ第三者ヨリ爲ス訴訟ハ其契約地ノ裁判管轄ニ屬スルナレハ必竟本條ノ特別管轄ヲ要セサルヘシ而シテ北部獨乙聯邦草案第六十三條「ニュルンベルグ」草案第七條第二項ニ示ス所ノ管理ヲ指揮シ若クハ監督シタル官廳所在ノ地ヲ管理ヲ爲シタル地ト視做ス」トアル規則ハ本法ニ於テ採用セサリシ何トナレハ如此キ規則ハ敢テ必要ヲ見サルノミナラス又原告ノ不便利ヲ來スノ悞ナキニ非サルヲ以テナリ

〔第二解、制定沿革〕 前項ノ外尙ホ本條ノ他ニ差異スル所ヲ述フヘシ即ち漏生國草案第三十條ニ「他人ノ財産管理ヨリ起レル訴訟云々」トアリ而シテ北部獨乙聯邦草案ノ趣義ニ反シテ已ニ本條第一解ニ略述セル如ク本條ノ趣旨ハ第三者ノ爲ス訴訟ヲモ本條ノ裁

判管轄ニ屬セシムルノ意義ナリ然シ本法第一章案及ヒ其理由説明ハ即本條ノ行文ト同  
一ナリ

本條ハ國議院委員會ニ於テ異議ナク採用セラレタリ

〔第三解、財産管理〕委員及ヒ内閣代理人ノ一致シタル説明ニ依レハ本條ノ財産管理ト  
ハ獨リ契約上定メタルモノ、ミニ限ラス又法律ノ原理ニ本ツクモノ例ヘハ後見ノ如キ  
チモ含蓄スルノ義ナリト即本條ニ汎ク財産ノ管理ト明記スル所ニ於テ其然ルチ解シ得  
ヘシ之ニ反シ管理ノ地ヲ定ムルニ付キテハ本條ハ頗ル明瞭チ缺クモノ、如シ乃説明ニ  
依レハ偶然財産ノ現存セル地ヲ云フニ非スシテ獨立確乎タル管理地ヲ指スト云ヘリ抑  
財産ノ相積集シアル地ニ非サレハ自ラ獨立ナル管理ト云フチ得サルヘキカ故ニ此財産  
管理ハ財産總体ノ管理ト解セサルヘカラサルカ如クナレハ蓋然ラス數多ノ裁判管轄區  
内ニ各種ノ物品即家屋ノ類散在スル場合ニ於テ其各裁判所是カ管轄權チ有スルニ非ス  
シテ唯一箇ノ統理所アル地ヲ指スノ義ノミ即其地ノ裁判所之チ管轄スト云フニ過キサ  
ルナリ又財産管理トハ孛漏生國草案ニ於ケル如ク他人ノ財産チ管理スルノ義ト解シ得  
ヘシ此草案ノ説明ニハ財産ノ管理トハ他人ノ財産チ管理スルノ義ニシテ且所謂ノ好意  
ノ管理モ是ニ包含スト掲ケタリ是即獨乙普通法ニ於ケル好意ノ管理ニ關スル裁判管轄

ト全一ノ趣義ナリ

家屋ノ管理ノ如キ單一箇ノ財産ニ關スル場合モ之ナキニ非サレハ元來管理ト稱スル  
ノ義理タル必ス永續スルノ關係ト管理者ノ獨立トチ切要ノ點トナスヘキナリ例ヘハ上  
長官ト屬僚トニ命シ共ニ地所ニ關スル事業チ施行セシムルカ如キモノハ之チ管理ト爲  
スヘカラス〔本法第二十二條第四解參看〕之ニ反シ一官吏ニ特任シテ地所全体ノ事業チ  
指揮セシムル場合ノ如キ即管理ナルナリ

株式会社ノ頭取又ハ商業上ノ總理代人ノ如キハ之チ管理人ト視做スハ蓋妥當ナルヘシ

〔尙ホ本法第二十三條第四解參照〕

〔第四解、管理ノ地〕本條ニ於テハ固トヨリ管理者ノ住所ハ措テ問ハス獨リ事務上ノ中  
心即事務所々在在チ以テ裁判管轄チ定ムルナリ

〔第五解、管理チ爲シタル地〕爲シタルトアルニ依レハ則管理ハ己ニ終リタリト雖モ其  
事ハ依然繼續スヘキ趣義ナルハ敢テ論チ俟タス

第三十二條〔特別裁判管轄(第十)不法ノ行爲ニ關スルノ條〕

不法ノ行爲ニ原因シタル訴訟ニ付キテハ其行爲地ノ裁判所之チ管轄  
ス

〔第一解、裁判管轄〕 本條ノ裁判管轄ニ付キテハ幾ノト各邦ノ法制例ヘハハノノフル國  
 訴訟法第十二條「ハレン」國全上第三十四條「ウィルテムベルグ」國全上第四十四條「バイル  
 ン」國全上第二十九條ト相符合セリ蓋不法ノ行爲トハ獨リ刑法ニ觸ルヘキ行爲ノミヨ  
 非ス民法上ノ過失殊ニ獨乙普通法ニ於ケル「アキリア」法（他人ノ財產家畜ヲ盜奪セスシテ故意ニ  
 ニ基キタル訴件ニ關スル場合ノ如キヲモ含蓄スルナリ而シテ孛漏生國法律千八百五  
 十四年四月廿四日頒布ノ法律第十一條及ヒ全國訴訟法草案第二十八條）ニ掲クル結婚  
 外ノ妊娠ニ因スル訴訟ニ對シテハ本法中別ニ之ヲ規定セス蓋如此キハ民法ニ依リ其原  
 因中案定シテ以テ裁判管轄ヲ定メサルヘカラサルヘシ

〔第二解、制定ノ沿革〕 本條ノ明文ハ各草案皆同一ナリ第一讀會ニ於テ一委員本法第二  
 十九條、第三十條及ヒ第三十二條ニ付キ被告カ其裁判所管轄區内ニ滯留スル場合若ク  
 ハ其區内ニ財產ヲ所有スル場合ニ限ラントノ趣意ヲ以テ動議ヲ起シタリシト雖モ容易  
 ニ排斥セラレタリ第二讀會ニ於テハ滿場一致ニテ採用シタリ  
 〔第三解、不法ノ行爲（上ノ第一解參看）〕 不法ノ行爲トハ其訴件ハ民法上當ニ成立ツヘキ  
 モノニシテ而カモ契約ニ緣由セスシテ加ヘタル不法ノ損害ヲ云フナリ怠慢モ亦此中ニ  
 包含セシム「サククセン」國民法第千四百八十三條以下「不法ノ行爲ニ原因スル要求」ノ數

條併ニ法朗西民法第千二百八十二條以下ノ犯罪及ヒ准犯罪云々ノ條其他孛漏生國私法  
 第二篇第五章第七十四條及ヒ第七百二十九條以下參照

獨乙普通法及ヒ各聯邦法ニ於テハ被害者カ治罪手續ニ對シ附帶控訴ヲ許シアレハ新定  
 ノ獨乙治罪法ニハ之ヲ採用セス此獨乙治罪法第四百十四條以下及ヒ第四百三十五條以  
 下ハ只刑法上ノ罰金ノ處斷ニ關スルノ規定ヲ掲ケタルモノニシテ而シテ他ノ損害  
 要求ノ請求ニ對シテハ更ニ明定スル所之アラサルナリ（獨乙刑法第百八十八條第二、百  
 三十一條參照）

又不法ノ行爲ニ因スル離婚ノ訴訟ニ付キテハ本條ニ屬スル所ニ非ス（本法第五百六十  
 八條第一項參照）

千八百七十一年六月七日頒布ノ帝國責務條例第一條ニ於テハ汽車鐵道ニ關スル法律上  
 ノ損害賠償ニ付キテ規定シアリテ反テ准犯罪ニ付キテハ更ニ明定シアラス即本條ノ不  
 法ノ行爲ヨリ起ル事件ノ裁判管轄ニ屬セサルモノトス（帝國高等商事裁判院判決錄第  
 十三卷參照）但右條例ノ第二條ニ依レハ又右ニ反對スルモノアルカ如シ

〔結婚外ノ妊娠〕（上ノ第一解參照）「ハレン」國裁判年報ニ依レハ反對ノ判決ヲ爲セシ例ア  
 リ蓋舊時ノ原則ナル「意思ナキノ所爲ハ罪トナラス」トノ理義ニ因リ結婚外ノ妊娠ハ不

法ノ行爲トハ爲サ、ル者以テ例トスルナリ

〔第四解、其行爲地〕 連繫シタル犯罪及ヒ數多ノ裁判管轄區ニ亙ル犯罪ニ付キテノ治罪上ノ問題ヲ本條ニ關シテ爰ニ喚起スヘキ所アリ〔治罪法第七條第十三條參照〕治罪法右二條ニ對スル理由説明〔即其草案ノ第一條及ヒ第七條〕ニ曰犯罪所犯ノ地ニ非サル他ノ裁判管轄區ニ於テ治罪手續ヲ爲スヘキ場合ニ方テハ必ス其所犯地ノ管轄裁判所ニ管轄セシムルヲ當然トスヘシ若シ然ラサレハ則數多ノ裁判管轄ノ撞着ヲ爲スヘシ云々〇必竟止テ得サル場合ニ方テハ本法第三十六條第二ニ適用シテ可ナリ〔本法第三十六條及ヒ第三十七條ニ對スル第一解第三項參看〕

〔第五解、帝國官吏〕 官吏職務上不法ノ行爲ニ原因スル事件ニ付キテノ特別裁判管轄ニ關シテハ本法第十六條ノ第七解ヲ參看スヘシ

第三十三條 〔特別裁判管轄第十一〕反訴ニ關スルノ條

反訴ハ其反對請求、本訴ノ請求ト相牽連シ又ハ本訴ニ對シテ提出シタル辨護ノ方法ト相牽連スル時ハ本案ノ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得  
反對請求ニ關スル訴訟ニ付キテノ裁判所管轄原告ノ認諾ヲ以テモ亦定メ得サル場合ニハ前項ノ規則ヲ適用セス

〔第一解、理由説明〕 即本條ハ反訴ノ裁判管轄ヲ定ムル所ナリ抑、昔日我獨乙國ニ於テ訴訟手續ノ頗ル重難ニシテ且依託裁判ノ制ヲ許サ、リシ時ニ在テハ其何タルヲ問ハス直ニ反訴ノ提出ヲ許可シタルハ蓋妥當ナリシト雖モ世運ノ推遷ニ從テ事物ノ面目ヲ革新セル方今ニ至テハ則然ルヘカラサルナリ加之口頭審理ヲ原則ト爲ス審判ニ於テハ苟モ相牽連セサル數多ノ條件ヲ一々反訴ト認メ以テ同一ノ裁判所ニ漫然提出セシムルハ太タ適切ナリト云フヘカラス畢竟是カ爲メ往々訴訟ノ紛雜ヲ惹キ起シ易キノ危懼ヲ免カレ得サルヘキノミ是ニ於テ平即本法草案ニ於テ反訴ノ請求ハ必ス本訴ノ請求ト相牽連スル場合ト制定シタルハ穩當ナリ然レモ又此草案ハ猶ホ「ニユルンベルグ」草案第十四條「李漏生國草案第三十條」ニ於ケル如ク一般ニ反訴ノ請求必スシモ本訴ノ請求ト相牽連セサルヘカラスト嚴ニ局限スルノ趣旨ニモ非ズ反テ「ハンノフル」國訴訟法草案第二十五條「ウィテムベルグ」國訴訟法第四十九條ノ規則ト同シク抗辯ノ方法ヲ以テ爲シ得ヘキ辨護ニ對スル反訴ハ之ヲ許サ、ルヘカラスト定メタリ是レ被告ニ對シ其抗辯ヲ以テ本訴ノ請求ニ對スル反訴請求ヲ提出シ以テ是カ審判ヲ要請シ得ルノ權利ヲ禁遏スヘカラサルヲ以テノ故ニ訴訟ノ紛雜支離ヲ避クルカ爲メ被告ノ提出セル反對請求ノ全体ニ付キ能ク審理ヲ盡シタル所ノ確定裁判ヲシテ本案ノ裁判ニ供用セシムルヲ要トナスニ職由ス

〔本法第二百九十三條第一項參看〕又本法ハ豫審上ノ附帶訴訟本法第二百五十三條ヲ許シアルニ由リ更ニ反訴ノ裁判管轄ノ範圍ヲ擴張セシメタリ是レ素ト判決ノ確定コ付キ學理上適切ナル規律ト爲ス所ニ據レルモノニシテ即本法第二百五十三條及ヒ第二百九十三條ヲ以テ之ヲ制定シアリ

〔第二解制定ノ沿革〕北部獨乙聯邦草案第六十五條第一項ニ於テ總則ヲ示シテ本訴ノ管轄裁判所ハ反訴ヲ管轄ス

トアリテ其第二項ハ本條ノ第一項ト同一ナリ又李漏生國草案第三十二條第二項ハ後年ノ各草案ト同文ニシテ反テ其第一項ニハ「反訴ノ請求物件ハ本訴若クハ抗辨ノ請求物件ト法律上相牽連スル時ハ本訴ノ管轄裁判所ニ反訴ヲ起スコトヲ得」ト明記セリ又本法ノ第一及ヒ第二ノ草案ニハ

「反對請求ハ本訴ノ抗辨トシテ提起セラレ得又ハ本訴ノ請求ト法律上相牽連スル時本訴ノ管轄裁判所ニ反訴ヲ爲スコトヲ得

反對請求ノ訴訟、原被告ノ認諾ヲ以テモ亦其裁判管轄ヲ定メ得ヘカラサル場合ニハ前項ノ規則ヲ適用セス

トアリシ然リ而シテ國議院委員會ニ於テ修正ナリタルハ只ニ其第一項ニ在リテ即政府

起稿ノ原案ヲ是認シ只其文義ヲ明了ナラシメントノ議決ニテ即當時議定セシ明文ハ「又ハ是ニ對シテ提起シタル抗辨ト相牽連スル時」トノ修正ヲナシ后日起稿委員方今ノ明文ニ更正シタリ當時再三此反訴ノ裁判管轄範圍ヲ更ニ擴張セシメントノ動議起リシモ遂ニ廢案ニ歸セリ

〔第三解、反訴及ヒ牽連〕政府起稿ノ草案ニ於テハ法律上牽連ナル語ヲ必要トナスモ反テ其説明ニ依レハ法律上ノ牽連ヨリ復カニ其範圍廣大ナルノ趣義ナリシ然ルニ國議院委員ハ「法律上」ナル語ヲ削除シテ更ニ事實上牽連スルモノヲ以テ足レルトニ議定シタリ例ヘハ被告カ其本案ヲ直接ニ抗爭スル爲メニスルト又ハ其只ニ到底ノ歸着ヲ期スルノミノ爲メニスルトニ論ナグ原因ヲ異ニスル事實ヲ擧ケテ義務相殺ノ抗辨ヲ爲シアル場合ニ方テハ即被告ハ本訴ノ請求全部又ハ訴求額ヲ超過スル部分ニ付キテ反訴ヲ提起スルヲ得ヘシ何トナレハ被告ノ反訴ハ彼ノ抗辨即被告ノ抗辨方法ト相牽連シアルヲ以テナリ然レモ此抗辨方法ト相牽連スルモノハ必ス程式上許スヘキモノナルヘクシテ且徒ニ反訴ノ端緒ヲ開カンカ爲メ陳述スルノミニ止ル場合ナルト恰モ純然タル身分ニ關スル訴訟ニ對シ義務相殺ノ抗辨ヲ提出スルカ如キ不適合ナルトハ之ヲ許ササルナリ然リト雖モ法律上ノ牽連ノ之アルト否トハ本法第三百三十六條第三百三十八條ニ依レハ必

ス無用ナリト云フニ非ス

「ハイルン」國訴訟法第三十一條ニ於テハ「反訴」ニ對スル反訴ハ之ヲ許サストノ明文アリ而シテ本法ハ只本訴ニ對スル反訴ヲ許スノ趣義ナレハ即自ラ反訴ニ對スル反訴ヲ許サル意タルハ顯然ナリ

而シテ反訴ノ趣義及ヒ其價額算定ニ付キテハ本法第五條第六解ヲ參看シ反訴提起ノ時限ニ付キテハ本法第二百五十一條ヲ參看シ又一部判決ニ關シテハ本法第二百七十三條婚姻件ニ關シテハ本法第五百七十四條第五百七十五條第五百七十六條第五百七十八條第五百八十七條後見事件ニ關シテハ本法第六百八條ヲ參看スヘシ(例ハ書面訴訟ニハ反訴ヲ許サルカ如シ)又訴訟代人ニ關シテハ本法第七十七條ヲ參照スヘシ

又反訴ニ關スル區裁判所ノ權限ニ付キテハ本法第四百六十七條地方裁判所商事局ノ權限ニ付キテハ裁判所編制法第百三條第百四條及ヒ本法第二條第二解ヲ參照スヘシ

〔第四解、起訴裁判所ノ管轄違〕本訴ヲ審理スル裁判所ニシテ反訴ニ對シ管轄ヲ有セサル時ハ本法第四十條第二項ノ趣義ヲ具有スル場合ニ限リ本條第二項ニ照シ反訴ノ管轄ヲ取消シ得ルナリ必竟反诉被告ハ如此キ反訴ノ管轄違ニ付キ防訴ノ抗辨ヲ以テ主張セサルヘカラス(本法第二十九條第二百四十七條第四百六十五條參照)然レモ特定專屬

ノ裁判管轄アル時ハ裁判官ハ職權ヲ以テ管轄違ノ言渡ヲ爲シ得ヘシ(本法第二十五條乃至第二十七條ニ對スル第五解及ヒ第二條第二解參照)

第三十四條 (特別裁判管轄(第十二)代人ニ關スルノ條)

手数料及ヒ立換金ニ關シ訴訟代人、附添人、送達受取人、及ヒ裁判所執行吏ノ起ス訴訟ニ付キテハ本案ノ管轄裁判所之ヲ管轄ス

〔第一解、理由ノ説明〕本條ハ本章ニ於テ特リ事實上ノ牽連事件ニ對スル裁判管轄ヲ定ムル唯一ノ法條ナリ而シテ訴訟代人又ハ裁判所執行吏ノ手数料及ヒ立換金ニ關スル訴訟ハ之ヲ本案裁判所ニ爲スヘキ趣義ヲ示シ此本案裁判所トハ初審ヲ爲シタル裁判所ヲ云フノ義ニテ其上級ノ裁判所ニ於テ生セル手数料、立換金ニ付キテモ悉ク其初審ノ裁判所ニ爲スヘキナリ然ルモ「ライン」部地ノ法律ニ依レハ此上級ノ裁判所ニ於テ生セルモノヲモ初審ノ裁判所ニ起訴スルニ付キテ議論アリ蓋本條ノ裁判管轄ハ字漏生國ノ實行スル所(千八百三十三年七月二十四日ノ宣令第八條)ニ適合ス而シテ「ヨールンベルグ」草案第十八條字漏生國訴訟法草案第三十二條「サククセン」國全上草案第八十八條「ハイルン」國全上第二十八條(且過額ノ前金受授ニ付キ代理人其他ニ對スル起訴モ此裁判管轄ニ屬セシメアリテ)ニ既定シアル所トス但本條ニ於テ新クニ添加シタル所ハ送達受取

人ヲ代人等ト同一ナル趣義ニ於テ裁判スルコト爲シタルモノ是ナリ然リ而シテ本條明文ノ汎乎タル所ニ依レハ則商事裁判所ニ於テ生セル手數料、立替金ニ付キテハ必ス之ヲ商事裁判所〔方今ハ地方裁判所商事局〕ニ起訴スルノ趣義ナルヲ論ナカルヘシ本條ノ裁判管轄アルカ爲メ代人ニシテ適、外邦人ノ訴訟事件ノ委任ヲ受クルモ手數料ノ前受取ヲ要セス恬然依頼ニ應シ易カラシムルヲ得且又若シ手數料立替金ニ關スル訴訟ハ別段ノ裁判所ニ起訴スヘキモノト爲ス時ハ其受訴裁判所ハ先ツ其訴訟ニ係ル手數料立替金ノ實額果シテ幾何ナル乎ヲ審定スルノ勞ヲ免カレスト雖モ今ヤ本條ニ依レハ如此キ煩雜ヲ除却シ得ルナリ〔下ノ第三解參看〕

「ハンノフル」國訴訟法第十三條「バイルン」國全上第三十三條第三項「オルデンボルグ」國全上第二十一條「バデン」國全上第四十五條ニ於テハ如此キ本案牽連ノ裁判管轄ヲ一ノ總則トナシテ而シテ凡ッ本案ノ經過中ニ生セシ附從ノ事件ハ其何タルヲ問ハス悉ク本案ノ管轄裁判所ノ管轄ト定メアリ然レモ本法草案ハ右ノ如ク一切ノ附從件ヲ一括網羅スルヲ爲サスシテ或ル牽連事件ノミコ應用ス例ヘハ參加訴訟〔本法第六十一條、第六百九十條〕預アル證書ヲ押留スル代人ニ對スル審理〔第二百二十六條〕不從順ナル證人ニ對スル審理〔第二百五十二條〕再審ノ訴願〔第五百四十七條〕豫審上附帶ノ訴訟〔第二百五十

三條〕ノ如キ即是ナリ〔本法第七百七十八條第二項モ亦是ニ屬スヘシ〕

〔第二解制定ノ沿革〕本條ノ明文ハ各草案共ニ同一ナリ第一讀會ニ於テハ異議ナク認可シ第二讀會ニ於テ本條ノ行文ヲ左ノ如ク修正セントノ動議アリシ

本案訴訟ヲ起シタル裁判所之ヲ管轄ス

然ルニ内閣代理員ハ必竟此法律ノ精神ニ於テ本條ニ掲グル訴訟ハ其初審ノ裁判所ニ提出セシムルノ趣義ナリ〔上ノ第一解參照〕是故ニ上等地方裁判所若クハ帝國裁判所ニ此訴訟ヲ提起シ得サルハ固トヨリ贅辨ヲ俟タスシテ明瞭ナルヘシト答辨シタリ遂ニ動議ハ消滅シテ本條ハ輒チ採用セラレケン

〔第三解訴訟及ヒ手數料ノ確定〕訴訟ナル語ノ慣用上ヨリシテ裁判所トハ即本案ノ初審ヲ爲シタル裁判所ナリト解シ〔上ノ第二解參照〕參加訴訟等ヲモ包含シアルモノト論斷スルハ固トヨリ當然ノ論理法ナリ又第一解ノ理由説明ニ於テ裁判所ハ先ツ豫メ其手數料又ハ立換金ノ實額ヲ算定セサルヘカラサルノ勞煩ヲ免カルヘシト説ケル所ハ即本法第九十八條第二項ニ據テ自ラ明瞭ナルヘシ然リ而シテ本條ハ爲メニ各聯邦法ト多クハ相牴觸スルヲ以テ更ニ實施法ニ於テ此點ニ付キ本法第九十八條ニ關スルモノト共ニ一ノ規則ヲ特置セサルヘカラサルナリ

又此起訴權利者ニ付キテハ本法第七十二條以下第八十六條、第六十條以下第一百五十二條以下第六百七十四條以下及ヒ裁判所編制法第一百五十五條ヲ參看スヘシ

第三十五條 (原告ノ選定權ニ關スルノ條)

原告ハ管轄裁判所數多アル時其一ヲ選定ス可シ

(理由併ニ制定ノ沿革) 本法第一及ヒ第二ノ草案ニハ(本法第十二條第一解ノ趣旨ニ關セズ)別ニ理由説明ヲ付記シアラス反テ學漏生國草案第三十四條ハ本條ト同明文ニシテ而カモ之ニ説明ヲ付シテ曰數多ノ普通裁判管轄若クハ數多ノ特別裁判管轄相撞着シ又ハ普通裁判管轄ト特別裁判管轄ト相撞着スル場合ニ論ナシ原告ハ之ヲ選定スルノ權アリト又數多ノ裁判管轄アル中ニハ例ヘハ不動物件ニ關スル裁判管轄ノ如キ特定專屬ノ管轄ニ據ラサルヘカラサルモノモ之アルヘシ蓋選定權ハ一ノ裁判管轄ニ就テ訴訟ヲ提起シ以テ訴訟物件拘束ニ付キテノ原則ニ從ヒ之ヲ實行スト云フヘシ又原被告兩造互ニ各々起訴ノ權利ヲ有スル場合(互角ノ起訴權)ニ於テ一方ノ甲者數多アル裁判管轄ノ中ニ就キ其一ノ裁判所ニ起訴セル后ニ於テ他ノ乙者亦他ノ管轄裁判所ニ起訴シテ其先ニ起訴シアル事件ニ付キ甲者ヲ對手取り得ヘカラサル所以モ亦右ノ原則ヨリ生スルナリ(「ハンノフル」國訴訟法第十七條「バテン」國第五十四條、第五十五條「ウエルテムヘ

ル」國第五十八條參照)

蓋本法第二百二十五條第一ニ參照スレバ則前項ニ說明スル所ノ選定權ノ消滅及ヒ先訴權ノ効能ニ付キテノ解釋ハ別ニ間然スル所之アラズ以テ本條ニ適用シテ可ナル所ナリ」特定專屬ノ裁判管轄又ハ原被告ノ認諾管轄ノ爲メ選定權ノ排斥ニ付キテハ本法第十二條ノ第六解併ニ第三十八條及ヒ第三十九條ニ對スル第七解ヲ參照スヘシ

此他復タ本法第三十六條ニ因テ選定權ヲ制限スルニ至レリ蓋原告ニ選定權ヲ許スヲ以テ裁判管轄ノ等級ニ關スル規則ハ今ヤ方ニ蛇足ニ屬セリ(「バテン」國訴訟法第五十三條參照)

第三十六條 (判然セサル裁判管轄ニ關スルノ條)

裁判所ノ管轄ヲ定ムルコトハ左ノ場合ニ於テ每級上級ナル裁判所之ヲ爲ス

- 一 當然權限ヲ有スル裁判所アル場合ニ於テ實際上又ハ法律上裁判官ノ職務執行ニ故障アル時
- 二 數多ノ裁判所ノ管轄區域ニ關シ訴訟ニ付キテ管轄スヘキ裁判所ノ分明ナラサル時



- 三 各種ノ裁判所ノ普通裁判管轄ヲ有スル數多ノ人共同訴訟人トシテ出訴セラル可キ場合ニ於テ其訴訟ニ付キ共通ナル特別裁判管轄ノ定マラサル時
- 四 物件上裁判管轄ニ依テ起ス可キ訴訟ニシテ其物件數多ノ裁判所管轄區ニ散在スル時
- 五 同一ノ訴訟ニ付キ各種ノ裁判所各其管轄ナリトノ言渡確定シタル時
- 六 數多ノ裁判所ノ中一ノ裁判所ニテ管轄スヘキ訴訟ニ付キ舉テ管轄ニ非ストノ言渡確定シタル時

第三十七條〔全上〕

裁判所ノ管轄ヲ定ムル爲メノ請願ハ豫メ口頭審理ヲ要セスシテ判定スルコトヲ得

管轄裁判所ヲ定ムル決議ニ對シテハ上訴スルコトヲ得ス

〔第一解、本文二條ノ理由説明〕 本文二條ハ即每級上級ナル裁判所ニ於テ裁判所ノ管轄ヲ判定スル場合ヲ示ス法條(法朗西訴訟法第一卷第二章第十九條裁判官ニ付キテノ規

則參照)ニシテ且此場合ニ方テ審判スヘキ方法ヲ力メテ短簡便宜ニ規定シタル所ナリ  
字漏生國法律(裁判通則第一篇第二章第百三十一條以下併ニ全國訴訟法草案第三十九條以下)ニ於テハ此ノ場合ニ付キ所謂ノ例外裁判管轄ナルモノアリテ之ニ據ラシムルナリ  
相當ノ權限ヲ有スル裁判所ニ於テ法律上裁判官職權ヲ執行シ難キ場合(第三十六條第一ノ場合)ニ關シテハ本法第四十一條ニ於テ之ヲ概括ス而シテ實際上裁判官職權ヲ執行シ難キトハ例ヘハ本法第二百二十二條ノ場合ノ如キヲ云フナリ

本條ノ第二ハ字漏生國草案第三十九條第四併ニ北部獨乙聯邦草案第六十九條第二ニ於ケル各種ノ裁判所ノ管轄區ノ境界ニ付キ爭論ノ起リタル場合ニ方テ本件訴訟ハ何レノ裁判所ノ管轄ニ屬スヘキ乎不明ナル時ニ制限スル趣義ニ反對シテ即一般ニ各種ノ裁判所ノ管轄區劃ノ判然ナラサルニ因リ管轄裁判所ノ分明ナラサル以上ハ悉ク本條ニ依ラシムルナリ是ニ於テ本條ノ第二ニハ凡ヘテ境界上ニ關係ヲ有スル場合ノ爲メ裁判所ノ管轄判然ナラサル時ノ各件ヲ包容シアルナリ例ヘハ住所ニ關スル裁判管轄ニ依リ起訴セントスルニ方テ其被告ノ住宅ハ各裁判所管轄區境界線ニ跨リアル時又町村ノ經理ハ町村理事廳ト及ヒ市尹ノ住宅トニ於テ爲サレアル場合其理事廳地及ヒ住宅地ハ各別ナル裁判所管轄區内ニ散在スル時ノ類即然リ加之本條第二ノ明文ニ依レハ不法ノ行爲

〔本法第三十二條〕テ各種ノ裁判所管轄區内ニ犯シタル事件ノ併發スル時ニモ亦此條ニ依ルヘキナリ

本條第三及ヒ第四ノ場合ニ付キテハ即チ「ハンノフル」國訴訟法第五條、第八條「バデン」國全上第二十三條以下第二十八條、ウエルテムベルグ「國全上第二十九條、第四十五條」「バイロン」國全上第二十一條「ハンノフル」國全上草案第十四條、第十七條ニ於テハ原告チシテ數多ノ裁判管轄相撞着セル例ニ倣ヒ一ノ裁判所ヲ選定セシムルナリ蓋本條ニ於テ選定權ヲ許ス主義ニ反對スル論旨ノ尤モ痛論ズル要旨ハ即抑、原告ニ選定權ヲ與フルハ偏ニ原告ニ利便ヲ授ケ反テ被告チシテ不便ノ域ニ陷ラシメ殊ニアル場合ニ於テハ其訴件チ裁判スルニ最モ適當ナリト自ラ思惟スル裁判所ハ果シテ事實適當ナルヤ否チ期シ難シ况ヤ又獨乙各邦其民法チ異ニスルチ以テ原告ノ選定權ハ遂ニ耐フヘカラサルノ慘狀ヲ醸生シ或ハ共同被告アル場合ノ如キ原告ハ被告ノ一人ト詭術チ以テ密謀シ以テ他ノ被告チ危懼ノ地ニ陷ラシムル如キノ弊ナキチ保シ難キコ於テオヤト云フニ在リ〔北部獨乙聯邦委員會議筆記錄參照〕然リ而シテ本條ノ場合ニ付キ選定權ヲ允サル本法草案ノ趣義ト同一ナルモノハ即チ「字漏生國法律法朗西國法律」オルデンボッルグ「國訴訟法第二十九條、第三十條」「ブラウンシュウアイヒ」國全上第二十九條、第四十條「ハンノフル」國全

上第十八條字漏生國全上草案第三十九條北部獨乙聯邦草案第六十九條トス

「バデン」國訴訟法第二十七條ニ於テハ、不動物件ニ對シ數多ノ裁判管轄相撞着スル場合〔本條ノ第四〕ニハ、即チ其訴訟チ各裁判所管轄區中其不動物件ニ賦課スル租稅ノ最多額ヲ徵收スル地ノ裁判所チシテ管轄セシムルナリ然レモ此法律ニ依ルモ原告カ先ツ豫メ租稅徵收簿ヲ親閱シテ之ヲ抜粹スル爲メ時日ヲ要スルコト猶ホ本法ノ審理ヲ受クルト更ニ異ナルコトナク殊ニ原告ノ先ツ要スル出費モ亦若干チ免カレサルナリ且此「バデン」國ノ法律ニ依レハ即租稅徵收簿ナルモノハ往々土地ニ賦課スル租稅ト其家屋ニ課スルモノトチ合算シアル所併ニ其徵收スル額ハ時々變換シテ更ニ一定セサル所及ヒ獨乙各邦其地租ノ法例チ異ニスルチ以テ到底平等歸一ノ法制ト爲シ能ハサル所ニ於テ缺點チ見ルヘキナリ

而シテ本條ノ場合ハ時トシテ上級ナル裁判所ノ審理中初テ發生スルコト固トヨリ之アルナリ己ニ北部獨乙聯邦草案第七十二條字漏生國訴訟法草案第四十二條ノ如キハ之ニ付キテ明記シアルナリ  
管轄裁判所チ定ムヘキハ即

〔甲〕本條ノ第一ノ場合ニ於テハ其一級上級ナル裁判所

(乙)本條ノ他ノ場合ニ於テハ數裁判所ヲ管轄スル上級ノ裁判所ナリ  
 乃裁判所ガ各上地方裁判所管轄區ニ關スル場合ニ付キテハ帝國裁判所之ヲ定ムルノ  
 義ナリ而シテ其例外ニ付キテハ訴訟法實施法第九條ニ明示セリ若シ一聯邦ニ於テ數多  
 ノ上等地方裁判所ヲ設置シ且此邦ニテ裁判所編制法ノ實施法第八條ニ照シ別ニ民事訴  
 訟ニ對スル最上等裁判所ヲ設立シアル時ハ則此最上等裁判所ハ其聯邦ニ屬スル各上等  
 地方裁判所ノ管轄ニ付キ之ヲ定ムルナリ之ニ反シ各聯邦ノ裁判所間ノ管轄ニ付キテハ  
 帝國裁判所之ヲ定ム是レ即帝國裁判所ハ全國ノ各裁判所ニ對シ最高等ノ首位ヲ占ムル  
 ニ由ル(尙ホ下ノ第四解參看)

又本文第三十七條ニ掲クル此請願ノ判定ニ對シテハ上訴ヲ允サ、ル所ハ「ハノノフル」  
 國訴訟法第十八條第三項「バイルン」國全上第三十五條第五項「ハノノフル」國全上草案  
 第二十六條第四項ニ於テモ亦同一ニシテ殊ニ抗告ヲ許サスト明記シアリ  
 (第二解、本文二條ノ制定ノ沿革)上ノ第壹解第二項ニ述フル所ノ李滯生國草案ト差異  
 スル本條ノ第二ニ除ク、外ハ本文第三十六條ハ各草案悉ク同文ニテ而シテ國議院委員  
 會ニ於テ別段ニ異論ナク採用セラレシ適ニ第一讀會第二讀會ニテ本文第三十六條ノ第  
 五ニ付キ確定裁判ノ原則ニ抵觸スルモノトノ動議アリシモ竟ニ廢棄セラレケリ

蓋右委員ノ引例セル場合ハ到底ヨウヂヤシツツナ五角訴訟ノ場合ニ關スルニ過キスシテ是即本法第三  
 十五條ノ第一解ニ於ケル如ク先訴權ヲ以テ調理シ得ヘキ所ノモノナリ内閣代理員ハ如  
 此キ場合ハ固トヨリ本項ノ如キ裁判管轄認可ノ争ニ付キテ定ムル規則ニ屬セムヘキ  
 モノニ非スト答辨シタリ蓋妥當ノ説明ナリ

而シテ北部獨乙聯邦草案ニ於テハ本文第三十六條第五ノ場合ヲ説明シテ「積極的ノ裁  
 判管轄ノ争」又其第六ノ場合ニハ「消極的ノ裁判管轄ノ争」ナル語ヲ用ヒアルナリ  
 又本文第三十七條ハ即北部獨乙聯邦草案ニテ其第七十條乃至第七十二條ニ該當シ其他  
 ノ各草案ハ本文ト同文ナリ然リ而シテ北部獨乙聯邦草案第七十條ニハ判定スヘキ裁判  
 所ト及ヒ本案ヲ移送スヘキ裁判所トニ付キテ明示シ又其第七十一條ハ本法第三十七條  
 ニ同シトハ雖モ只對手人ヲ審理スルコトナク判定スルノ點ニ付キテハ反對シアリテ且本  
 文第三十六條ノ第一、第二、第五、第六ノ場合ニ於テ訴訟費用ノ賦課ヲ禁止シアリ而シテ  
 其第七十二條ニ於テハ第六十九條乃至第七十一條ハ上級ナル裁判所ニ於ケル場合ニモ  
 適用スルノ義ヲ示シアルナリ

本文第三十七條ノ第一讀會ニ方テ「之ヲ判定スル前對手人ヲ審理ス可シ」トノ數字ヲ增添  
 セントノ動議アリシ然レモ實際如此キ審理ハ全ク無用ニ屬スヘキ場合多シト斷定シ得

ルノ理由ヨリ此勳議ハ廢斥セラレタリ而シテ第三讀會ニ於テハ異議ナク認可セラレタリ  
〔第三解管轄裁判所ヲ定ム(第二十六條)〕 本法明文及ヒ其理由説明ニ於テモ必竟上級ノ  
裁判所ハ何レノ裁判所ニ審判ヲ命スヘキ乎ヲ明言シアラス然レモ今北部獨乙聯邦草案  
第七十條第二項ニ掲クル

第一ノ場合ニ於テハ同一ナル上級ノ裁判所管轄區ニ屬スル他ノ裁判所第二乃至第四  
ノ場合ニハ各裁判所中ノ一又第五第六ノ場合ニハ管轄裁判所ト視做スヘキ裁判所  
ヲシテ裁判セシム可シ

トアル明文ハ蓋實際適當ナルカ如クナリ

〔第四解每級上級ナル裁判所〕 本文第三十六條ニ對スル第一解第七項乃至第八項ニ於  
テ未ダ論及セサル所ハ即數多ノ最上等裁判所設立シアル時其各裁判所ハ某件ノ管轄ヲ  
相可認スル場合ノ如キ即第三等<sup>破棄</sup>裁判權限ニ至テ尙ホ初テ管轄權ノ紛争ヲ生スル  
コアルヘシ必竟帝國裁判所ハ聯邦ノ最上等裁判所ノ上級ナリト云フヲ得サレモ尙ホ如  
此キ紛争ニ付キ判定スヘキノ責任ヲ有セシムルナリ(訴訟法實施法第七條第二項參照)  
然リ而シテ裁判所編制法實施法第八條第二項ニ依レハ帝國法律ヲ以テ帝國裁判所ノ專  
屬ト定メアル訴件ハ各最上等裁判所ノ權外ノモノト爲シアルノミナラス又訴訟法實施

法第九條ニ於テモ之ニ類スル特別法ヲ掲ケ以テ聯邦ニ最上等裁判所ノ設置ノ有無ニ拘  
ハラス凡ソ各聯邦ノ裁判所間ニ起ル職權ノ紛争ニ付キテハ特ニ帝國裁判所之ヲ判定ス  
ルコトニ定メタリ是故ニ帝國裁判所ハ管轄ヲ否認スル件ニ付キテモ亦其管轄裁判所ヲ示  
定スヘキナリ

〔第五解法律上裁判官職權執行ノ故障(第二十六條第一)〕 本項ノ場合ハ先ツ單獨裁判官  
制ナル區裁判所ニ在リト豫定セサルヘカラス(本法第二條第一解參照)然リ而シテ若シ  
區裁判所ニシテ數員ノ裁判官アリテ(裁判所編制法第二十二條第二項參照)其一名獨リ  
裁判ニ干與シ難キ乎又ハ回避スル時(本法第四十一條、第四十二條參照)ハ本法第四十五  
條第二項併ニ全條ノ第五解ニ據リ區裁判所ニ於テ必ス之ヲ回避スヘク地方裁判所ハ爲  
メニ他ノ區裁判所ニ其裁判ヲ命スヘキナリ(上ノ第三解參看)獨リ異々ヘキハ即「バデン」  
國訴訟法第四十二條ニ於ケル如ク區裁判官ニ對スル訴訟又ハ區裁判官カ其管轄區内ノ  
人民ニ對スル訴訟ノ爲メ別ニ裁判管轄ヲ定メス爲メニ本法ニ於テハ如此キ場合ニ恒ニ  
煩雜ナル回避忌避ノ手續ヲ要セサルヘカラサル所是ナリ

合議裁判所ノ各組合員カ回避スル時爲メニ裁判ニ定員ヲ缺ク場合ニ限り職權ノ執行ニ  
故障ヲ生シタリト云フヘシ他ノ場合ニハ他ノ裁判官ヲ以テ其故障アル者ヲ補充セシム

又若シ一最上等裁判所舉テ回避シ或ハ帝國裁判所ニ於テ舉テ回避シタル時ハ如何トノ問題ニ付キテハ本法第四十五條第四解ヲ參照スヘシ

〔第六解、裁判所ノ管轄區域第三十六條第二〕（尙ホ上ノ第一解第三項及ヒ第三十二條ノ第三解參照）物件其物ノ境界ノ判然シ難キモノ例ヘハ保有チ争フ地所ノ甲裁判所管轄區内ニ在ル乎若クハ乙區内ニ在ル乎又ハ甲乙ノ二區ニ跨ル乎ノ如キ訴件モ亦本條ニ屬スルナリ而シテ理由説明ハ單ニ場所ノ境界ニ付キテノ争件ノミ取テ本條第二ノ唯一ナル訴訟物件ニ非スト明言ス

〔第七解、共同被告（第二十六條第三）〕（尙ホ上ノ第一解第四項參照）如何ナル場合ニ於テ共同被告クルコアル乎コ付キテハ本法第五十六條以下ヲ參照スヘシ蓋共同被告ニ係ルニハ其一人必ス内國ニ普通裁判管轄チ有スルモノナラサルヘカラス而シテ果シテ然ル件ハ外國ニ住所チ定ムル外國人ヲモ内國ノ裁判所ニ招キ得ルナリ若シ被告ハ悉ク外國ニ住居シ且内國ニ於テ更ニ特別裁判管轄チ有スルコトナキ時ハ固トヨリ内國裁判所ニ出訴スヘキ機會ハ到底之ナカルヘシ（本法第十二條第五解乃至第七解參照）又物上ノ訴訟ニ關シテハ宜ク次ノ解ヲ參照スヘシ

蓋本項ニ於テ各被告カ同一ナル普通裁判管轄チ有セサル場合ノミニ止メスシテ又共通ノ特別裁判管轄チ有セサル場合ヲ以テ要件トナシタルハ特異ト云フヘシ而シテ此法文ニ依テ案スルコト此特別裁判ノ專屬タルヘキモノハ假令本法第二十五條ノ特別裁判管轄ニ非サルモ又上級ナル裁判所之アルモ尙ホ其裁判所ハ管轄チ定ムル請願ヲ受理シ得サル場合ノモノヲ以テ專屬ノ特別管轄トスル意義ナルコト見ルヘキナリ抑本法ハ固ト内國民ニ對スルモノナルカ故ニ必ス内國ニ特別裁判管轄チ有セサルヘカラサルコトハ敢テ論チ俟タス然レモ本條ノ規則ハ如此ク内國ニ制限スト雖モ又内國ノ共同訴訟人ハ左ノ場合ノ如キコト方テハ更ニ其便宜チ享受スルノ感覺チ生セサルナリ即契約ニ關スル裁判管轄ハ「コイニヒスベルグ」府ニ屬シ其共同被告等ハ「ウィルテムベルグ」國又ハ「バデン」國ニ各住所チ定メアリ而シテ原告モ亦被告等ト其住所地チ同フス此場合ニ於テ原告若シ被告等ノ共同裁判管轄ニ就テ起訴セント欲スル時ハ則「コイニヒスベルグ」府ニ赴テ出訴セサルヘカラサルヘシ

而シテ本條ニ付キテモ亦裁判所カ場所ノ管轄違ナリトシテ敢テ遽カニ職權ヲ以テ管轄違チ言渡シ能ハサル趣義ナル所チ輕々ニ看過スヘカラス乃數人ノ共同訴訟人ニ對スル訴訟チ其一人ノ住所ニ就テ提起シ而シテ他ノ被告等ハ管轄違ノ申立チ爲サス本案ノ口頭審理チ始メタル時ハ則其裁判所ハ本法第三十九條ニ准シ其共同被告全般ニ對スル管

轄權ヲ生スルナリ

各被告カ獨乙各聯邦ニ散居スル場合ニ對シテハ本條第四解ニ掲ケタル本法實施法第九條ヲ適用スヘキナリ

〔第八解物上ノ裁判管轄第三十六條第一〕（上ノ第一解第四項第五項併ニ第六解參照）本條明文ニ依レハ只ニ各個ノ物件ニ付キテ云フ義コテ例ヘハ所有權ヲ爭フ家屋ハ甲乙ノ管轄區ニ跨リアル場合ノ如キ是ナリ然ルニ本條制定ノ沿革ニ依レハ「バデン」國訴訟法第二十七條及ヒ第二十八條ニ反對スルノ義ヲ舉述シ（上ノ第一解第五項參照）且「バデン」國ニテ規定シアル場合ニ對シテモ亦我カ此三十六條ヲ應用シテ可ナリト説明ス必竟「バデン」國ノ第二十八條ニ於テモ復々恰カモ數多ノ物件ニ對スル訴訟ニ關スル場合ヲ規定スル所ニテ如此キ訴訟ニモ本法第三十六條、第三十七條ヲ適用セサルヘカラス即本條第四ニ於テ物件ト記載セルハ訴訟物件ノ義ト同一ナリト解スルヲ要ス此解釋ハ蓋法律ニ於テ別ニ明示スル所ナキヲ以テ殊ニ必要ナリトス而シテ若シ一ノ書入質ノ證書ニ依リ同一ナル被告ニ對シ起シタル訴訟ハ數多ノ裁判所管轄區ニ跨カル數多ノ地所ニ關シアル時原告ハ其訴訟ヲ一個ノ裁判所ニ合併セント努ムヘシ其之ヲ爲サンニハ即本條第四ニ依ルヲ好手段トナスヘシ然レモ訴訟ノ原由同一ナラス且數多ノ各被告ノ地所ニ

係ル場合ニハ則本法第二十五條及ヒ第三十六條第六及ヒ第二百三十二條ヲ參酌シ以テ物上ノ訴訟ハ特定專屬ノ管轄ニ據ル原則ニ基キ必ス各不動物件ノ管轄裁判所ニ別段ニ出訴セサルヘカラサルナリ

之ニ反シ純然タル地所ノ附屬物ナルモノハ更ニ物件ニ關スル即物上ノ裁判管轄ニ影響ヲ及サス例ヘハ水車ノ所有ヲ爭フニ方テ之ニ屬スル水渠カ他ノ裁判所管轄ニ跨リアルモ敢テ關係セサルナリ是レ從タル物ハ其主タル物ノ裁判管轄ニ屬スル原則ニ出ルナリ

〔第九解積極的ノ管轄ノ爭及ヒ消極的ノ管轄ノ爭第三十六條第五第六〕（上ノ第二解參照）此規則ハ判決ノ確定能力ヲ侵ス所ナキニ非スシテ而カモ實際出訴シテ權利ヲ伸暢セントスルコ付キテ敢テ必要ヲ見サルノ規則ナリ抑本條第六ノ場合ニ於テハ必ス數多ノ裁判所カ管轄違ナリト言渡シタル中ノ一ニ對シ原告ハ之ヲ不當ナリト明示セサルヘカラサルナリ必竟上級ノ裁判所ハ意見ヲ説明スルニ非スシテ只ニ其管轄違ノ紛爭ヲ解クニ過キサルナレハ若シ原告カ起訴セン裁判所ハ悉ク管轄違ナリトセハ則消極的管轄ノ爭ハ更ニ之アルナシト云フ可キノミ

〔第十解豫メ口頭審理ヲ爲サス〕（上訴スルヲ得ス）（第三十七條）（上ノ第一解及ヒ第二解參照）既ニ本條ニ明示スル如ク一ノ請願ヲ所分スルノミニシテ爭訟ヲ裁判スルニ非ス只

司法行政ニ屬スル處置ニ過キサルナリ故ニ訴訟上ノ審理手續ニ據ラス即上訴ヲ允サス又對手人ノ審理ヲモ要トナサシメサルナリ然レモ固トヨリ此請願人ハ自ラ裁判所ニ向テ必要ナル事實及ヒ證據ヲ具備シテ陳供セサルヘカラサルハ論ナシ反テ裁判所ハ判決ヲ與フルコト非サルヲ以テ未ダ本案ニ付キテ訴訟物件拘束(本法第二百二十五條)ヲ爲スコ至ラサル間ハ乃自己ノ意思ニ自任シ得ヘシ

第三節 裁判管轄ニ關スル訴訟人ノ認諾

第三十八條 (裁判管轄ノ認諾ニ關スルノ條)

當然ナル裁判管轄ヲ有セサル初審ノ裁判所ハ訴訟人ノ明諾若クハ默諾ニ因テ管轄權ヲ有ス

第三十九條 (同上)

被告管轄違ノ申立ヲ爲サスシテ本案ノ口頭審理ヲ始メタル時ハ默諾スルモノト看做ス

〔第一解、制定ノ沿革〕 本條ノ趣旨ニ付キテハ各草案皆ナ一様ナリ而シテ北部獨乙聯邦草案第七十六條第一項ニハ

裁判所ノ認允ヲ請フヲ要セス

トノ數字ヲ添加シ(下ノ第二解參照)且其第七十七條ニ於テ認諾訴訟ハ區裁判所ニ爲スヘキモノヲ地方裁判所ニ地方裁判所ニ爲スヘキモノヲ區裁判所ニ爲スヲ允ス趣旨ヲ明示シアルナリ(次ノ第二解第三解參照)

本法草案ニハ原ト商事裁判所ニ對スル認諾ニ付キテモ規定シアリタリ然ルニ國議院委員ハ即本文第三十八條ノ第二項ヲ削テ以テ之ヲ刪除シタルナリ而シテ其成績ニ付キテ見レハ更ニ理由ナクシテ之ヲ刪除シタルモノ、如クナリト雖モ當時ノ議定ニ依レハ國議院ハ早晚商事裁判所ノ設置ヲ議定スヘシ其場合ニ至レハ自ラ此第二項ノ趣旨ニ付キ別ニ定ムル所アルヘシト云フニ在リキ然レモ未ダ商事裁判所ヲ特置スルニ至ラサルナリ本文第三十八條ノ第一讀會第二讀會ノ二回共地方裁判所ニ二百「マルク」ヲ超過セサル訴件ヲ提起スルノ認諾ハ職權ヲ以テ却下スルノ權ヲ付與セントノ動議アリシモ遂ニ廢棄セラレタリ(次ノ第二解參看)

〔第二解、理由ノ説明〕 本法ハ凡ソ新定ノ訴訟法併ニ其草案ノ主義ト相符合シ且特ニ本節ヲ設ケ裁判管轄ノ認諾ノ規則ヲ掲ケタルモ僅ニ二三ノ條項ニ過キサレハ一節ノ甚々簡短ナルヲ覺フ(「ハンノフル」國訴訟法第十九條「オルゲンボッルグ」國全上第二十七條「バデン」國全上第四十六條以下「ヴェルテムベルグ」國全上第五十九條乃至第六十四條「バイ

ルノ國全上第三十八條、第三十九條、字漏生國全上第三十四條乃至第三十八條、ハソノ  
ル「國草案第二十七條第二十八條、北部獨乙聯邦草案第七十六條乃至第七十八條參照」  
其管轄ヲ認諾セラレタル裁判所ハ認諾訴訟人ニ對シテ拒絕スルノ權ヲ有セサルナリ然ル  
ニ獨乙普通法「バデン」國訴訟法第四十六條「ザクセン」國全上草案第七十一條ニテハ此  
拒絕權ヲ許シアリト雖モ何タル理由ニ出ルヤ未ダ判然ナラス

又「ハンノフル」國訴訟法ニ對スル說明中ニ叙述スル所ヲ見レハ即曰凡ソ裁判官タル者ノ  
職權ヲ執行スルニ一定ノ規則ニ據ラヌシテ任意ニ趨舍シ得ルモノトナセハ則敢テ妥當  
ナラスト云フヲ得ヘキナリ然レモ必竟司法上ノ法制ニシテ民事訴訟ニ對スル重要ナル  
主眼ハ素ト原告ノ便益ヲ計リ法權保護ノ周到及ヒ迅速ヲ期スルニ在レハ即訴訟人ノ  
合意ヲ裁判管轄ニ付キテモ允許スルト爲スルハ自ラ右ノ主眼ニモ適當スヘキナリ然ル  
ニ反對論者ハ果シテ如此ナラシムルハ必ス恒ニ各裁判所ニ訴訟ヲ増加セシムルノ悞  
アリト主張スレモ是眞ノ空論ニ過キサルノミ實際ハ假令之ヲ允スル訴訟人ハ必ス復タ  
本來其管轄ヲ有スル裁判所ニ起訴スルナ例トスヘシ何トナレハ裁判所管轄ニ關スル制  
度ハ固トヨリ各局地ノ情狀ニ基ツキ訴訟人ノ便益ヲ期シテ施設セラル、モノナルカ故  
ナリ但畢竟訴訟人ハ須ク必ス熟考シテ其合意ヲ諾否スヘク且訴訟人ハ通例是カ爲メ禍

厄ニ陥リ易クシテ而シテ互ニ合意ヲ求ムルノ間ニ於テ己ニ禍機ノ伏シアルコト往々ニシ  
テ然ル所ノ實例ニ顧慮スヘシ又其事件ノ當局者ハ假令身自ラ其害厄ヲ荷フコト非サルモ  
必ス訴訟本人ノ爲メ右ノ危厄ヲ小心熟慮セサルヘカラサル所ハ特ニ爰ニ一言セサルヘ  
カラサルナリ云々

前項ニ反對論者ノ危惧スル所ハ空理ニ過キスト論斷セルハ實際ニ徴シテ其當ヲ得タリ  
乃「ライン」部地及ヒ「ハンノフル」州ノ實例ヲ視ルニ管轄認諾ノ訴訟ニシテ元來地方裁判  
所ニ起訴スヘキ事件ヲ區裁判所ニ提出スル者多シ然レモ爲メニ各裁判所ノ訴訟増加チ  
來スノ弊ハ更ニ之アラサルナリ  
初審ヨリ上級ナル裁判所ニ對スル管轄認諾ヲ許スコトハ字漏生國裁判通則第一篇第十二  
章第二十條ノ附録第百條併ニ「バデン」國訴訟法第四十七條ニ明示シアレモ實ハ甚シキ  
必要ヲ見サルナリ

又法朗西法ニ在ル選定住所ニ付キテノ規則ハ敢テ要トナサス何トナレハ法朗西法ノ裁  
判執行ニ關スル住所ノ選定ニ付キテノ規則ハ本文第三十八條ノ汎義ナル規則中ニ包含  
セシメ得レハナリ殊ニ又此規則タルヤ「字漏生國草案第二十八條」ハ明示シアレモ凡  
ソ認諾ノ裁判管轄ハ必ス特定專屬ナルヘキ趣義ニ背馳セサルモノナレハナリ



又管轄認諾ハ補助參加人及ヒ告知參加人ヲモ拘束スルコト固トヨリ論ヲ俟タス必竟此者等ハ即其訴訟ニ於テハ隨伴人ニシテ未タ其訴件ニ付キ獨立シテ自ラ一定ノ裁判所ヲ審判ヲ受クヘキ權利ヲ有セサルナリ

本來相當ナラサル裁判所カ訴訟人ノ認諾ニ因テ之ヲ管轄シ得ルハ本文第三十八條ニ照シ即訴訟人ノ明諾又ハ默諾ニ在ルナリ然ルニ本文第三十九條ヲ以テ一種ノ默諾ヲ示セリ是レ他ノ訴訟法併ニ草案「ハンノフル」國訴訟法第十九條「バデン」國全上第四十九條「ウィルテムベルク」國全上第五十九條「バイルン」國全上第三十九條「普魯士」國全上第四十九條「プロシヤ」國全上第五十九條「北獨逸」國全上第七十六條ニ於テモ亦專ラ採用セラレアル所トス被告ニシテ管轄違ノ裁判所ニ於テ管轄違ノ申立ヲ爲サス本案ノ口頭審理ヲ始メタル時ハ則被告ハ任意ニ其裁判所ノ管轄ニ甘從セルモノト看做スナリ之ニ反シ本法草案ニ於テハ若シ被告カ口頭審理ノ期日ニ出廷セサルヲ以テ「本法第二百九十六條第二項」管轄ヲ默諾シタルモノトノ規則ヲ定メス是レ其缺席シタル事實ニ依テ管轄違ノ裁判所ノ管轄ニ服從シタルトハ論斷スヘカラサルノミナラス反テ缺席シタル被告ハ自ラ其管轄違ノ裁判所カ職權ヲ以テ管轄違ノ言渡ヲ爲スヘシト期スルヲ得レハナリ然リト雖モ管轄違ノ申立ヲ爲サス徒ラニ缺席スルハ被告ノ不利ヲ生

スルコトアルヘシ而シテ裁判所ハ其管轄違ナルコトモ拘ハラズ缺席ノ被告ニ對シ裁判所ノ召喚ニ應セサル不從順ナリト言渡タル時ハ被告ハ必ス相當ノ期限内ニ故障又ハ控訴、本法第四百七十四條)ヲ爲シ以テ管轄違ヲ理由トシ其言渡ノ毀却ヲ請求スヘシ然ラサレハ假令管轄違ノ裁判所ノ言渡ナリト雖モ確定スルニ至ルヘケレハナリ(「普魯士」國訴訟法草案ニ對スル理由說明參看)而シテ此點ニ付キテハ己ニ「ニールンベルク」草案第二十條「普魯士」國草案第三十六條「バイルン」國訴訟法第三十九條ニ各明文ヲ掲テ示シアレハ實ハ敢テ明記スルヲ要セサルモノ、如シ(下ノ第八解參考)

〔第三解、管轄違ノ裁判所(第二十八條)〕此管轄違トハ即場所ノ管轄ト訴訟物件價額上ノ管轄トノ別ヲ立テス孰レニテモ管轄ニ非サルヲ指ス(本法第四十條第一解參照)獨リ本法第四十條第二項ニ於テハ一種ノ制限ヲ掲ケタルナリ而シテ外國人ト雖モ內國人ト同一ナル條件ニ服從スル以上ハ獨乙國ノ裁判所ニ對シ管轄ノ認諾ヲ爲シテ出訴スルヲ得ヘシ(本法第十二條第四解併ニ第十三條第五解第七解參看)

〔第四解、初審ノ裁判所(第二十八條)〕本條ノ明文ニ初審ノ裁判所トアルニ依レハ即初審ヨリ上級ナル裁判所ニ對スル認諾ヲ允サ、ル趣旨ハ自ラ明瞭ナリ(上ノ第二解第五項參看)然リ而シテ本法第八百五十一條下ニ至テ論究スヘキ元來裁判所ハ仲裁裁判官タ

ルヲ得ル乎ノ疑問ニ付キテハ即此條ノ趣義ヲ以テハ未タ答解シ了セリトハ云フヘカラ  
ス必竟管轄ノ認諾ハ只ニ官立裁判所ノ職權ニ付キテ定メラレタルモノニシテ反テ仲裁  
裁判ニ付キテノ契約ハ司法權外ノ事項ト云フヘキノミ〔本法第二百四十七條第二參考〕

〔第五解、管轄權ヲ有ス〕 管轄認諾ニ付キテハ敢テ豫メ原被告カ認諾シタル裁判所ノ認  
可ヲ請フヲ要セサルノ趣義ヲ見ルヘシ〔上ノ第二解第二項乃至第四項參考〕而シテ此點  
ハ亦前解ニ引例セル仲裁裁判ノ選定ニハ適中セス何トナレハ則何人ト雖モ仲裁々判人  
タラサルヘカラサルノ義務ナケレハナリ〔本法第八百五十七條、第八百五十九條參照〕又  
認諾セラレタル裁判所ハ本法第四十條第二項ノ場合ヲ除クノ外管轄認諾上ノ訴訟ヲ場  
所ノ管轄違又ハ訴訟物件上管轄違ヲ理由トシテ却下スルヲ得ス何トナレハ本文第二十  
九條ニ准シ被告ノ服從ニ因リテ管轄シ得ルカ故ナリ

而シテ己ニ効力ヲ生シタル管轄認諾ハ附隨訴訟ニモ効力ヲ及ホシ〔上ノ第二解第七項  
參照〕又上等地方裁判所及ヒ帝國裁判所ノ管轄ニ付キテモ其効力ヲ有ス〔本法第四十條  
第一解參考〕

〔第六解、認諾〔第三十八條第三十九條〕上ノ第二解第八項參看〕 認諾トハ即總ヘテ言語上  
又ハ行爲上ニ於テ成立ツタル契約ノ民法上ノ主義ニ適合シテ有効ナルモノヲ概括ス即

契約ヲ果行スルニ堪フル能力者ノ締結スル所ナレハ可ナリ然リ而シテ本文第三十九條  
ニ示スハ單ニ一ノ類例ヲ舉ケタルモノニシテ〔上ノ第二解第二項參照〕尙ホ各場合ニ臨  
ミ雙方ニ於テ相認諾スル景況ニ就テ求ムレハ默諾ノ種類モ亦些少ナラサルヘシ〔商法  
第三百二十四條第二項參照〕乃契約上住所ノ選定ノ如キハ一ノ好例トス〔上ノ第二解第  
六項參看〕蓋此住所ノ選定ニ付キテノ律意ハ只ニ本法實施法第十五條第五ニ於テ訴訟  
書類ノ送達ニ關シテノミ明掲シアレハ法朗西法律ノ行ハル、ライン〕部地ニ於テハア  
ル裁判所管轄區内ニ於テ選定住所ノ契約ヲナスキハ亦其裁判所ノ權限ニモ服從セサル  
ヘカラサルノ制規ナルナリ

本法ニ於テ認諾ハ書面上契約スルヲ要スルノ明文ナシト雖モ已ニ默諾ヲ以テスラ足レ  
リトナスモノナレハ敢テ文書上ノ契約ヲ要セサルニ由ルナリ  
又認諾ノ爲メ要スヘキ條件ニ付キテハ本法第四十條第一項併ニ其註解ヲ參照スヘシ  
〔第七解、管轄ノ特定專屬〕 元來裁判管轄ノ特定專屬ハ特リ法律ヲ以テ定メアル場合ニ  
限ルモノナルカ故ニ私ニ契約シタル認諾ノ裁判管轄ニハ專屬ト云フモノ之アルヘカラ  
サルナリ〔本法第十二條第二解第六參考〕即本文第三十八條乃至第四十條ニ於テ是ニ  
付キ明示セサル由縁ナリ然リト雖モ已ニ上ノ第一解第六項ニ述フル如ク特定專屬ノ管

轉トシテ相認諾シタルキハ之ヲ認可セサルヘカラス何トナレハ此場合ハ即本法第三十五條ヲ以テ許シアル裁判所選定權ヲ自ラ拋棄シテ本文第三十八條ノ訴訟人ニ許サレアル任意認諾ノ權利ヲ實行スル所ナレハナリ而シテ此專屬ノ約定ハ亦明諾又ハ默諾ヲ以テ爲シ得ヘシ但住所ノ選定(上ノ第六解)ニ至テハ汎然之ヲ許スモノト云フヲ得ス

〔第八解、口頭審理ヲ始メタル時(第二十九條)〕 本法第二百四十七條、第四百六十五條ニ照セハ則本案ノ口頭審理ヲ始メタル以上ハ方ニ申立ツヘキ管轄違ノ抗辨ハ自ラ之ヲ拋棄シタルモノトスルナリ乃原告カ起訴セル裁判所ノ管轄ニ默認服從スルモノト云フヘシ然レモ區裁判所ニ於テハ若シ訴訟物件ノ管轄違ナル時ハ其趣旨ヲ被告ニ告示スヘキナリ〔本法第四百六十五條第二項參照〕

本條第二解ニ約述スル喚出ニ應セサル缺席ノ結果ニ付キテハ更ニ本法第二百九十六條下ノ解釋ニ於テ詳論スルヲ要ス

〔第九解、商事局〕 裁判所編制法第百條乃至第百十條ニ於テ此管轄認諾ニ付キ更ニ明示スル所之ナク又本法第三十八條ノ第二項ヲ刪除シタルニ因リ(上ノ第一解參照) 地方裁判所中ノ他ノ局ニ於ケルカ如ク商事局ニ對スル管轄ノ認諾ハ之ヲ允サ、ルノ結果ヲ成セルカ如シ然リト雖モ實ハ商事々件ニ付キテ管轄ノ認諾ハ敢テ禁止セラレタルコト非ス

殊ニ本法第四十條第二項ハ商事々件ニ適中セサル所ニシテ商事ニ關スル管轄ノ認諾ニ付テハ獨リ本文第三十八條第三十九條ニ依ルヘキナリ然リ而シテ裁判所編制法第百一條ニ依レハ則認諾セラレタル地方裁判所ニ商事局ノ設置アル時全裁判所ニ提出セル認諾上ノ商事訴訟ハ其商事局ニ於テ裁判スヘキノ義ナルヲ見ルヘシ

### 第四十條 (同上)

裁判管轄ニ付キテノ認諾ハ一定ノ權利上關係及ヒ其關係ヨリ生スル訴訟ニ關スル時ニ非サレハ法律上其効力ヲ有セス

認諾ハ其訴訟財產權ニ非サル請求ニ關スル時又ハ其訴訟ニ付キ特定專屬ノ裁判管轄ト定メアル時ハ之ヲ許サス

〔第一解、理由ノ説明〕 本條ハ裁判管轄ノ認諾ニ對シ一定ノ制限ヲ設ケタル所ニシテ即公然ノ秩序ヲ保維スル爲メ特ニ法律ヲ以テ定メアル官制上ニ濫ニ變動ヲ爲サシメサラシテ企期セルナリ乃財產權ニ屬セサル訴訟例ヘハ婚姻事件又ハ身分ニ關スル事件ノ如キ其他特定專屬ノ裁判管轄ヲ設定スルモノ例ヘハ偏ニ物權上ノ裁判管轄ニ專屬スヘキ請求ノ如キハ訴訟人ノ認諾ヲ以テ之ヲ變更スルヲ許サス加之普通裁判管轄ト雖モ復タ訴訟人ヲシテ任意杜撰ニ變更シ易カラシメサルカ爲メ即一定ノ權利上關係又ハ其關係

ヨリ生スル訴訟ニ限リテ相認諾シテ管轄ヲ定ムルヲ許シタルナリ然リト雖モ還々之ヲ制限セサル他ノ數規則アリ即裁判所ノ訴訟物件上管轄ニ關スル規則就中訴訟物件ノ價額ニ關スル規則ノ如キニ至テハ必ス認諾上變更セシムヘカラスト爲スノ須要ハ蓋立法者ニ於テ發見セサルヲ以テ敢テ之ヲ制限セサルナリ殊ニ況ヤ本節ニ於テ素ト訴訟人ノ任意認諾ノ範圍ヲ擴張セントシテ彼ノ管轄ノ區劃ニ付キテノ規定ニ併發スル所ノ不利及ヒ困難ヲ減殺スルカ爲メ適種々ノ方法ヲ設定スル所ナルオヤ畢竟立法者ニシテ此管轄區劃ヲ定ムルニ方テ果ソ訴訟人ノ便利ヲ企圖セントスレハ則必スアル放任ハ免カレ能ハサルヘシ實ニ訴訟人ノ爲メ管轄ノ區劃ニシテ不便利ヲ感セシムル所僅々ニ止ラサレハナリ例ヘハ試ニ裁判所ノ管轄ハ其訴訟物件ノ價額ニ依テ差異アル規則ニ付キテ論セシコ今訴訟人カ三百「マルク」未滿ノ價額ノ訴件ト雖モ頗ル至難至要ナル事件ナルニ因リ地方裁判所ニ起訴シテ其審判ヲ請ヒ且如此クシテ後來上訴、控訴、上告ヲ爲スノ捷徑ヲ開ントスル時此訴訟人ニ對シ敢テ之ヲ禁遏セサルヘカラサル理由ノ確乎タルモノ果シテ何クニ存スル乎本法第三十八條、第二十九條ニ對スル第五解參照或ハ區裁判所ノ管轄外ノ訴件ナレトモ容易ナル事件ナルカ故ニ費用ノ冗贅ヲ省キ代言人出訴ノ制限ヲ避ケ殊ニ直ニ裁判執行ヲ爲シ得ルノ便益ヲ計畫シテ以テ區裁判所ニ起訴シ其事件

ノ速ニ結了セシコトヲ期スルニ於テ之ヲ不是ナリトスルノ理由何レニ在ル乎然リ而シテ此認諾上ノ訴訟ニシテ尙ホ訴訟物件ノ價額ニ從テ其管轄ヲ定ムルモノトナスルハ則裁判所ハ每件其訴訟物件ノ價額ヲ調査シ且之ヲ確定スルノ責任ヲ負フヘク從テ其權限ニ關スル紛争ヲ惹起スヘク往々ナル結果ヲ生スヘク殊ニ又本法第四百六十七條ニ掲ケル場合ノ如キ不整理ヲ續發スヘキナリ例ヘハ區裁判所ハ如此ク每件其訴訟物件ノ價額ヲ調査セサルヘカラサルノ責アリトナセハ則訴訟人ノ一方ハ適區裁判所ノ權限外ノ訴訟ナルヲ寄貨トシ既ニ審理ヲ開キタル後ニ至テ尙ホ其管轄違ヲ申立テ徒ラニ審判ヲ取消スノ點手段ヲ施シ得ヘカラシ是ニ於テ平即本法草按ニ於テ第三十八條第一項ノ明文ヲ以テ是カ總則ヲ示シ只ニ場所ノ管轄違アル裁判所カ認諾上管轄權ヲ有スルノミナラス又區裁判所ノ管轄ニ屬スヘキ訴訟ヲ地方裁判所ニ地方裁判所ニ屬スヘキ訴訟ヲ區裁判所ニ提起シ得ルモノト定メタルナリ

〔此理由説明ノ原文ニハ末段ニ於テ尙ホ解説セシ所アリシモ本法第四百六十五條第二項ノ明文アルヲ以テ遂ニ蛇足ニ歸ス〕

〔第二解、制定ノ沿革〕 各草按同文ナリ獨リ北部獨乙聯邦草按第七十六條第三項及ヒ第七十八條ニ於テ行文上ノ差異アリ而シテ國議院委員會ニ於テ第一第二ノ兩讀會共ニ異

議ナク通過シタリ

〔第二解、一定ノ權利上關係〕 是レ全般ノ權利上關係ト云フノ反對ニシテ即或人總ヘテ權利上關係ニ付キ爭論ヲ生スレハ即必ス某裁判所ノ認諾管轄ニ就テ裁判ヲ乞フヘキ義務アリト云フヘカラス之ニ反シ既ニ成立アル權利上關係ニ因テ起レル全般ノ爭論ニ付キテハ一定ノ裁判所ニ就テ審判ヲ請フヲ得ルノ義理トス〔本法第十九條第十三解參看〕蓋此趣義中ニハ之ヲ各邦ノ從來ノ法律ニ比スルニ甚ク貴重スヘキ範圍擴張ノ自ラ包含スル所アリ乃各邦從來ノ法制ニ據レハ例ヘハ保險證券ノ規約書ニ保險者ト被保人トノ間ニ生スル一切ノ爭論ニ付キテハ該券發行地ノ裁判所ニ於テ裁判ヲ請クヘシト前約シアルモ敢テ之ヲ守遵セスシテ妨ケナカリシ〔帝國高等商事裁判院判決錄第四十卷參照〕然ルニ本法ニ於テハ全ク此契約ニ准據シ發行地ノ裁判所ニ起訴シ得ルニ至レリ獨リ保險證券ニ限ラス他ノ各契約ニモ應用シ得ヘキナリ

本條ニ於テ注意スヘキハ即第一項ニハ「法律上其効力ヲ有セス」ト記シ第二項ニハ之ヲ許サス」ト明示シタル所ニ在リ乃第一項ニ於テハ別ニ禁止スルノ趣義ニ非スシテ反テ只其被告ヲシテ管轄違ノ抗辯ヲ提起シ得ル權利ヲ有セシメタル意ヲ示セルノミ畢竟此認諾ノ契約ハ被告ヲ拘束スル能力ナキヲ以テナリ而シテ若シ被告カ其抗辯ヲ提出セザル時ハ本法第三十九條ニ依テ所分セラルヘキナリ

之ニ反シ第二項ニ於テハ即公法ニ基ツキタル禁止法ノ趣義ヲ含有ス〔上ノ第一解初頭參照〕

〔第四解、財産權上ノ請求〕 財産權ニ屬スル請求ト云フ語ノ理義ニ付キテハ宜ク本法第二十一條第四解ヲ參照スヘシ

〔第五解、特定專屬ノ裁判管轄〕 此語ノ理義及ヒ其場合ニ付キテハ復タ本法第十二條第二解及ヒ第六解ヲ參照スヘシ而シテ帝國營業條例第百八條ニ關シテハ帝國高等商事裁判院ニ於テ營業條例ノ規則ハ訴訟人ノ認諾ニ因リ專屬ト爲シ得サルトノ裁判ヲ認可シタル例アリ〔同院判決錄第二十一卷參照〕

商事ニ關スル認諾ニ付キテハ前ノ第三十九條第九解ヲ參看スヘシ

〔第六解、之ヲ許サス〕 乃本法ニ於テ制限スル所ヲ除クノ外ハ渾ヘテ認諾上裁判管轄ヲ定ムルヲ許ス例ヘハ本法第二百三十一條ニ因スル訴訟ノ如キニモ尙ホ之ヲ爲シ得ルナリ〔己ニ上ノ第三解ニ於テ本條第一項ト第二項トノ文法ノ異ナルヲ説キ且第二項ハ禁止法ノ趣義ナルヲ敘述シタリ此他尙ホ本法第二十五條乃至第二十七條ニ對スル第五解ニ於テ縷述セル由縁ヲ以テ若シ本條第二項ノ場合アルニ際シテハ則原被告〔又原告自ラ〕

初審ノ裁判所ニ於テ又ハ上訴シテ其管轄違ナルコトヲ主張シ得ヘシ然レモ其判決確定後ハ無効ノ判決ナリト云フヲ理由トシテ不服ヲ唱フルヲ得ス又初審ノ裁判所ハ職權ヲ以テ其事件ヲ却下スルコトヲ得ルナリ(本法第二條第三解參看)

第四節 裁判所職員ノ回避及ヒ忌避

第四十一條 (回避即裁判權ノ能力ヲ失フニ關スルノ條)

裁判官ハ左ノ場合ニ於テ其事務施行ヲ法律上禁止セララル

- 一 裁判官自ラ原被告トナル事件又ハ原被告ノ一方ト共同權利者共同義務者又ハ償還義務者タルノ關係ヲ有スル事件ナル時
- 二 婚姻ノ存否ニ拘ハラヌ裁判官ノ婦ノ事件ナル時
- 三 裁判官其直系ノ親族姻族又ハ養子ノ關係アル人又ハ傍系ノ第三等マテノ親族又ハ第二等マテノ姻族ノ事件ナル時但姻族ノ關係ヲ生シタル婚姻ヲ解キタル場合ト雖モ亦同シ
- 四 裁判官原被告一方ノ訴訟代人又ハ附添人ト爲リ或ハ爲リタリシ事件又ハ其法律上代人トシテ出廷スヘキ權利ヲ有シ或ハ有シタリシ事件ナル時

五 裁判官證人又ハ鑑定人トシテ審問ヲ受ケタル事件ナル時

六 裁判官原裁判又ハ仲裁裁判手續ニ於テ不服ヲ受タル裁判言渡

ノ際參與シタル事件ナル時但受命裁判官又ハ受託裁判官ノ行務ニ關スル場合ハ此限ニ在ラス

(第一解、第四節ニ對スル理由ノ説明) 抑本節ニ列載スル裁判所職員ノ回避及ヒ忌避ニ關スル規則ハ他ノ新定訴訟法併ニ其草案ト酷類ノ趣義ニシテ而シテ舊來ノ現行法ノ原則ヲ著シク再寫シ出シタルモノナリ故ニ只其細則ニ付キテ特ニ理由ヲ説明スレハ即足ルヘシ(法朝西訴訟法第四十四條乃至第四十七條、第三百七十八條乃至第三百九十六條「ハンノフル」國同上第二十一條乃至第二十七條「ブラウンシュヴァイヒ」國同上第四十六條乃至第五十六條「オルデンボッルグ」國同上第三十三條乃至第四十三條「バデン」國同上第六十六條乃至第九十一條「ウニルテムベルグ」國同上第六十七條乃至第七十八條「バイルン」國同上第四十條乃至第五十二條「亭漏生國」同上草案第六十四條乃至第八十條「ハンノフル」國同上草案第三十二條乃至第四十四條「北部獨乙聯邦」同上第二十二條乃至第三十五條參看)

從來ノ現行法ニ於テ己ニ然ルカ如ク本法草案ニ於テモ復テ裁判官カ某事件ニ付キ自ラ

職權ノ執行ヲ回避スル理由ト及ヒ原告カ裁判官ヲ忌避スル權利ヲ有シ得ル理由トノ區別ヲ立テタリ乃裁判官自ラ回避スル理由トハ司法權上裁判官ニ命シテ避ケシムヘキモノニテ即本條ニ所謂ノ裁判官ハ左ノ場合ニ於テ職務施行ヲ法律上禁止セラルトアル各場合はレナリ

蓋回避ハ原告ノ一方カ先ツ忌避ノ申立ヲ爲シタルト否トニ關係(次ノ第四十二條參照)ヲ有セス即回避ハ法律ノ力ニ依テ避クル所ナルカ故ニ敢テ訴訟經過ノ時期如何ニ依ルヲ要セサルナリ本法第四十三條及ヒ第四十四條參看)法律上當ニ回避スヘキ裁判官ノ參與シテ爲シタル判決ニ對シテハ上訴シ(本法第五百十三條第二參照)又ハ裁判取消ノ再審願ヲ爲シ得(本法第五百四十二條第二參照)之ニ全ク異ナルハ即忌避ノ理由是レナリ抑忌避ハ偏ニ原告ノ有スル權利ニシテ即裁判官ニシテ偏頗ノ所爲ヲ行フノ嫌アルニ由テ其裁判官ヲ忌避スルモノトス然レモ裁判官自ラ職權ニ於テ其事件ヲ回避スルノ權利ハ忌避申立ノ爲メ妨ケラル、コトハ之ナキナリ(本法第四十二條第四十八條參看)加之忌避ハ原告自ラ其權利ヲ拋棄シ得ルモノナレハ乃此申立ヲ爲スニハ必ス訴訟進行中一定ノ時期ニ於テセサルコトハ遂ニ申立ノ効ヲ失フヘシ(本法第四十三條及ヒ第四十四條第二項參照)又裁判官適當ノ時ニ回避シ且忌避ノ申立ヲ認可セラレタル時

ニ限リ其裁判官ノ參與シタル判決ニ對シ不服ヲ唱フルヲ得ルナリ(本法第五百十三條第三參照)

[新定ノ上告ニ關スル規則ハ本法第五百十三條第三ニ依リ裁判取消ノ訴願ニマテ及ホセリ]  
〔第二解、本條制定ノ沿革〕 既ニ字漏生國訴訟法草案第四十條ニ於テ本條ト同一ナル明文ヲ掲ケアリ而シテ他ノ各草案ハ皆之ニ模倣シタルナリ北部獨乙聯邦草案按第二十三條ニテハ本條ノ第三乃至第六ヲ以テ偏ニ忌避ノ事由トナシ且此第六ニ掲ケタル但以下ノ末段ハ之ヲ明示セス

國議院委員會ノ第一讀會ニ於テ一議員ハ本條第三ニ更ニ一項ヲ加ヒ「裁判官自ラ權利者義務者又ハ財産ノ相續人ナリト看做シ得ヘキ人ノ事件ナル時」ト增加セント發議シ又他ノ一議員ハ本條第五ヲ「裁判官證人又ハ鑑定人トシテ指名セラレタル事件」ニシテ其審判ノ未タ決定セサル間」ト云フ趣義ニ修正セントノ動議ヲ提出シタリ

内閣代理員ハ右ノ第二ノ修正動議ニ對シ動議ノ如クスルモ或ハ訴訟ノ稽留ヲ招クノ恐アリト駁シ又第一ノ動議ニ對シテハ是レ實際ニ甚タ定メ難キ所ニシテ時トシテハ裁判官自ラ如此キ關係ナルコトヲ知ラサル場合モ之ナシト云フヘカラスト駁シタリ

遂ニ兩動議共ニ排斥セラレタリ又第二讀會ニ於テ本條ニ列載セル回避ノ事由ト爲スモ  
ノヲ以テ悉ク單ニ忌避ノ事由ト限定シ且本條第五ノ趣義ハ審判ヲ稽留セシメシカ爲メ  
指名サレタル裁判官ヲ審問シタル場合ヲ包含セサルコト改メントノ動議アリシモ復タ  
廢棄セラレタリ

〔第三解、回避〕 本條ハ只ニ裁判官ノ各訴訟事件ニ對スル關係ニ付キテ云フ所ナリ而シ  
テ概シテ裁判官ニ任セラルヘキ能力ニ關スル一般ノ通則ハ即裁判所編制法第一條以下  
ニ揭示ス語次偶、玆ニ一言スヘキハ裁判所編制法中裁判官ニハ男子ニ限り任用スヘキ  
ノ規則未明記セサルノ一事ナリ尙ホ裁判所編制法第三十一條第八十四條ヲ參考スヘシ  
〔商事裁判官〕 本節ニ於テハ單ニ裁判官及ヒ裁判所書記ノミニ限リテ規定シアルニ然カ  
モ裁判所編制法第百十六條ニ依レハ裁判官ト稱スル者ノ中ニ商事裁判官ヲモ含蓄セシ  
メアルナリ

本條明文ニ法律上禁止セララル所ハ從來ノ法文ニテハ裁判官ノ無能力ト稱シタリ  
又北部獨乙聯邦草案按第三十二條「バイエルン」國訴訟法第四十條ニ於テハ更ニ不妥當ナル  
所ノ職權施行ノ故障ト記載シアルナリ蓋新定法ノ編制ニ方テ裁判官ノ無能力ニ併發ス  
ル無能力ノ裁判官カ參與シタル裁判上職務施行ノ無効ナルコトノ意義ヲ明示セシメシカ

爲メ適當ナル術語ヲ索メテ現今ノ禁止セララルノ字ヲ用ヒタルモノ、如シ「バイエルン」國  
訴訟法第四十一條第三項「バイエルン」國同上第六十八條第一項參看」本法ノ文字上ニ就テ論  
スレハ則他ノ邦法ノ如ク回避シテ其事件ヲ辭退シタル裁判官ハ其件ニ關スル一切ノ所  
分ニ參與スルヲ得ストアル明文ナキノミナラス回避シタル事件ト雖モ其敢テ遷延ニ付  
スヘカラサル處置ハ之ヲ執行スルヲ得セシメタリ（然シ尙ホ宜ク本法第四十七條第三  
解ヲ參照スヘシ）而シテ裁判取消ノ訴願モ亦法律上禁止セラレタル裁判官カ其裁判ニ  
參與シタル場合ニ限レルハ即本法第五百四十二條第二ニ於テ明カナリ（本法第五  
十六條參看）蓋法律上回避ノ法制ト回避セル裁判官ノ職務施行トハ取消ノ訴願ヲ許ス  
法律ノ之アル所ニ照スモ之ヲ相併行セシメントスルハ至難ナルヘシ畢竟我訴訟法ニ於  
テハ無能力ナル裁判官ノ爲シタル行爲ハ他邦法ニテ一切無効トナスカ如キ嚴酷ナル趣  
義ニアラサル所ハ確著ナリ

回避ノ事由ニ付キテハ必スシモ裁判官又ハ訴訟人カ認知セサルヘカラスト云フノ義ニ  
非ス  
〔第四解、本條第一ニ對スル理由説明〕 本條第一ノ回避ノ事由ハ單ニ本文ニ掲グル如キ  
關係ヲ裁判官カ有スヘシト云フヲ以テ直ニ回避セシムルニ非ス必ス其訴訟ニ密着ナル



關係ヲ有シアルノ趣義ナリト知ルヘシ既ニ「ハンノフル」國訴訟法新草案第三十二條第一ニテハ其舊法第二十一條第一ニ於テ其間接ナル關係ヲモ回避ノ事由ト爲シアル規則ヲ改正シタリ必竟其間接ノ關係ヲ有スル場合ハ「其狀況ニ從ヒ」忌避ノ部分ニ屬スヘキモノナリ

本項ハ即羅馬時代ノ舊法ニ「裁判官自ラ關係ヲ有スル訴件ニ付キテハ之ヲ裁判セシメストアル原則ヲ再生セシメタルモノナリ抑裁判官カアル訴訟ノ原告又ハ被告タルノ地位例ヘハ參加人又ハ告知訴訟人トシテ其訴件ニ關係スル以上ハ即裁判官自己ニ關スルノ訴訟ナルナリ但裁判官ニ訴訟告知「本法第六十九條以下參照」ヲ爲シタルノミニシテハ未ク自己ニ關スル訴件ト稱スルニ足ラズ必ズ裁判官ノ其訴件ニ付キ原被告ノ一方ニ共同シ若クハ原被告ノ一方ニ對シ償還義務者タルノ關係即現實ニ償還義務者ヲラサルヘカラス果シテ然ラサレハ則不良ノ故意ニ出ル回避ノ事由ヲ續發セシメ易キノ弊アルヘケレハナリ

本項ノ共同權利者共同義務者ナル語ノ理義ニ付キテハ上ノ第二解ニ舉述スル本項ノ範圍擴張ノ動議ニ對スル駁論ノ趣旨ニ照ラシ攻究スレハ大ニ益アルヘシ乃裁判官カ直接ナル共同權利者タルヘキ場合ナルノ意義ヲ見ルヘキナリ而シテ例ヘハ裁判官或ル原告

會社又ハ被告會社ノ股分持主タル時其他之ニ類似スル場合ニ於テハ則直接ノ權利者義務者ト云フヘカラス是ニ於テ平即會社ニ裁判官カ某原告ト同様ニ某合資會社ノ株券ヲ所有シアリテ而シテ其清算勘定ニ付キ通告シ置キタル際偶其原告カ其會社ニ係ル債主權ニ關スル訴訟ヲ爲シタルニ此裁判官カ裁判シタリトテ其裁判取消ヲ訴出タル時高等商事裁判院ハ「字漏生國法」ニ依リ取消スノ理由ナシトテ棄却シタリ此事例タルヤ實ニ忌避ノ事由タルニ過キサルモノナリ

之ニ反シ裁判官或ル公會又ハ會社ノ社員ニシテ其負債ニ付キ無限責任ヲ荷フ時其會社又ハ公會ノ原告トナリ若クハ被告タルノ場合ハ固ヨリ前項ニ異ナル所ニシテ即裁判官ハ裁判權ヲ禁止セラルヘキナリ「バデン」國裁判年報第二十五卷參看

〔第五解、本條第二ニ對スル理由ノ説明〕 數多ク邦法殊ニ「ハンノフル」國訴訟法第二十一條第一「バデン」國同上第六十七條第二「ウエルテムベルグ」國同上第六十七條第二「字漏生國同上草案第六十四條第二」ハンノフル「國同草案第三十二條第二」ニ於テハ裁判官ト結婚ヲ約シタル許嫁ノ婦人ヲ配偶婦ト同一ノ者ト定メアルナリ然レモ許嫁ノ關係ヲ以テ回避ノ事由ト爲スハ妥當ナラズ抑婚約許嫁ニ付キテハ獨乙各邦大ニ其法制ヲ殊ニシ且實際ノ生活上許嫁ヲ以テ未ダ姻親ト看做サル所多シ又「字漏生國」千八百五十四年四月

二十四日ノ法律第三條ニ依レハ法律上許嫁ノ婚約ヲ以テ配偶婦ト同一ニ看做スノ趣義ヲ確示セリ畢竟許嫁婚約ノ理義ニ付キ其事由上ノ關係ニ據テ解釋ヲ下サントスルモ未タ法義上確乎タルニ至ラスシテ往々頗ル困難ナル場合ニ陥リ易シ然リト雖モ本法第三百四十八條、第三百四十九條ニ掲クル場合ニ於テハ自ラ別アリ乃訴訟人ノ許嫁婚約ノ婦人ハ證人タルコトヲ拒ムコトヲ得トアル規則ハ即訴訟人ト婚約シアル裁判官ニ對シ必ス本法第四十二條、第四十八條ノ規則ニ據リ忌避ノ申立ヲ爲シ得ルノ主義ニ符合スヘシ蓋テ漏生國裁判通則第一編第四百十三條ニ於テハ許嫁ノ關係ハ偏頗裁判ノ嫌疑ノ一事由ト明定シアリ

而シテ「アッタチーフ」結婚（互ニ結婚スヘカラサル障礙アル）ハ正婚ト看做スヘキナリ  
（預知セズシテ結婚シタルノ義）  
〔第六解、本條第二ニ對スル理由ノ説明〕親族及ヒ姻族ノ等級ヲ算スルニハ必ス民法ノ規則ニ從ヒ殊ニハ即各聯邦法ニ准據セサルヘカラサルナリ（「サックセン」國民法第四十八條以下法朗西民法第七百三十五條、普魯生內國普通法第一編第一章第四十條以下參考）而シテ本條ニテ特ニ明示シアラサルニ依レハ不法ノ結婚ニ因スル姻族モ亦此裏ニ包含スルモノト知ルヘシ又裁判官、訴訟ニ參加スル訴訟告知ヲ受ケタル者ト親族ナル時ハ回避セサルヘカラス何トナレハ被告知人ハ恒ニ補助參加人タルニ至レハナリ（本法第

七十一條參照

〔第七解、本條第四ニ對スル理由ノ説明〕抑本項ノ回避ノ事由ハ未タ訴訟ノ起ラサル以前ニ於テ如此キ關係ヲ爲シアリタル場合ニモ及ホスノ趣義ナリ乃「ハンノフル」國訴訟法第二十一條第六「ブラウンシュウアイヒ」國同上第四十八條第三「オルデンボッルグ」國同上第三條乙ノ四「ウールテムベルグ」國同上第六十七條第四「バイルン」國同上第四十條第五、普魯生國同上草案第六十四條第六ニ於テモ皆同義ナリ獨リ北部獨乙聯邦草案按第二十三條ニハ其會テ之アリシモ既ニ解散シタル關係ハ單ニ忌避ノ原由ト爲スニ過キサルモノト定メタリ然レモ實際ニ於テハ其會有ノ關係ニシテ仍ホ大ナル影響ヲ有スルコトアリ即檢察官カ裁判官ニ轉職スルハ往々之アル所ナルニ此場合ニ於テ殊ニ然ルコトアルヘシ訴訟代人ニ付キテハ本法第七十二條以下附添人ニ付キテハ本法第八十六條法律上代人ニ付キテハ本法第五十條、第五十七條及ヒ第五十條ニ對スル第四解ヲ參照スヘシ  
〔第八解、本條第五ニ對スル理由ノ説明〕本項ノ場合ハ只裁判官現ニ證人又ハ鑑定人トシテ審問ヲ受ケタル時ニノミ限レルモノニテ即法朗西訴訟法第三百七十八條第八ノ趣義ト相符合ス若シ「ハンノフル」國訴訟法第二十一條第五「ブラウンシュウアイヒ」國同上第四十八條第四「オルデンボッルグ」國同上第三十四條第三「バイルン」國同上第七十二條、普魯

生國裁判通則第一編第二章第四百十三條ニ於ケルカ如ク只裁判官ヲ證人タラシメント指名セタルノミニテ己ニ回避ノ事由ナリト定ムルハ則裁判官ヲ證人ニ指名スルコトハ遂ニ訴訟稽留ノ手段ノ爲メニ供用スルノ弊アルヘシト危懼スルモ亦其理ナシトモ云フヘカラス

實ニ本項ニ付キテハ再三ノ勸議アリシモ遂ニ採用スヘカラスト議定セリ(上ノ第二解參看)而シテ當時一議員ハ即裁判官ハ自ラ證人タルノ資格ヲ認体シテ原被告ノ申供ヲ審聽シ且實ニ證人トシテ供述スヘキ自己ノ意見ニ參酌シテ以テ本案ヲ裁判スルモ固ヨリ妨ケサルヘシト辨解シタリシハ太ダ當然ノ説ト云フヘシ特リ奇異ナルハ即治罪法第二十二條第五ニ是ニ同一ナル規則ヲ明示シアル所是ナリ

〔第九解 本條第六ニ對スル理由ノ説明〕 本項ノ趣義ハ裁判官下級ノ裁判所ニ於テ又ハ仲裁ヲ判手續ニ於テ職權上本案ニ參與シタル一切ノ事件ハ其何タルヲ問ハス必ス回避ノ原由ト爲スニ在ラサルナリ「ハンノフル」國訴訟法第二十一條第七「バイルン」國同上第四十條第六法朗西國同上第三百七十八條第八「本項」同シ而シテ概シテ回避ノ原由ト定メアルハ「ウールテムベルグ」國訴訟法第六十七條第六「オルデンボルグ」國同上第三十四條第二季漏生國同上草按第六十四條第七ナリ然レモ此各邦法ト雖モ例ヘハ立證處分

ニ從事シタル裁判官後日上級ノ裁判所ニ轉シタル時其訴件ニ付キ回避セサルヘカラスト爲ス如キノ趣義ナラサル所ニ注意スヘシ若シ如此キ規則アラシニハ裁判官上級ノ裁判所ニ轉職スル毎ニ恒ニ確平タル理由ノ之ナキヲカ爲メ甚ダ困難ヲ被ムルノ弊アルヘカラン  
又「バイルン」國訴訟法第四十條第六ニ於テハ曾テ裁判上調成シタル證書ノ提出又ハ之ニ對スル抗爭ニ關スル訴訟ニハ先キニ其證書ヲ起案シタル裁判官ヲシテ回避セシム而シテ其主義トスル所ハ即其裁判官ニシテ再ヒ其訴件ニ參與セハ必スシモ法廷ノ口頭審理ニ依ラスシテ別ニ意見ヲ加ヘテ裁判セサルモ保シ難ク且其裁判官カ證書ノ成立ニ付キ合議スルノ席ニ列スレハ必ス他ノ裁判官ノ意見上ニ強盛ナル影響ヲ及ホシ得ヘシト云フニ在ルナリ然レモ又如此キモノニシテ回避ノ事由ナリトセハ單獨裁判所ノ裁判官ニ對シテハ其回避セシメサルヘカラサルノ場合續々發生スルノ懼アルヘキ所ヲモ慮ルヲ要ス况ヤ裁判管轄ノ認諾ハ政府ニ於テ未ダ廢止セサルニ於テオヤ殊ニ本案ノ裁判ニ付キ其裁判官ノ參與スルハ反テ訴訟人ノ希望スル場合往々之アルヘキナリ然リ而シテ本法草按ニ於テハ適當ナル場合ニハ證書ヲ起接セル裁判官ニ對シ偏頗ノ嫌疑アリトシテ忌避ノ申立ヲ爲シ得セシメアルナリ「ハンノフル」國訴訟法第二十一條第十併ニ字漏

生國同上草按第六十五條第三ニハ石ノ偏頗ノ嫌疑ヲ一事由トシテ之ヲ明示セリ

〔原裁判〕 此原裁判ニ於テトハ即別ニ起シアル訴訟ノ爲メ其本件ニ對スル假差押假差留ノ指令又ハ刑事ノ訴件ニ付キ其事實ノ審理ニ參與シタル如キモノヲ含蓄セサルノ意義ナリ殊ニ此刑事ニ關スルモノ、如キハ訴訟法實施法第十四條第一ノ明文ニ依リ今ヤ益々疑ヲ容ル、ヲ要セス

〔裁判ノ言渡ノ際參與ス〕 當時檢察官トシテ裁判ノ言渡ニ參與セシ者裁判官ニ轉職セル場合ヲモ包含シアルナリ此事ニ付キテハ「バイルン」國訴訟法第四十條第六ニ規定シアリ又本法第五百六十九條、第五百八十六條、第五百八十九條、第五百九十五條、第六百四條以下ニ照セハ實際ニ之アリ得ヘキ事項ナリ

本條第六ニハ受命裁判官又ハ受託裁判官ニシテ原告又ハ被告ノ不服ヲ唱フル裁判ヲ言渡スノ際之ニ參與スル場合ヲモ包含スルモノ、如シ然レモ偏頗ノ了解シ難キ所ナリ若シ是レ受命裁判官又ハ受託裁判官カアル中間訴件ノ裁判ニ與カリタル場合(例ヘハ本法第八百六十二條第二項)ヲ指スモノト假定セシ平即其裁判ハ本來ノ上訴件ニ於テハ留ニ全体裁判ノ一成分ニ過キスノ之ヲ該裁判官カ裁判ニ參與シタルモノト云フヲ得ヘカラス又若シ抗告ニ付キテ(本法第五百二十九條)云フノ意ナリトセン平即該裁判官ハ是カ

裁判ニ參與シ能ハサルハ顯然ナルナリ

乃本條第六ノ末段ハ假令裁判官カ本案爭訟ノ裁判ニ參與シタリモ其受命又ハ受託ノ場合ニ於テハ職務施行ヲ妨ケラレサル意ト爲シテ初テ其當ヲ得ルノミ故ニ如此キ趣義ノ取除法トシテ解釋スヘキナリ

第四十二條 〔忌避ニ關スルノ條〕

裁判官ハ法律上職務施行ヲ禁止セラレタル場合併ニ偏頗ノ嫌疑アル場合ニ於テハ忌避セラレ得

裁判官ノ公平ナル可キコトニ反スル嫌疑ヲ辨明スルニ適當ナル事由アル時ハ偏頗ノ嫌疑アルモノトシテ忌避ノ申立ヲ爲シ得

忌避申立ノ權ハ各箇ノ場合ニ於テ原被告両造ニ屬ス

〔第一解、理由ノ説明〕 本條ハ猶ホ「ブラウンシュウアイヒ」國訴訟法第四十七條「オルデンボルク」國同上第三十五條「ウエルテムベルク」國同上第六十九條「ハンノフル」國同上草案第三十四條ノ趣義ニ於ケルカ如ク若シ裁判官タル者ノ公平ナルヘキコトニ反スル嫌疑ヲ辨明スルニ適切ナル事由アル時之ヲ偏頗ノ嫌疑トシテ忌避ノ申立ヲ爲シ得ルト云フ普通原則ニ止メタリ而シテ例ヘハ「バテン」國訴訟法第七十條、第七十一條法朗西國同上第